平成26年度指定スーパーグローバルハイスクール研究報告書・第5年次　平成31年3月　関西学院高等部

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成26年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究報告書・第5年次

平成31年3月　関西学院高等部

関西学院高等部
KWANSEI GAKUIN SENIOR HIGH SCHOOL

目　次

スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を終えるにあたって …… 2
研究開発完了報告書（別紙様式3） …… 3
研究開発実施報告書 …… 14
研究開発の活動実績一覧 …… 22
1．生徒の活動 …… 22
2．対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加（教職員の活動） …… 23
3．SGH視察受け入れ（成果発表会参加校のSGH校・アソシエイト校含む） …… 23
4．普及活動 …… 24
研究開発の内容 …… 27
■全学年 …… 27
■1年生　学年の目標【世界に目を向け、興味と関心を持つ】 …… 29
GLPの取り組み …… 29
GGPの取り組み …… 42
■2年生　学年の目標【さまざまな視点でグローバルな課題にある原因を調査・分析する】 …… 44
GLPの取り組み …… 44
GGPの取り組み …… 59
■3年生　学年の目標【グローバルな課題の解決について提案し実践する】 …… 61
GLPの取り組み …… 61
GGPの取り組み …… 88
■卒業生 …… 89
研究開発の評価 …… 99
評価手法の開発とその結果 …… 99
（1）GPS-Academic®による評価 …… 99
（2）意識調査　SGHアンケート …… 107
（3）関西学院大学留学・国際関係プログラムに参加した高等部出身者数の考察 …… 110
＜資料＞ …… 111

※文中の社名、商品名、サービス名等は、各社の商標または登録商標である場合があります。

スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を終えるにあたって

関西学院高等部長　枝川　豊

関西学院高等部は、2014年度（平成26年度）に指定を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業に取り組んで参りましたが、5年の年月を経てSGH事業を終えることになりました。この事業を終えるにあたり、関わってくださった運営指導委員の皆様、アドバイザーズ委員の皆様に御礼申し上げます。また、グローバル・スタディ等の授業や講演などのプログラムが、関西学院大学の先生方やJICAを始めとする国際機関、NGOなど多くの方々のご協力によって実施できましたことも重ねて御礼申し上げます。

数々の試行錯誤を経ながら5年間事業を遂行して、多くの果実を得ることができました。これまでも国際交流プログラムや国際理解教育の実施はありましたが、全校レベルでの広がりには至っていませんでした。SGH事業への取り組みを通して、1年次から3年次までの3年間の体系的なカリキュラムの構築ができあがりつつあります。生徒たちがグローバルな問題を意識する機会が格段に増え、特にGlobal Leader Program受講者は、問題発見からその解決に至るまでの力を養うことができました。その過程で経験できたカンボジアでの海外研修やアジア学院での国内研修など様々な学外での学びは、生徒たちにとって大きな転換点となり、課題への考察が深まるとともに、解決を思考する探求力向上に大きくつながりました。現場を知ること、自らの五感で感じ取ることの大切さを学ぶ貴重な経験となっています。その学びが、さらに、国内の問題にも目を向けるきっかけともなりました。

教育・授業改革の側面も併せ持つSGH事業により、昨年度、本校ではICT環境が整いました。全生徒へのタブレット端末の導入とあいまって、教員にとっても、このSGH事業への取り組みを通して、「主体的、対話的で深い学び」とは何かをじっくり考えるきっかけとなり、SGH事業での活動の展開などから多くを学び、実践する機会となりました。

SGH事業は2018年度で終了しますが、この経験を今後の日常の教育活動や正課授業にいかに反映させていくかが問われていると思っております。それこそがSGH事業の指定を受けた私たちの責務でありますので、今後も皆様方のご指導、ご助言を賜りながら、本校の事業目標であった「グローバルな視点と課題解決力をもつ総合的人間力の育成」に、さらに邁進してまいりたいと存じます。

研究開発完了報告書（別紙様式3）

1　事業の実施期間

平成30年4月3日（契約締結日）～平成31年3月29日

2　指定校名

学校名　　関西学院高等部
学校長名　　高等部長　枝川　豊

3　研究開発名

「国際化重点大学との高大連携による実践的課題解決能力の育成」

4　研究開発概要

全生徒対象（GGP）と選抜された生徒対象（GLP）の二重構造のプログラムを実施し、同一校地に位置する国際化に重点を置く大学との高大連携による課題研究およびその他の研修プログラムを通じて、高校生の目を国際社会に向けさせ、グローバル人材としての資質を高める。また、大学進学後のグローバル人材育成事業への参加を促進する。

5　管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経理等の事務処理	←	—	—	—	—	—	—	—	—	—	→	
運営指導委員会										1/24		

(2) 実績の説明

- ●教職員の雇用契約・給与支給等は学校法人関西学院人事部人事課が所管し、教職員の出勤管理等は関西学院高等部が高等部長の責任の下に担った。
- ●予算統制、会計処理および金銭出納管理については学校法人関西学院財務部財務課が所管した。日常の予算執行の承認権限は高等部長にあり、その事務は関西学院高等部の事務室が担った。
- ●学院本部の教育連携室が、SGHの取組にあたって外部機関（国際機関、企業等）との連携推進について支援した。
- ●関西学院大学の高大接続センターが大学教員派遣の支援をした。
- ●2019年1月24日に運営指導委員会を開催し、一年間の活動を専門的見地から指導、助言をいただいた。

6　研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
GGPグローバル・セミナー		5/2							12/12		2/1	
GGPポスターセッション				○	○	○	○	○	○	○	○	○
GGPディベート		○	○	○								
課題研究 （総合学習・読書科）	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
GLPへの説明会	○	○										
グローバル・スタディ （学校設定科目）	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
GLPフォーラム												
GLPセッション・デイ									12/7 12/12			
国内フィールドワーク				7/30 〜	8/1							
海外フィールドワーク			○	○	8/10 〜16							
GLPセミナー				7/11					12/7 12/18			
語学力向上	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
アドバイザーズ委員会										1/24		
SGHフォーラム （成果発表）										1/24		

(2) 実績の説明

●学校全体、または学年全体を対象として実施されるGGPプログラムでは、本校のSGH指定5年間を通して、三つの取り組みを行ってきた。まず、グローバル・セミナーでは、これまで、国際分野で活躍されている著名な方々、関西学院大学の教員、本校の教員などに講師をお願いしてきたが、5月のセミナーでは、より身近な体験から学べるよう、本校卒業生で1年間の海外留学を経験した大学1年生と、KG Marchéの活動を行っている高校3年生が講師を務め、自分の体験を通して学んだことを話してもらった。7月には、1年生全員を対象に、本校卒業生で現在（株）NewsPicks社の西村脩平氏を講師に迎え、1年生全員が取り組むGGPタブレットセッションに向けて講演をして頂いた。次に12月の全校生対象のセミナーでは、吉岡秀人氏（医師、特定非営利活動法人ジャパンハート最高顧問/ファウンダー）をお招きし、「ジャパンハートによる国際医療活動を通して『人生』を考える」をテーマに、ミャンマーやカンボジアでの小児医療に人生を捧げて献身されている吉岡氏の活動について感銘深い講演をして頂いた。

　次に、ホームルームを活動の場とした、学年別のGGP活動では、1年生が「GGPタブレットセッション〜インターネットと通して世界の問題に目を向ける」取り組みを行った。今年度より、1年生全員がiPadを持つようになったので、それを利用し、世界で起こっている諸問題を考え、知識を深める取り組みで、グループに分かれそれぞれのテーマについてプレゼンテーションを行った。2年生は全員で、「イノベーションプログラム６タイプ」をテーマに、エゴグラムによる自己分析を通して、6つのタイプに生徒たちが分かれ、それぞれ似たタイプが集まった集団、違うタイプが集まった集団で問題解決にあたる時、どのような違いがあるか、などを調べる研修を行った。3年生は、全員が卒業論文に取り組み、10月頃に論文が完成し、1月には、各クラスで全員が自分の研究についてプレゼンテーションを行い、その結果、互選で優秀と認められた生徒が、クラス代表として、学年全体の前で、プレゼンを行う「課題研究発表会」を行った。2018年度の研究論文発表会では、9人の発表者の内、優秀論文賞（優勝）「厳しい部活動は生徒たちにどのような影響をあたえるか」、第二位「なぜオスマン帝国はレパントの海戦で神聖同盟軍に敗れたのか」、第三位「自動運転の実現により社会はどのように変化するのか」が賞を受けた。優勝した研究では、生徒にアンケートを行い、その結果を元に、厳しい部活動に参加している生徒の方が、学習面でも上位であることなどの研究を発表した。

　各教科におけるSGH活動の浸透については、「読書科授業」で論文作成（課題研究）に取り組み、英語科授業において英語の四技能をカバーするコミュニケーション能力向上を目指して授業が展開された。（英語検定、GTEC等の外部試験への参加を積極的に行った。）また引き続き、現代社会、地理などの社会科授業では、国際協力、国際機関、格差の問題などが授業の中で重点的に取り扱われるなど、教科授業を通して、SGH事業の推進を行った。また、今年も年度当初と年度末に、グローバルな視点についての全生徒対象のアンケート調査を行った。同じ28問の質問を行い、1年間の取り組みで生徒の意識がどう変わったか、を調査した。

●各学年40名を上限とする希望生徒対象の特別授業であるGLPとして、「国際協力とそれに関連する国際的問題」をテーマに、課題研究につながる多くのプログラムを実施した。

▶学校設定科目　「グローバル・スタディ」：1、2年生は週1時間（木曜7限）、3年生は週2時間（水曜5,6限）
実施完了

枠組みは平成29年度を踏襲して実施した。各学年の計3クラスを開講。1年生には国際的な諸問題や国際協力に関する導入的なテーマを、2年生は国際的な諸問題について深く学ぶことを、3年生は深い学びを経て問題解決のために行動することを目標にそれぞれ設定した。1、2年生は各テーマを専門とする大学教員の担当授業で、講義を聞いて、その内容を英語でまとめたり、生徒が調べたことを英語でプレゼンしたり「課題研究」につながる内容を学習した。今年度の最も大きな変更点は、3年生に対して、一般企業と連携してインドネシア・バリ島の高校生とインターネット通信（Skype）による協議で課題解決のための企画実施を行う授業を導入したことである。これまでの、食堂と連携した難民支援プログラムと、文化祭で他者を巻き込んだり社会にアプローチしたりして実践的なプロジェクトを実施するプログラムに加え、英語コミュニケーションにより、異なる国や文化・価値観の生徒と協働して身近な社会問題解決に取り組む活動を行うことで、課題発見・情報の収集と整理・企画立案・広報・交渉・実施・振り返りといった、より実践的な能力の育成に努めた。

▶GLPセッション・デイ：　実施完了

外部講師を招いてグローバルな課題についての勉強会を行い、課題研究につながる知識や情報を収集した。

▶フィールドワーク：　実施完了

「国際協力」というテーマに関連した国内外フィールドワークを実施

①国内フィールドワーク：2018年7月30日〜8月1日　途上国からの研修生が有機農業の技術や共同体づくりについて学ぶアジア学院（栃木県）で実施

②海外フィールドワーク：2018年8月10日〜16日　カンボジア（シェムリアップ地区）で、遺跡修復の国際協力や農村支援、女性自立支援について学ぶ

▶論文作成（課題研究）3年生は、《国際協力とそれに伴う諸問題》に関連したテーマを各自が設定し、課題研究に取組み、リサーチを行い、研究論文を作成した。

●『課題研究外』のプログラム

▶GLPセミナー：　実施完了

日本の文化やグローバル化を様々な教科の視点から知る研修について、国語科（能について）、数学科（数学研究発表から考えるグローバル人材）・社会科（児童労働とフェアトレード、問題解決のための行動について）を実施した。

▶英語版学校ホームページの維持、管理：2018年度も随時内容を更新し、充実に努めた。

7　目標の進捗状況、成果、評価

GGPの目標である、生徒の目を世界に向けさせるということに関しては、アンケートの結果（研究報告書に詳細を掲載）を見ても微増ではあるが向上が見られ、一定の成果をあげているのではないかと思われる。また、個人レベルでは、校外の色々な国際交流活動に自主的に参加する生徒が増えている。1年生全体を対象にしたホームルームをベースにしたGGPの取り組みも3年目を迎え、学校の取り組みとして定着させることができた。GGPと異なるGLPの目標は、リーダーとしての資質育成である。もともと、国際問題に対する学びや行動についての意識が強い生徒が集まっているが、GLPでは特に協働・チームワーク・意識の共有・表現や広報・振り返りといった能力をリーダーとして必要な資質に位置づけ、それを可能にすべく各種のPBL型のプログラムを取り入れた。詳しくは詳細の報告で述べるが、生徒はGLPを通じて多様な価値観の理解やプレゼンテーション力、他者を巻き込むなどのスキルを必要と感じ、実際にそれらを伸ばすことが出来た。SGHの目指す主体的な学びや実践的課題解決能力を、社会で求められるこうしたスキルと設定するならば、3年生の段階で社会や世界との接点を持ち、成果が可視化できるPBLは有効であると考えられる。

ただし一方で、PBL型のプログラムは、そのプロジェクト自体が目的化してしまい、本来プロジェクトの背後にある解決すべき問題に対する意識や理解の深化につながらない可能性も高い。楽しく企画を実施して終わりとならないよう、生徒にやり甲斐や達成感、実績を与えると同時に、プロジェクトの実施後に改めて問題に対する理解の深化や振り返り等をできる枠組みが必要である。そのためには、もともとPBL型のプログラムに必要な生徒への個別対応を密にできるような、質的、量的な指導の体制、すなわち指導する側のしっかりした基礎的な指導、評価の視点、意識や情報の共有等のソフト面が必要である。そして、それらのためには、学校としてのグローバル人材やリーダーシップの定義づけや必要な資質の明文化等の確固たるビジョンが必要となる。

8　5年間の研究開発を終えて

（1）教育課程の研究開発の状況について

本校SGH事業における教育課程上に明確に位置づけられた取組は、平日の7時間目等に設定された「グローバル・スタディ」の授業である。指定初年度（平成26年度）は、二学期から開始し、水曜7時間目に、1年生1クラス、2、3年生1クラスの2クラスを開設し、GLP（グローバル・リーダー・プログラム）を選択した生徒たちが参加した。7月の体験授業に始まり、三学期にかけて17回程度の授業が行われた。担当教員は、関西学院大学の専任教員（全部で5名でそのうち2名が外国人教員）が交代で務め、授業では基本的にすべて英語が用いられた。1年生への授業内容はresearch, discussion, presentationの英語でのやり方を学ぶ内容、EUIJシンポジウム（EUに関する諸問題を学ぶ）への準備、国際協力に関する授業を行い、最後に全員がそれぞれのテーマでプレゼンを行った。2、3年生への授業内容は、The Millennium Development Goalsを学習し、選んだトピックについての解決策を英語で考えていくプログラムをして、特に世界の食糧問題が多く取り上げられた。その後、1年生と同様、EUIJシンポジウムへの取り組み、全員がプレゼンする発表会を行った。（詳細は研究報告書平成26年度版参照）

2年目に当たる平成27年度からは、1年生対象のGSⅠと2、3年生対象のGSⅡを正式授業として開講し、学校設定科目（外国語）1単位として認めることとなった。前年の試行授業を通して蓄積された経験を活かすべく、継続して担当してもらった大学教員が3名、新たに7名の大学教員にお願いした。やはり、特定の大学教員に毎週の授業を担当してもらうことは負担が大きく、少しずつ担当して頂き、それぞれの先生がグローバルな諸問題について、専門領域のテーマを扱っていく「オムニバス形式」を採用し、また3時間を1ユニットとして、2時間を大学教員が担当し、最後の1時間を高等部教員（英語科）が担当し、大学教員の2時間分の授業のまとめを行う形式を定着させた。大学の専門教員によるオムニバス形式は内容的に非常に有意義ではあるが、受講生徒にとって、「聞きっ放し」、「やりっ放し」にならないよう高校教員がしっかり定着させ、評価可能で、また確実にフィードバックできる形の「まとめ」授業が大変重要であることが分かった。受講生徒は、まとめの授業の中でGLPノート（ポートフォリオ）を継続的に作成し、それぞれの授業に関する学びをどう受け止めたかを詳しく記録していった。このGLPノートを中心に、学年末に担当の高校教員が評価を行い、単位を認定した。

3年目に当たる平成28年度からは、1年生対象のGSⅠ、2年生対象のGSⅡ（ともに木曜7時間目に設定）を前年度から継続して実施し、さらに3年生対象のGSⅢ（3年生の選択授業の一講座として、週2単位履修・水曜5、6時間目）

を新たに開講した。そして、3年間のグローバル・スタディの授業の流れを、1年生のGSⅠでは「世界を知る、世界を体験する（基礎的・体験的な内容を中心としたプログラム）」、2年生のGSⅡでは「世界を学ぶ（専門の大学教員から深く学ぶ）」、3年生のGSⅢでは「世界の問題解決のために行動を起こす」、というふうに整理した。GSⅢの授業では、生徒が問題解決のために主体的に学習し行動することが目指され、前年度から始まっていた、生徒たちの手による難民支援プロジェクト「Meal for Refugees」（M4R）の取り組みを行ったり、パネルディベート、ロールプレイング等の手法を用いて主体的学習を行った。また2学期には文化祭（中間成果発表会）での研究発表をグループで行なうなどの取り組みを実施した。

指定4年目（平成29年度）、5年目（平成30年度）については、そのような3年間の流れを継続し、さらに安定させ、ブラッシュアップしていく取り組みを行った。特に、GSⅢでは、「M4R」の取り組みに加えて、インドネシアのハラパン高校との交流Skypeを用いて行う取り組みが始まり、その後、相互の訪問交流が行われ、協力して課題研究に取り組む方向に進んでいる。

このように3年間の授業「グローバル・スタディⅠ・Ⅱ・Ⅲ」は、高校1年次：1単位、2年次：1単位、3年次：2単位の、合計4単位を通して、グローバルな諸課題に目を向けさせ、それを学び、主体的に行動する力を育成するプログラムとして、5年間にわたる本校SGH事業の中核として確立されたと考えている。尚、教育課程上の扱いとしては、GSⅠとGSⅡはそれぞれ1単位、通常の履修単位にプラスされる形で行われ、GSⅢ2単位は、自由選択科、通常履修の範囲内で履修された。

「グローバル・スタディ」以外での、教育課程上の取り組みとしては、生徒全員が「読書科授業」を通して、リサーチ方法を学び、独自の選んだテーマについて「課題研究」を行い、論文を作成する「読書科卒業論文」の取り組みが行われた。毎年、生徒数名の研究成果が、権威のあるコンテスト等で高い評価を受けている。

さらに、公民科の現代社会の授業においては、「国際協力」「環境問題」などの領域が重点的に取り扱われ、情報科授業においてはパワーポイントを使った「プレゼンテーション能力の向上」を目指す取り組み、英語科授業においては、「CEFR：B1～B2レベル」を目標とした四技能発達、特に英語によるプレゼンテーション、ディベートの取り組みなどがこの5年間、継続的に行われ、多くの授業でSGHの研究テーマに合致した授業が展開された。

また、各学年のホームルーム活動を通して、SGH事業に関わる活動を行った。特に、1年生のグローバルポスターセッション（30年度はグローバルタブレットセッション）の取り組みは、大変、充実したものとなった。グローバルな諸問題について、1年生全員が、グループに分かれ、学年ごとに個性を出しつつ、リサーチし、考え行動した結果をプレゼンするもので、優秀なプレゼンを全体の前で発表したり、SGH甲子園（関西学院大学主催）にて、ポスター発表するなどの取り組みが実施されてきた。

その他に、GLP、GGPの両プログラムを通して、色々な取り組みが行われたが、それらを総合すると次のようにまとめられる。まず、本校生徒全員に対しては、必修授業（主に読書科（総合学習）、社会科、情報科、英語科）において、SGH事業の趣旨と目的に沿った学習活動、能力開発が行われ、講演会などを通じて「グローバルな諸課題」に関する、関心、背景理解を高め、1、2年生時のホームルーム活動を通じて、生徒たちが自発的にグローバルな問題に対してアクティブラーニングを行い、3年生では各自の課題研究である「卒業論文」に繋がっていくという流れを確立し、グローバル人材としてのコンピテンシーの育成が図られた。

次に、特別なプログラム（GLP）に参加した生徒に対しては、グローバル・スタディの授業を中核に、色々なプログラムやアクティビティを通して、大学の研究者や国際協力団体の専門家からの指導を受け、自ら学び、行動する中で、アクションを起こし、「社会的起業」につながるような流れが形成された。一例としては、GLP生徒による「Meal for Refugees（M4R）」の取り組みが挙げられる。指定当初、関西学院大学といくつかのSGH校による、EUIJシンポジウムという高校生による発表、討論の機会が始まりである。これに対する準備学習のために、EU（欧州連合）の諸問題について学ぶ中で、「難民の受け入れ」という問題が取り上げられ、そこから世界の「難民問題」への関心、理解が深められていった。それは、やがて難民問題の専門家からのお話を聞くだけでなく、関西学院大学に学ぶ元難民学生から生の声を聞く機会を設けるなど、発展的に展開した。折しも、シリア難民のヨーロッパへの大量流入が世界的な問題になり、この問題が大きくクローズアップされることとなった。しかし、この難民問題を、遠く離れた中東やヨーロッパの問題に終わらせるのではなく、自分達に何ができるのかを生徒たちが自問し、考え、行動したものが「Meal for Refugees」の活動である。学校の食堂で、発展途上国由来のメニューを提供してもらい、その売り

上げの一部を難民支援に充てるもので、メニューの選定、食堂を運営する生協との交渉、情宣活動などすべてを生徒たちの手で行った。この活動は、継続的に行われている。このように、生徒たちがグローバルな問題に対して、主体的に行動することがSGH事業によるグローバルなコンピテンシーに非常に重要な要素であると考えられ、この5年間の取り組みの中で明らかになったものの一つである。

「Meal for Refugees」の他に、環境問題から食糧問題へ、そして地産地消の問題へ発展した「KG Marché」の取り組み、インドネシアのハラパン高校との交流を通じて「地域開発」などを考える取り組み、地域の伝統的特産に目を向ける「和ランタン作り」の取り組みなど、生徒の手による様々なプロジェクトが実施された。これらこそ、5年間の本校SGH事業の重要な成果物であると考えられる。

しかし、それらプロジェクト一つ一つは、高校生らしい稚拙さや未熟さも含んでいる。評価の仕方によっては、「大したことはない」と考えられるかもしれない。しかし、高校生としてそのような活動の面白さを知ることにより、将来に大きな力となることが想像され、これらのアクティブラーニングを経験した生徒たちが、大学に進学後、獲得されたそのコンピテンシーを発揮し、更なるアクションにつなげていくことが期待される。

（2）高大接続の状況について

本校は、同一法人に属する「継続校」であるため、卒業生の大部分がスーパーグローバル大学に指定されている関西学院大学（11学部）に進学している。本校から関西学院大学への進学に関しては、本校の定める成績条件をクリアし、またCEFR B1レベルの英語力を付けることが求められている。ここ4年間で見ると、2016年度、288名（306名中）、2017年度288名（305名中）、2018年度（本年度より男女共学）353名（382名中）、2019年度（本年度）352名（381名中）が関西学院大学へ進学している。また、SGH事業の内容に最も関連性の高い領域を研究する、国際学部、総合政策学部への進学者数も、両学部合計で2016年度（26名）、2017年度（34名）、2018年度（46名）、2019年度（53名）と増加している。またGLPプログラムを受講した卒業生には、他大学へ進学した者もあり、慶応義塾大学総合政策学部、早稲田大学総合政策学部、国際基督教大学などに進学している。

次に、本校生徒による大学授業の受講について報告する。本校生徒の大学授業受講については、SGHの以前から行われており、英語力の高い生徒（英検準一級レベル以上）に対して、関西学院大学言語教育センターが行っている英語インテンシブプログラムの授業を大学生と一緒に受講したり、各学部が開講する指定された科目を受講するシステムを持ち、希望した高校3年生が、午後の時間帯、高校の授業を抜けて、選択科目の扱いで受講してきた。これらの高大連携は、大学の単位認定を伴わない形であった。

SGH指定後、大学の開講するグローバル関係の科目について、条件が整えば、大学入学後に単位認定されるシステムが確立された。計画段階では、グローバル科目の入門的な講座である「世界市民論」がその対象となっていたが、開講時間が高校の時間割、スケジュールに合致せず、受講できなかった。大学授業の受講については、指定された科目の開講時間が、高校の時間割の制約に合致しないことが多く、それが最も大きな障害である。その結果、指定3年目（2016年）より、国際学部開講の「国際地域理解入門A」をGLP生徒3名が受講、共通教育センター開講の「グローバル世界における日本の文化力」をGLP生徒2名が受講した。指定4年目（2017年）は「国際地域理解入門A」をGLP生1名が受講、指定5年目（2018年）は、集中講義で行われた総合政策学部開講の「総合政策トピックスA」をGLP生2名が受講した。これらの受講については、大学生と同様の方法で評価が出された。グローバル関連科目以外の高大連携科目受講実績としては、2018年度を例とすると、英語インテンシブプログラムを11名が受講、その他の科目として、「日本語学入門」（文学部）、「マクロ経済学Ⅰ」（経済学部）、「心理科学入門Ⅰ」（文学部）「総合Q（言語学関連）」（文学部）をそれぞれ1名ずつが受講した。成績評価の結果も全員が合格点を取り、中には大変高い点数を取っている生徒もいる。

大学教員の本校SGH事業への参加の度合は大変高い。運営指導委員のメンバーに3名の大学教員がおられ、アドバイザーズ委員（関西学院大学の協力教員）には9名の大学教員がおられる。GLPプログラムの中核となるグローバル・スタディⅠ、Ⅱの授業においては、年間で、15名程度（実数）の大学教員が授業を担当しており、他に講演会講師として招くなど、スーパーグローバル大学に指定されている関西学院大学との継続校であるメリットを活かして、大学教員の協力が非常に盛んに行れた。また大学の事務部局とも連携し、関西学院大学高大接続センター高大連携課、国際連携機構などの協力体制の元に、大学教員や留学生の参加調整などを行って頂いた。

（3）生徒の変化について

5年間を通して、全生徒に年2回のアンケート調査を行い、国際理解、英語学習などに対する意識、レディネスを調査した。また全生徒の結果と、GLPに参加した生徒の結果を比較して考察する。（p.108「SGHアンケート全校生徒集計結果5年間の推移」参照）アンケートは28個の質問事項からなる。まず、GGP（全生徒を対象とする）の目的であった、生徒の目を世界に向けさせるという点については、「国際的な問題についての話題、ニュースに関心がある」（Q23）という質問で、肯定的な答えが72%（2014）から75%（2018）に増加した。また「ボランティア活動全般に関心がある」（Q27）という質問に対して、肯定的な答えが56%（2014）から59%（2018）に増加した。

他に有意に向上したものは、「英語に慣れている」（Q1）：40%→47%、「将来、英語力が必要だと思う」（Q3）：92%→95%、「日本人は外国人とのコミュニケーションが苦手である」（Q5）：90%→75%、「日本、日本人は外国から信用されていると思う」（Q17）：74%→83%、「異なる国の人々が相互理解する上で、文化や宗教の違いは障害でない」（Q21）：55%→57%であった。 逆に、「外国人とコミュニケーションをとることに慣れている」（Q4）：60%→33%、また将来の留学への志向に関する質問では、総じて数値が悪くなっている。その他の事項については、ほぼ横ばいの結果が多い。これについてであるが、本校では2015年度に男子校から男女共学に移行したため、男女の人数比率が、2014年は全員男子、2015年は1年生のみ共学、2016年は1,2年が共学、2017年に完全共学と、毎年変動し、その性差がアンケート結果に影響を与えていると考えられる。例えば、「将来、国際的な舞台で仕事がしたい」（Q13）では、2014年から、肯定的な答えが、60%→59%→42%→46%→50%と推移しており、男子比率が減っていく過程で、肯定的な答えが減っていくものの、共学完成した最後の2年は上昇傾向に転じている。したがって、2014年と2018年のデータの比較は、性差の違いから妥当ではないと考えられ、男女比がほぼ安定した2016年からここ3年間の推移を見る方が合理的である。

2016年から3年間の比較では、ほぼすべての質問事項で、有意の肯定的な上昇が見られ、SGH事業の効果が表れていると考察できる。例えば、「大学時代に海外留学したい」（Q9）：55%→61%、大学卒業後、海外留学したい」（Q10）：37%→42%、「国連などの国際的な仕事に関心がある」（Q14）：23%→29%、「日本は、発展途上国に積極的に援助をすべきである」（Q26）：76%→82%、「海外でのボランティア活動に関心がある」（Q28）：43%→48%、など生徒の意識が向上していることが認められる。

次にGLP生徒と一般生徒の比較（p.107「平成30年度SGHアンケート一般・GLPの比較」参照）では、2018年の結果で、GLP生徒がほぼすべての質問事項で、肯定的な比率を平均すると76%となり、質問5、16、21などアンケートの聞き方が必ずしも肯定的な態度を聞いた質問ではない場合を除けば、もっと高い比率を示している。例えば、「外国人とコミュニケーションすることに慣れている」（Q4）：GLP生59%→一般生33%、「国連などの国際的な仕事に関心がある」（Q14）：GLP生67%→一般生29%、「海外でのボランティア活動に関心がある」（Q28）：GLP生83%→一般生48%、などGLP生が一般生に比べて高い肯定的姿勢を持っていることがわかり、GLPプログラムの効果が認められる。また2016年以降、同様の傾向を示しており、GLP生がもともとグローバルな事柄に積極的な性向を持っているとも考えられるので、それがGLPプログラムの成果であると単純には考えられない側面もあるが、やはり、GLPプログラムの効果が表れていると考えている。

また、毎年、GLP生に対して実施しているGPS-Academic®テストの結果も、生徒の変化を知る指標の一つである。同テストは、批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力の3つを測定するもので、2017年度のGLP生の同テストの結果を例に取ると、2年生GLP生徒においては、一年前に比べて、創造的思考力において、特に「問題をみいだし解決策を生み出す」という問題に対しAゾーン以上の割合が、前年の8%から44%に向上した。創造的思考力において、「論理的に組み立てて表現する」に対して、Bゾーン以上の割合が、前回43%から64%に上昇するなど、GLPの効果が認められるが、「生徒の変化」を知る上では、あまりに観点が細かく、また、GLPが毎年約40名という少人数のデータしかない点を考慮すると、生徒の個性や個別的な変化が大きく影響してしまい、全体的傾向を知るのは難しかったと言える。（詳細は各年度の研究報告書参照）

以上が、客観的な指標に基づく、「生徒の変化」の概観であるが、教員として主観的に感じられる生徒の変化としては、GGPプログラム（一般生徒）については、やはり繰り返し、学校でグローバルな諸問題についてのプレゼンテーションやアクティビティを行う中で、そのような問題への心理的距離感が縮まり、身近な問題意識を持つようになっていると感じられる。それは、海外から本校を訪れる留学生や訪問団、ゲストスピーカーなどに対する接し方が以前

よりごく自然な感じになっていることから伺われる。以前は、その方々自身や、その方々が語られるトピックが自分とは関係のない遠い世界のことであるという感覚であったものが、日常的に身近にあるという感覚に変わっていっているように考えられる。また、それはよい意味でも、悪い意味でも「慣れ」を生じる。悪い意味では、「分かったような気になってしまう」「またその話か」というような、感覚の鈍化という弊害も感じられた。次に、GLPプログラム（選抜された各学年約40名が選択）に参加した生徒の変化については、生徒たちがポートフォリオに書いた感想のいくつかを紹介したい。「普段の授業とは違うスタイルでの学びを通し、知識を得ることに主体的になれたと思う。毎日、新聞を読み、世界の流れを把握しようとしている自分に驚いている」、「事前学習やまとめの作業を通して、英語で自分の意見を書き、まとめ、学んだことを分かりやすく図式化することに難しさを感じながらも着実に自分の能力を上げることができた。英語で話すことやレポートを書くことに対しても抵抗がなくなった。」、「以前は『グローバル化』と言われると世界のことばかりに目を向けていたが、『グローバルを考えるためにはまず身近なことから知る』という言葉のおかげで自分の住んでいる地域や日本のことに目を向けるようになった。」、「膨大な量の情報の中から今、自分にとって必要で重要な情報を素早くピックアップする能力が身についた。グループ発表をする際は様々な情報や各々の価値観を上手に一つの方向性にまとめる能力もついてきた。」GLPプロクラムについては、もともと意欲と能力の高い生徒が集まっているので、こちらが意図したコンピテンシーを着実に身につけていっていると感じられる。

（4）教師の変化について

まず以前から実施している学校評価アンケートの結果から、アクティブラーニングにつながると思われる授業改善に関する質問と、SGH事業に関連する国際理解教育関連の質問について概観する。まず、2010年からのデータが残っている質問「教員は質の高い授業を目指し、授業研究を十分に行っている」に関しては、肯定的な答えをした教員は、83.0%（2010年）、89.2%（2011年）、81.6%（2012年）、92.7%（2013年）、95.1%（2014年）、91.3%（2015年）、93.9%（2016年）、94.2%（2017年）であった。質問「教員は授業研究の成果を生かし、授業改善の工夫を行っている」の関しては、肯定的な答えをした教員は、73.2%（2010年）、81.0%（2011年）、86.9%（2012年）、85.4%（2013年）、95.2%（2014年）、91.3%（2015年）、89.8%（2016年）、90.4%（2017年）であった。2010年の値と2017年の値を比較すると、授業改善に対する教員の意識は高まっていると考えられる。また国際理解教育関連の質問は、SGH指定後の2014年以降しか行われていないが、質問「学校は生徒の国際的な諸問題（国際協力、環境問題、紛争など）への関心を高める努力をしている」に対して、肯定的な答えをした教員の割合は、85.7%（2014年）、97.8%（2015年）、95.9%（2016年）、90.2%（2017年）となっている。質問「学校は語学力を含み、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」、これに対して肯定的な答えをした教員の割合は、88.1%（2014年）、91.3%（2015年）、93.9%（2016年）、100.0%（2017年）であった。質問「学校は生徒が留学を希望したり、海外に行ってみたいという意欲を育んでいる」、これに対して肯定的な答えをした教員の割合は、90.4%（2014年）、89.1%（2015年）、93.9%（2016年）、92.2%（2017年）となっている。これらのデータから見ると、グローバルな取り組みについて、教員全体の意識も向上していると考えられる。

次の調査として、SGH指定最終年度に当たる2018年度に教員全体に、SGH事業全体、またアクティブラーニングに関する意識調査を行った。38名の教員の意識調査結果によると、それぞれ肯定的に答えた人数は、「SGHの主旨（課題発見・課題解決に向けた主体的学び）に関してどう思うか」：38名、「GGP（HRでの活動、全体講演会）の意識についてどう感じるか」：35名、「GLP（有志生徒対象の特別プログラム）の意義についてどう感じるか」：38名、「自身の感覚としてGLPの活動内容についてどの程度知っているか」：29名、「自身の感覚としてSGHへの関与の度合いはどの程度か」：20名、「自身の授業などで、グローバルな問題やグローバル人材に求められる資質などについて取り上げたか」：25名、「自身の感覚として授業などで主体的な学び、アクティブラーニングの手法を取り入れたか」：24名となっている。この結果を見ると、教員の感覚として、全員SGHの重要性は認識しつつも、自分の関与については、必ずしも全員が積極的に関与したわけではないと言う結果となった。またグローバルな人材育成、アクティブラーニングへの移行についても、必ずしも大多数には至っていない結果となった。記述式の答えの中で、特徴的なのは、アクティブラーニングや「主体的学び」について、その意義は認めつつも、「適切な評価が可能か」、「本当に力がつくのか」「深い学びにつながるのか」など、危惧を感じている教員がいることが分かった。

以上のことから、SGH事業について教員の意識は、総合すると、グローバル人材の育成に向けて、SGH事業やそれに伴う主体的学習、アクティブラーニングの意義、これから高まる重要性について新たな認識を持つようになると同時に、変化への不安、危惧を感じている状況にある。

（5）学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

まず、授業全般における大きな変化として、アクティブラーニングを目指した授業のICT化が始まったことが挙げられる。2016年度以降、検討が重ねられ、またハード面の整備が進み、2018年度のはじめまでに、全教室で無線LAN化、黒板を撤去しホワイトボードに変更、短焦点天吊り型プロジェクターの設置が行れた。そして2018年度入学生から、生徒全員が、iPadを持つようになり、また全教員もiPadを持つようになった。これにより、1年生については、教育支援アプリケーションのClassiを利用し、インタラクティブな授業利用のほか、連絡事項の伝達、ポートフォリオ蓄積など、ICT化が始まっている。教員間でも、教材の提示、プロジェクターによる板書はもちろん、会議、ミーティング等でのペーパーレス化が進められた。SGH事業においても、1年生対象のGGPプログラムが、グローバルポスターセッションから、グローバルタブレットセッションに変わり、iPadを使って、リサーチ、プレゼンするようになった。GLPプロクラムでも同様に、iPadを使った授業展開が行われている。また、SGH事業に限らず、ほとんどすべての授業でiPadを使ったアクティブラーニングを目指した授業が志向されている。今後さらに教員のiPad利用能力が高まり、ICT教材の質的向上が進めば、アクティブラーニングの発展が見込まれる。

保護者の変化については、学校評価アンケートが唯一の数値評価できる資料であるが、2014年のアンケートから国際理解教育に関する質問事項が加えられたことから、SGH以前の保護者の意識と、現在の意識がどう変化したかを知ることはできない。2014年からの保護者の意識に関する変化の結果は以下の通りである。まず、3つの質問がなされている。質問（1）「学校は生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている」、これに対して肯定的な答えをした保護者の割合は、73.4%（2014年）、73.2%（2015年）、77.4%（2016）、73.3%（2017年）であった。質問（2）「学校は語学力を含み、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」、これに対して肯定的な答えをした保護者の割合は、71.9%（2014年）、75.9%（2015年）、74.1%（2016年）、71.9%（2017年）であった。質問（3）「学校は生徒が留学を希望したり、海外に行ってみたいという意欲を育んでいる」、これに対して肯定的な答えをした保護者の割合は、65.6%（2014年）、64.7%（2015年）、63.6%（2016年）、65.5%（2017年）となっている。全体的には比較的高い割合を示しているものの、SGH指定5年間で見ると、大きく変化したとは言えない状況である。これは、学校の取り組みが十分に保護者に伝わっていない可能性が考えられる。SGHに関する配布物や学校ホームページでの情報提供が、保護者の目に入っていない場合が多いのではないか、と考えられる。

（6）課題や問題点について

5年間を振り返って、「失敗」と感じられるような点はなかったが、指定前、指定直後に、課題だと考えていたこと、懸念していたことは、年を重ねるにしたがって、内容的に変化してきたように思える。

本校SGH事業では、「課題研究」と「高大連携」が大きなキーワードとなっている。この二つがどのようにつながるのか、が最大の課題であったと思われる。本校は、総合大学である関西学院大学の継続校であり、キャンパスも隣接している恵まれた環境にありながら、なお、高校生の課題研究と大学がどうコラボできるのか、そのノウハウ、実際の内容は、決して明らかではなかった。当初は、SGH事業で、生徒たちに色々なイベントを提供し、それに触発されて生徒が、自分の課題研究のテーマを見つけ、そのテーマに関する専門分野の大学教員につながり、アドバイスをしてもらうというモデルを想定し、そこをどうつなぐか、が課題と考えていた。それは理想的な形ではあるが、高校生の段階で短時間に大学教員の個人指導を受けられるまでの「研究」に至るのは、現実的には難しく、多岐にわたるテーマごとにばらばらに大学教員にアドバイスを依頼するということは現実的には不可能であった。これは、本校が伝統的に取り組んできた「卒業論文」をストレートに「課題研究」と考えていたが、そうではなく、あくまでも「卒業論文」は、本校が取り組む「課題研究」の一形態であり、他の形態の「課題研究」がSGH、中でもGLPプロクラムにおいて、「高大連携」と有機的なつながりを形成することができた。それはすでに前述したが、大学教員によるGS授業をもとに、生徒たちが自発的にテーマを探し出し、アクションを伴った、社会的起業につながるような「活

動的課題研究」であった。このように、「課題研究」をどう捉え、高大連携にどう結びつけるかが、この5年間の一つの課題であったと言え、今後の取り組みにおいても、重要な課題になると思われる。

その課題研究のテーマ設定についても一考の余地がある。SGHの中核とも言えるGLPの生徒については、卒業論文のテーマを、国際問題と関連づけて設定させてきた。本校の長年の取り組みである卒業論文のカリキュラムを、SGHの課題研究へと昇華させようとしたわけであるが、上記のように高大連携の指導体制をうまく機能させるには至らなかった。それだけでなく、GLPとの有機的なつながりもうまく構築するには至らなかった。国際協力をテーマにした学びを展開するなかで、生徒によっては自身が設定したテーマに合致するケースもあったが、GLPの授業のなかで卒業論文の内容やカリキュラムと連携した動きをとることは出来なかった。読書科による探究的なカリキュラムと専門的なGLPの学びが連携することが出来れば、相乗効果も期待できる。多くの学校が探究的なカリキュラムを導入してきた昨今、長年続けてきた本校でも、そのカリキュラムの新たな展開をGLPの成果を反映させて考えていくことが必要である。たとえば、同じようなテーマを設定している生徒どうしでのディスカッションや共同調査等により、同じ問題意識を持ちながらも違う視点について知ることもできるであろうし、何か実践的な企画を試みるなどの挑戦も有効かもしれない。

もう一つの課題は、個人への評価の問題である。英語力以外の、グローバルなコンピテンシーをどう評価するか、についてである。客観的な評価基準としては、GPS-Academic®テストの成績を使用している。GSⅠ～Ⅲは、学年末にそれぞれ評価と単位認定を行っているが、その評価は、年間の取り組みをポートフォリオとしてまとめた「GLPノート」に書き綴られた内容、行ったプレゼンテーションの評価、他に授業外で行われた多くのGLPプログラムに関する提出物などで、評価が行われた。しかし、目指すべきグローバル人材としてのコンピテンシーを体系化し、それぞれをCan-do リスト方式、あるいはルーブリック評価表を作成し、SGH事業の効果検証の方法として、評価を行うべきであると考えてきたが、実際の所、そこまで手が回らなかったのが現状であり、大きな課題となっている。最も大きな反省としては、このSGH事業が始まってすぐに、これに取り組まなかったという点である。事業が進行して、出口のところで考えようとしたが、それでは手遅れになってしまった。教育課程改善の目標に向けて、それらの評価項目を立て、それに沿うようにプログラムを計画していかないと、後から評価の方法を考えるというのはどうしても後手に回り、時間的に足らなくなってしまったというのが、実情であった。

そして、評価の問題の背後には、そもそも学校がどのような教育をしたいのか、どのような人材を育成したいのかというビジョンが必要である。結局、本校でも明確なルーブリック、特に評価の違いの基準を明確にすることはできなかったが、身につけるべき実践的なスキル、すなわち評価の視点や分野については見えてきたものが多い。今後は、それらをいかに体系化できるかが重要である。

そもそもSGHの1年目は、「国際協力」をテーマに、大学との連携で実施可能なプログラムを羅列したが、オムニバス形式で多岐にわたった内容では翌年以降の持続性が低く成長の道筋が不透明なことが明らかになった。そのため、2年目から、体験する・学ぶ・行動するという3年間トータルの方針を立て、授業の内容構成を考えてきた。しかし、関西学院大学の時任先生が指摘されたことだが、これらは本来、段階を踏むプロセスではなく、相互に行き来する並列的なプロセスであるはずである。急遽設定した方針として、ないよりはましだったが、内容の一貫性までは十分に検討するには及ばなかった。大きな方針は設定したものの、個々の授業の内容に一貫性はあまりなかった。先ほどの卒業論文と課題研究の連携不足とあわせ、GLPの内容は3年間で1つのことを研究したという手応えには至らず、研究や学習内容の一貫性はぼやけてしまった。

学校のビジョンという問題に関して言えば、大学受験にとらわれない学校であるという点も重要である。SGHで目指すべき実践的課題解決能力に対しては、PBL型のプログラムが有効という点は見えてきた。PBL型のプログラムを導入しやすいのは本校の利点である。しかし、先述した通り、PBL型のプログラムには「壁」があるとも言える。企画の実施に専念するあまり、取り組む問題の本質から意識が外れてしまい、企画が目的化して理解が深まらないということである。これについては十分な指導体制の構築が必要であるが、もうひとつ考えなければならないのが、知識と実践的スキルのバランスである。端的に言えば、現在の生徒にはそれなりのプレゼンテーションなどの表現力や、ICTによる情報へのアクセスについて一定の力があるものの、基礎知識の不足が見られるということである。もっと分かりやすく言えば、本校の生徒は課題に対してインターネットを利用し、検索してすぐに出てきた情報をそれなりに加工して、見栄え良く伝えるスキルには長けている。知識なしに安易な検索で得た一面的な知識をそのまま使う

ことが増えてきた。確かに、常に変化する情報については、覚えている必要はなく、その都度調べれば入手できる。しかし、情報だけでなく思考をもそのまま鵜呑みにしてしまうことは問題であり、考えることを放棄してしまうのは非常に危険である。問題について考える際には、その因果関係や歴史的経緯、多様な評価などの情報を選別・整理することがまず必要である。そこには刻々と変化する一時的な情報だけでなく、確固たる一定の知識も必要であることも、学校の教育目標やカリキュラム構築において重要である。

以上が、本校SGH事業の5年間を振り返って、課題、問題点と考えられる点である。

（7）今後の持続可能性について

5年間のSGH事業の中で志向されてきた、グローバルな社会で活躍できるコンピテンシーの育成、またそれに向けてのアクティブラーニングの導入は、今後の本校の教育課程の中で、引き続き重視されていかなければならない事項である。まず、すべての通常の授業の中で、グローバルな課題への取り組み、ICTを利用したアクティブラーニングの取り組み、語学力を含むプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力向上の取り組みを継続しなければならない。また、授業以外の部分で、ホームルームでの取り組み、外部行事への参加、など可能なものは継続することが望まれる。また、カンボジアへの海外フィールドワーク、アジア学院への国内フィールドワークなども継続できれば望ましいことである。最も重要なのは、GS授業で研究開発の対象となった「高大連携による実践的課題解決能力」の育成をどのように継続していくか、ということである。これについては、経済的な裏付けや学校全体の更なるバックアップ体制の確立が必要であるので、今後、管理機関である法人を含み、鋭意検討していかねばならない。さらにSGH事業の後継となる、WWLコンソーシアム構築支援事業への参加も目指しながら、5年間のSGH事業の取り組みを発展的に継続できるよう努力することが必要である。

研究開発実施報告書

1. 学校の概要

指定期間	ふりがな	かんせいがくいんこうとうぶ			所在都道府県	兵庫県
平成26年～30年	学校名	関西学院高等部				
対象学科名	対象とする生徒数				学校全体の規模	
	1年	2年	3年	計	26年度まで　1学年300名　男子のみ 27年度から　1学年380名　男女共学 ＊普通科／在籍生徒総数1135名	
普通科（GGP）	377	377	381	1135		
GLP	33	35	39			

2. 研究開発構想名

「国際化重点大学との高大連携による実践的課題解決能力の育成」

3. 研究開発の目的・目標

（1）目的

①グローバルリーダーとして必要な総合的人間力などの資質を育成し、国際社会に目を向けさせる。
そのために「国際協力」を主たるテーマとした課題研究などを通じて高大連携を効率的に進める。

②全生徒を対象とする「GGP（General Global Program）」と、選抜された生徒を対象とする「GLP（Global Leader Program）」の二層構造のプログラムを実施し、理念目標の実現のために課題に取り組む。

グローバル・リーダーとしての資質の育成

◆総合的人間力（ヒューマンスキル）
- 問題発見・解決能力：興味・関心→情報収集（問題発見）→調査・分析→解決策立案→実践（課題解決）
- 人間関係調整力：協調性・共感力・リーダーシップ・チームワーク・関係構築能力
- コミュニケーション能力：ディベート・プレゼンテーション・交渉力
- クリティカルシンキング：問題の本質を見抜く力、公平で客観的な判断能力
- 異文化受容力：アイデンティティを堅持しながら異文化を受容する寛容性

◆使命感
- 他者ために生きるという人生観：社会貢献への豊かな意志
- 公正な宗教観を持った責任感：人間を超える存在への畏敬
- 未知の世界に踏み出す勇気：フロンティア精神

◆語学力
- 英語の場合：　CEFRのB1,B2レベル：4技能の統合的発展
- 英語以外の外国語：　英語絶対主義に陥らない、多様性の尊重

◆自国文化への理解
- 日本・日本人をよく知ることによる自己の客観視：異文化との相互理解
- 外国に対する日本・日本人の正しい伝達：発信する力
- エスノセントリック（自文化中心主義）な態度に陥ることなく、他文化を尊重できるバランス感覚

（2）目標

ア.【本構想において実現する成果目標の設定】

a. 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数　　320人（H30年度目標）

b. 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数　　90人（H30年度目標）
c. 将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合60%（H28年度目標）
d. 公的機関から表彰された生徒数、グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数　10人（H29年度目標）
e. 卒業時における生徒の4技能の総合的英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合　75%（H30年度目標）
f. 国際的な問題に関心を持つ生徒の割合　90%（H30年度目標）

〈指定4年目以降に検証する目標〉

a. 国際化に重点を置く大学への進学する生徒の割合　96%（H29年度目標）
b. 海外の大学へ進学する生徒の人数　3人（H29年度目標）
c. SGHでの課題研究が大学での専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合　75%（H32年度目標）
d. 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数　　120人（H33年度目標）

イ.【グローバルリーダーを育成する高校としての活動指標】（1学年300名（H26現在）、3年間の取組を経て）

a. 課題研究に関する国外の研修参加者数　　25人（H29年度目標）
b. 課題研究に関する国内の研修参加者数　　35人（　〃　）
c. 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数　5校（H28年度目標）
d. 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数　125回（H29年度目標）
e. 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数　20回（H29年度目標）
f. グローバルな社会又はビジネス問題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数　250人（H29年度目標）
g. 帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む）15人（H29年度目標）
h. 先進校としての研究発表回数　年間　3回（H30年度目標）
i. 外国語によるホームページ゛の整備状況　　3年以内に整備　→整備完了。随時更新中。
j. 生徒たちが課題研究やSGH活動を紹介する発表機会の数　　6回（H28年度目標）

4. 研究開発の概要

a. 世界に目を向け、グローバルな課題について、興味と関心を持つように向かわせ（問題発見）、さまざまな視点でグローバルな課題にひそむ原因を調査・分析し、解決する（課題解決）するための実践的な能力を涵養する。
b. 国際化に重点を置く大学の継続校として、高大連携による課題研究を中心に、グローバル人材の育成を目指す。
c. 生徒全体を対象にすると同時に、選抜された生徒グループを、特に将来のグローバル・リーダーとして育成し、大学のグローバル人材育成事業につなげる。
d. 課題研究は、生徒の自主的なテーマ設定のもと、大学の研究者、国際機関、企業などの専門家の指導を受けるなかで「卒業論文」作成に取り組みながら、問題発見のためのリサーチ力・分析力、行動をともなう実践的な問題解決力などグローバル人材として必要な能力を身につける。

5. 研究開発の対象

在籍する全生徒（GGP）、及び各学年から選抜された生徒（GLP）を対象とする。

6. 研究開発の内容・方法

（1）研究開発の仮説

伝統的に、卒業論文作成のための探究型の授業である「読書科授業」を昭和50年（1975年）から行っており、英語教育・国際交流も盛んな本校である。また、大半の卒業生が、文部科学省のグローバル人材育成推進事業（全学推進型）に採択された「国際化に重点を置く大学」である関西学院大学に進学する継続校であり、かつ、関西学院大学の8学部が同一校地にある。これらのことから、そのメリットを最大限に活かしてグローバル人材の育成にあたることにより、生徒の関心を国際的な問題に向け、人材育成を進めることができる。

(2) 研究開発の内容

①課題研究の取組

研究開発単位	対象学年	研究開発の内容
論文作成	3年生	それぞれの国際機関が実際に行っている具体的な「国際協力」活動について、何を目指して、どこで、何が行われているか、その困難性は何か、を学習する。さらに実際にそれに携わった経験を有するグローバル人材育成推進事業を主導する大学教員や国際機関の専門家や、国連ユースボランティアなどの国際社会貢献活動に参加した学生から話を聞き、生徒各自（GLPコース選択）が、具体的な「国際協力」活動をテーマとして選び、課題について設定し、調査・分析を行い、課題解決の提案を作成したうえで、海外におけるフィールドワーク（カンボジア）を行う。そのフィールドワークでの実践の経験をふまえて課題研究成果として卒業論文にまとめていく。また、3学期にクラス内で優秀論文の選定を行い、学年で優秀論文発表会（プレゼンテーション）を行う。
特別「高大連携」プログラム	3年生	a. 研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果 目的は、文部科学省のグローバル人材育成推進事業に指定されている関西学院大学の「実践型“世界市民”育成プログラム」と直接的にリンクすることにより、本研究開発の全体の重要点である、課題学習、高大連携を進めることである。 仮説との関係で言えば、やはり、継続校として理念的にも空間的にも、大学と同一校地内にあることのメリットを活かして、グローバル人材の育成を効率的に行える。 期待される成果としては、大学の研究者、学生と直接的に交流を持つことによって、自分達が将来、どのようなことを大学で学ぶのか、グローバルリーダーになるには今、何をしておかなければならないか、を実感できるというメリットが期待される。 b. 内容 文科省指定の関西学院大学「実践型“世界市民”育成プログラム」へ、高校3年生（GLPコースの中でさらに選抜された能力の高い生徒）が参加 i） 単位認定を伴う大学授業履修 大学の授業科目「総合政策トピックスA」を履修する。評価は大学生と同様の評価を行う。評価の結果、合格した生徒については、関西学院大学に入学した場合、入学した学部は単位認定を行う。 ii） 大学授業の受講・聴講 「国際地域理解入門A」の聴講ができる。単位認定はないが、高校の選択授業として取り扱う）

学校設定科目 「グローバル・スタディ」	GLP1年生 GLP2年生 GLP3年生	◎グローバル・スタディⅠ／週1時間 関西学院大学教員による授業 毎時間、提示されるあるテーマについて、内容を「知る」→「何が問題かを考える」→「まとめる」というトレーニングを行う。テーマは、すべてグローバル化する世界の諸問題、文化的な違いから生じる諸問題、国連などの活動に関するもの、などとする。 ◎グローバル・スタディⅡ／週1時間 関西学院大学教員による授業 毎時間、提示されるあるテーマについて、内容を「知る」→「何が問題かを考える」→「自分の考えを述べる」というトレーニングを行う。 テーマは、すべてグローバル化する世界の諸問題、文化的な違いから生じる諸問題、国際連合などの活動に関するもの、などとする。また、生徒が自らの考えをまとめるために、この段階から大学、企業の専門家の指導・助言を受けることを始めていく。 ◎グローバル・スタディⅢ／週2時間 本校教員による授業 毎時間、提示されるあるテーマについて、内容を「自分の考えを述べる」→「人の意見を聞く」→「議論する」→「解決策を考える」。 テーマは、すべてグローバル化する世界の諸問題、文化的な違いから生じる諸問題、国際連合などの活動に関するもの、などとする。例えば、ある国際的な問題について資料を読み、それについてディベートを行なう、また模擬国連のように、それぞれの国の立場に立って議論を行う、また、各自が研究課題にしているテーマを、プレゼンテーションし、他のメンバーと意見を交換して、情報共有を行う。
GLPフォーラム	GLP1年生	課題研究のテーマでもある、国際的課題（例として「途上国の教育開発」「保健・衛生の問題」「平和と紛争解決」など）を設定しワークショップを実施する。生徒は教員の指導を受けながらテーマに関する事前学習を行いワークショップの準備を行う。ワークショップにおいては、関西学院大学に通う外国人留学生やJICAの研修生と生徒で構成されるグループを作り、各グループにおいてディスカッションを行ったあと、課題解決のための方策を共同で作り上げる。その後、全体会において、生徒の代表者が英語によるプレゼンテーションを行い、グループ毎の評価を行うとともに、外国人留学生やJICA研修生によるプレゼンテーションの評価を行う。
GLPセッション・デイ	GLP1年生 GLP2年生	国際協力、それに関連する国際問題をテーマに、外部から講師を招き、集中的に研修する。 講師は、本研究開発のアドバイザーである関西学院大学「実践型“世界市民”育成プログラム」の教員、大学生を中心に実施する。アクティブラーニングが可能になるように、事前に講師

		と打ち合わせ、テーマについて各自が学習しておき、その問題点や質問事項を準備して参加し、講師の講演の後は、パネルディスカッションなどを行い、自分達の意見を発表する。
フィールドワーク	GLP1年生 GLP2年生 選抜あり	課題研究について、高校の夏季休暇を利用して、海外フィールドワーク（カンボジア）を実施する。関西学院大学の協力と支援を受けて、国際協力に関する実践の場として実施する。両国の文化、歴史の研修を行い、現地で日本からの協力の現場、NGOや海外協力隊の活動などを研修する。国内においても、フィールドワークを実施し、国際協力等の実地研修を行う。具体的には、アジア学院（栃木）を訪問し、研修する。「アジア学院」では、アジアへのNPOによる農業技術指導事業について研修する。各フィールドワークは、グローバル・スタディ（学校設定科目）の一環として実施する。

②課題研究以外の取組

研究開発単位	対象学年	研究開発の内容
GLPセミナー	GLP1年生 GLP2年生	グローバル人材として必要な資質の中の「自国文化への理解」「異文化理解力」を育成する。世界の宗教や文化、日本人の精神性、日本の伝統・文化、プレゼンテーション能力の向上などについて、研修する。
GGPグローバルセミナー	全学年	各学期1回、グローバル・セミナー（講演会）を実施し、「国際協力」「国際問題」を専門にしている関西学院大学の教員や、国際機関で働く職員、海外でのボランティア経験者なども講師として招聘する。
GGPグローバルポスターセッション	1年生	ホームルーム活動の一環として、グローバルな問題に関する共通テーマの下、各クラスが活動を行い、ポスターを制作し、発表を行う。
GGPイノベーションプログラム	2年生	自身のタイプを自覚しつつ、グループで課題に取り組み、柔軟な思考力と豊かな発想力、各自のイノベーション力を向上させる。
GLP特別授業	GLP生徒	外部講師を招いて、難民問題や、国際的なボランティアの活動について学ぶ。GLP生徒の中から希望者のみ受講する。
コミュニケーションツールとしての語学力を高める取組	全学年	CEFRのB1、B2レベル GTEC・TOEIC®・TOEFL®・英検2級以上の受験

③グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程外の取組

研究開発単位	対象者	研究開発の内容
海外の高校との交換留学の奨励	全生徒	学年約380人のうち一割が海外に行くことを希望することを目指す。
海外からの留学生受け入れ促進	全生徒	帰国生入試は減少傾向にあるので、それを増やす努力を行い、海外からの留学生も受入を積極的に行う。
各種リーダー研修等への参加	全生徒	関西学院大学や、NPO・NGO団体など外部機関が主催するグローバルリーダーの育成に関わる研修への参加
各種コンクール・コンテストへの参加	全生徒	JICAエッセイコンテスト WFPエッセイコンテスト 図書館を使った調べる学習コンクール 他多数参加
生徒のグローバルな視野を広げる各種啓発活動	GGP 全生徒	救缶鳥プログラムへの参加 Meal for Refugeesへの参加
SGH教員研修会	全教員	アクティブラーニング型授業の進め方に関連する専門の関学大の教授を招いた講義を行う。

(3) 研究開発の実施計画

平成30年度（第5年次）

5年次では、研究開発の最終年として、5年間の取組をまとめる作業を行い、研究成果の発信を重点とする。5年間の研究指定終了後も持続可能な教育システムかどうかに着目した上で評価を行い各プログラムの完成を目指すと同時に、この研究開発によって得られた成果を各教科指導に生かせる。また、初年次1年生だった生徒が大学2年生となっているため、関西学院大学と連携し、追加調査を行うことで研究開発の検証を開始する。研究開発の最終年に当たり、5年間のスパンの中で、学校がどう変化したか、生徒、教師がどう変化したかを、広範囲なアンケートを実施して評価する。またプログラムに関与した大学関係者、企業の関係者についてアンケートを行い評価してもらう。それらの結果を受けて、校内のGLP委員会、大学教員のアドバイザーズ委員会などで評価を行い、運営指導委員会を開催し報告するとともに、研究の最終年としての全体評価を行う。

7. 研究開発組織の概要

（1）運営指導委員会・アドバイザーズ委員会

本校におけるSGH事業の運営に関し、専門的見地から指導、助言を行う。

①運営指導委員

氏　名	所属・職名（平成31年3月現在）
石川　和秀	外務省特命全権大使（関西担当）
三上　俊生	元国際連合職員
橋本　英俊	神戸芸術工科大学特任教授
山本　ベバリー	大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻教授

②アドバイザーズ委員

氏　名	所属・職名（平成31年3月現在）
小菅　正伸	関西学院大学　副学長
西野　桂子	関西学院大学　総合政策学部教授
孫　　良	関西学院大学　人間福祉学部教授
關谷　武司	関西学院大学　国際学部教授
志甫　　啓	関西学院大学　国際学部教授
山田　好一	関西学院大学　国際教育・協力センター教授
時任　隼平	関西学院大学　高等教育推進センター専任講師
尾木　義久	関西学院大学　高大接続センター次長

（2）校内組織

①SGH委員会

本校におけるSGH事業の運営に関し、その全体計画立案、各教育プログラムの進捗管理並びに事業全体及び各教育プログラムの評価などについて審議し、全校体制で行う本事業推進の要としての役割を担う。

（3）研究協力者・団体一覧

・グローバル・スタディ

1年生	関西学院大学	関西学院大学総合政策学部3年生	小宮山 千尋氏・巽 音氏
		人間福祉学部	孫 良先生
		国際教育・協力センター	中村 明先生
		人間福祉学部	武田 丈先生
		国際学部	關谷 武司先生（1・2年生合同授業）
	GLPセミナー	瓦照苑 照の会 能楽師観世流シテ方	谷口 雄梧氏
	GLPセッション・デイ	国際ボランティア経験学生	杉本 夏奈氏
2年生	関西学院大学	元総合政策学部長	福田 豊夫先生
		経済学部	栗田 匡相先生
		教育学部	岩坂 二規先生
		国際学部	志甫 啓先生
		国際協力・教育センター	山田 好一先生
		社会学部	Vivian Khavari先生
	GLPセッション・デイ	国際ボランティア経験学生	濱野 允雅氏・關谷 祐史氏・宮内 彩氏・伊東 有希氏
3年生	ハラパン高校通信型学習	株式会社With the World代表	五十嵐 駿太氏
		関西学院大学　時任ゼミ所属大学生10名	
	キャンドルランタン企画	有限会社　松本商店	
	Meal for Refugees	関西学院大学生活協同組合、難民支援協会	
	KG Marché	西宮市の農家の皆さん	

・フィールドワーク

NGOスナーダイ・クマエ孤児院　代表　メアス・博子氏
Joint Support Team for Angkor Community Development（JST）代表　チア・ノル氏
株式会社With the World代表　五十嵐 駿太氏
インドネシア・ハラパン高校
学校法人アジア学院
独立行政法人国際協力機構（JICA）関西センター　遊川 章宏氏・早瀬 悟志氏

・GGP活動

NewsPicks社　西村 脩平氏
（認定）特定非営利活動法人 ジャパンハート最高顧問　吉岡 秀人氏
PHD協会　坂西 卓郎氏（ＰＨＤ協会事務局長）、サンダーモー氏、サビナ・ビスンケ・ラムテル氏、レニ グスティカ氏
関西学院大学　1年生　勝川 結友氏

研究開発の活動実績一覧

1. 生徒の活動

＜研究開発の内容＞

①課題研究の取組　②課題研究以外の取組　③グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組

＜研究開発のスケジュール＞

期　日		プログラム名	対　象	内容
4月	11	グローバル・スタディⅢ授業開始	GLP3年生	①
	12	グローバル・スタディⅡ授業開始	GLP2年生	①
5月	2	SGHアンケート	全校生徒	②
		GGPグローバルセミナー　高等部OG大学1年生　勝川さん	全校生徒	②
6月	11～16	インドネシア・バリ ハラパン高校来日（GSⅢの一環）	GLP3年生・GGP3年生	①
	16	GTEC	3年生全員	②
	18	M4R実施　～22日まで　（GSⅢの一環）	全校生徒	②
7月	13	GLPセミナー　国語	GLP1年生	②
	17	GPS-Academic®テスト	GLP3年生	③
	26～27	高校生国際交流の集い	GGP希望者	③
	30～8/1	国内フィールドワーク　アジア学院（栃木県）	GLP希望者	①
8月	1～5	関西学院大学総合政策学部「総合政策トピックA」	GLP3年生希望者	③
	10～16	海外フィールドワーク　カンボジア研修	GLP希望者	①
	15～17	KG オールスターキャンプ	GGP希望者	③
	25～31	海外フィールドワーク　バリ　ハラパン高校研修	GSⅢ希望者	①
	5･6･25･26	関西学院世界市民明石塾	GLP希望者	③
11月	3	文化祭発表（GSⅢ）	GLP3年生	①
	14	キャンドルランタンワークショップ（GSⅢの一環）	全校生徒・保護者	①
	17	リサーチ・フェア2018	GGP希望者	③
		グローバルクラスルーム・模擬国連全国大会	GLP希望者	③
	28	グローバル・スタディⅢ　最終プレゼンテーション	GLP3年生	①
12月	1	GTEC	1･2年生全員	③
	7	GLPセミナー　数学	GLP1年生	②
		GLPセッション・デイ（大学生とのワークショップ）	GLP2年生	①
	11	GSP-Academic®テスト	GLP1･2年生	③
	12	グローバルセミナー　ジャパンハート最高顧問　吉岡秀人氏	全校生徒	②
		SGHアンケート	全校生徒	①
		GLPセッション・デイ（国際ボランティア経験大学生の講義）	GLP1年生	①
	15	2018年度SGH全国高校生フォーラム	GLP3年生	③
	17	JICA関西訪問	GLP1年生	③
	18	GLPセミナー　社会（児童労働・フェアトレードについて）	GLP2年生	②
1月	5-6	平成30年度SGH等カンボジア合同研修会	GLP2年生	③
	18	3年生特別プログラムグローバルセミナー	GGP3年生	②
	23	3年生優秀論文発表会	3年生全員	②
	24	最終成果発表会・運営指導委員会・アドバイザーズ委員会	GLP1･2年生	②
	26	高校生公開討論会	GLP1･2年生	③
2月	1	グローバルセミナー　PHD協会	全校生徒	②
		GLP特別授業　PHD協会	GLP希望者	②
	12	グローバル・スタディⅡ　出前授業（初等部）	GLP2年生	①
	15	グローバル・スタディⅠ　出前授業（中学部）	GLP1年生	①
3月	12	GGPタブレットセッション白熱教室	GGP1年生	②
	19	ハラパン高校とのスカイプセッション	GLP2年生	②
	23	SGH甲子園2019	GLP・GGP希望者	③

＜学外活動実績＞

コンクール・コンテスト・キャンプ名	受　賞	主　催	学年・氏名
シナリオリーディングコンテスト	3位	阪神ESSユニオン	
第33回兵庫県高等学校英語スピーチコンテスト	3位	兵庫県高等学校教育研究会英語部会、兵庫県高校生英語スピーチコンテスト委員会	2年　福留 舞
第67回チャーチル杯争奪全日本高等学校英語弁論大会　全国本選	2位	関学大ESS部	2年　福留 舞
第8回上智大学全国高校生英語弁論大会（ジョン・ニッセル杯）全国本選		上智大学言語教育研究センター	2年　福留 舞
第10回高校生英語エッセーコンテスト	優秀賞	関西学院大学、読売新聞、ジャパン・ニューズ	3年　森澤 一充
第22回図書館を使った調べる学習コンクール	奨励賞	公益財団法人図書館振興財団	3年　関岡 幸樹 西野 雄紀
リサーチ・フェア2018		関西学院総合政策学部	3年　柏木 麻理子 1年　村上 聡 種村 圭依人
第12回全日本高校模擬国連大会 議題:武器移転		グローバルクラスルーム日本委員会	2年　中島 小都葉 上田 桃子
ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth ～高校生のための国際交流・国際協力 EXPO 2018～		ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth運営委員会 、特定非営利活動法人 関西NGO協議会	2年　古市 裕渚 手島 葵 上田 桃子 中島 小都葉
関西学院世界市民明石塾		関西学院大学	2年　大川 真里奈
中高生マレーシア植林ワークキャンプ2018		特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティー	3年　釜江 美波
第25回日韓高校生交流キャンプ（7/29～8/2）		日韓経済協会	3年　山口 ひかる
かめのり中高生アンバサダープログラム フィリピン・マニラ市（1/19～27）		（公財）かめのり財団	1年　藤野 真緒
平成30年度SGH等カンボジア合同研修会		西大和学園高校・和歌山信愛中学・高等学校	2年　古市 裕渚 大川 真里奈 畑中 咲楽

2. 対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加（教職員の活動）

2018/6/29	平成30年度第1回スーパーグローバルハイスクール連絡協議会
2018/10/28	伊丹市立市民まちづくりプラザ主催SDGs体験講座
2018/12/2	持続可能な未来のために考える～2030SDGs～カードゲーム体験会&「考える会」in大阪なんば
2018/12/18	グローバルリーダー育成推進懇話会

3. SGH視察受け入れ（成果発表会参加校のSGH校・アソシエイト校含む）

2018/5/17	盈進中学高等学校（広島県）	校舎内の施設・設備（備品なども含む）全般
2018/11/15	兵庫県議会文教常任委員会　15名	SGHの取り組みについて
2018/11/30	東邦高等学校（愛知県）	ICTの取り組みについて
2019/1/24	神戸市立葺合高等学校	関西学院高等部SGH成果発表会参加（6校）
	伊丹市立伊丹高等学校	
	仁川学院高等学校	
	六甲学院高等学校	
	啓明学院高等学校	
	関西学院千里国際高等部	

4. 普及活動

(1) 成果発表会

・グローバル・スタディⅢ文化祭企画　2018年11月3日　高等部棟2階　社会科Ⅰ教室
企画内容:KG Marché、東南アジア研究（バリ・カンボジア、マレーシア）

・2018年度SGH全国高校生フォーラム　2018年12月15日　東京国際フォーラム　ホールE2等
発表者：3年（5名）　テーマ：地域・観光

・SGH最終成果発表会　2019年1月24日　高中部礼拝堂
関西学院高等部SGH今年度の活動報告、優秀論文発表、GGP1年生によるHR活動報告
GSⅢSkypeセッション、フィールドワーク参加生徒によるパネルディスカッション

・SGH甲子園2019　2019年3月23日　関西学院大学上ケ原キャンパス
研究成果プレゼンテーション（個人・日本語発表）
研究成果ポスタープレゼンテーション（グループ・日本語発表）
ラウンドテーブル型ディスカッション

(2) 日本語版/英語版HP、SGH校専用SNSの更新（随時）
(3) SGHリーフレット　年1回発行
(4) SGH研究報告書　年1回発行
(5) SGHレビュー　SGH Review Vol.9 /SGH Review Vol.10　年2回発行

配布先一覧
平成26年度SGH指定校55校、平成27年度SGH指定校56校、平成28年度SGH指定校11校、近畿のアソシエイト校15校、阪神間の高校94校、入試説明会参加中学校50校、関西学院大学各部署45部、外部協力者、運営指導委員会等17部、本校生徒、教職員、計約1500部

(6) 新聞記事等

・ジャカルタ新聞　2018年4月19日

日本の高校生と語ずハラパン高校の生徒ら

日本の高校生がネット交流

バリと西宮で社会問題話し合う

バリ島ジンバラン地区にあるハラパン職業訓練校と兵庫県西宮市の関西学院高等部を結ぶ国際交流プロジェクトが発足し、インターネットを通じて意見や、食と農業などの社会問題について議論を始めた。日本と海外の高校生が通信機を使って共同学習するプロジェクトは、関西学院大学（兵庫県西宮市上ケ原一番町）の第1期生の渡邊一真さん（18）=写真=ら日本の高校3人と、ハラパンの生徒3人の計6人が、インドネシアの高校生と、ゴミ処理場の見学をしたり、京都の伝統文化やホームステイを通じて日本の文化に触れてもらいながら実際の調査を行います。交流授業の中ではそれぞれのグループがプレゼンテーションを行い、その後、関西学院高等部の生徒がバリ島を訪問する予定になっています。ゼひとも海外交流ではない、社会問題に取り組む若者たちの様子をご取材ください。

ボトルには「ウオッカ」「マンゴジン」などと印刷されたラベルを張っているビンを、関西ルールに改修されるという。

製造業の存在は約1カ月前、渡邊さんが「ゴミ問題を考えるチーム」を作ったことがきっかけだった。「日本の高校生と共同学習ができるかも」と思い、ハラパンの生徒に提案。ハラパンの生徒たちは、ゴミ問題に関心があるとのことで、すぐに共同学習が始まった。

ハラパンの生徒たちは、ゴミ問題を考えるチームを作り、国際協力をキーワードに共通のテーマを設定し、毎週Skypeを用いたテレビ会議を通じて、ディスカッションやプレゼンを繰り返し、身近な社会問題に対して自分たちができる解決方法を考えている。例えば、ゴミ問題を考えたチームは、現じゴミ問題でも、互いの国での問題意識の違いを共有した結果として、エコバッグの普及を目標に掲げ、両国でそれぞれ製造・販売を企画した。iPadやスマホのSNSといったICTツールを存分に駆使し、生徒たちは教員だけでなく、企業や大学生のアドバイザーからのポートを受けながら、大人たちが驚くような柔軟性で様々な生活と職業学ぶことができたと話した。「楽しかった。日本語がうまくなった。」と話した。

日本からは「しっかりと会話することができた。海外の人と話すきっかけとなった。次の機会があればもっと深く、この交流が続いてほしい」との感想が聞かれた。今回のセッションは6月末まで毎週行われるプログラムの一環で、インドネシア側の生徒が話題を提案することになっている。（共同通信・写真も）

・関西学院WEEKLY NEWS　2018年6月8日

報道資料　関西学院 WEEKLY NEWS

発行日／2018.6月／No.931　発行／関西学院広報室　兵庫県西宮市上ケ原一番町1−155 TEL 0798(54)6017　FAX 0798(51)0912

インドネシア・バリ島の高校と高等部生が交換留学を実施

関西学院高等部ではスーパーグローバルハイスクール事業の一環として、国境を超えて活躍する次世代を育てることを目標に、数々のグローバルリーダー育成プログラムを実施しています。

今年度からはインドネシア・バリ島のHARAPAN高等学校と企業と本学が連携をして交流授業を実施。Skypeを用いて、単なる異文化交流に終わらせることなく、互いの課題に取り組む授業をめざしています。より良い社会の実現のために何をするべきか、現国理解・アイディアを創出し、同時に生徒の実行力を養うプログラムを行っています。今月いよいよ現地から日本へ実地研修に来ます。

日本滞在中にはゴミ処理場の見学をしたり、京都の伝統文化やホームステイで日本の文化に触れてもらいながら実際の調査を行います。交流授業の中ではそれぞれのグループがプレゼンテーションを行い、その3日後に関西学院高等部の生徒がバリ島を訪問する予定になっています。ぜひとも単なる海外交流ではない、社会問題に取り組む若者たちの様子をご取材ください。

■日時：
6月11日（月）～6月16日（土）
■主なスケジュール：
6月11日（月）到着
6月12日（火）ゴミ処理場見学と神戸訪問
（神戸では日本の海や街並みを紹介）
6月13日（水）京都訪問（伝統文化や歴史の紹介）
6月14日（木）ホストファミリーとの1日、西宮おこしや祭り
6月15日（金）日本とバリ島の文化交流授業
6月16日（土）出発
■プログラム内容のお問い合わせ：
関西学院高等部事務室(0798-51・0975)
■取材等のお問い合わせ
関西学院 広報室(0798-54・6017)

写真：Skypeによる日本とインドネシアの学校交流の様子

企画展「ポスターでたどる歌詩の新創」開催中！

■会期：7月21日(土)まで開催中
■休館日：日曜日
■開館時間：9:30～16:30(入館は16時まで)
■場所：関西学院大学博物館
（時計台2階展示室）
■後援：西宮市
■一般参加可。申込不要、入館無料
■お問い合わせ：
関西学院大学博物館(0798-54・6054)

・KG TODAY 2019年2月号No302p.5-6

特集 Special feature

SGH スーパーグローバルハイスクール での取り組み

SGHの指定を受けて5年。高等部は、SGHに指定される関西学院大学との連携のもと、グローバルリーダー育成でSGHプログラムに取り組んでいた。ICT環境の整備は、グローバル教育の分野でも、新たな学びのかたちを作り出す原動力となっている。

3年生の選択科目である Global Study Ⅲを受講する生徒たちは、インドネシアの提携校であるハラパン高校の生徒たちとグループを作り、国際協力をキーワードに共通のテーマを設定し、毎週Skypeを用いたテレビ会議を通じて、ディスカッションやプレゼンを繰り返し、身近な社会問題に対して自分たちができる解決方法を考えている。例えば、ゴミ問題を考えたチームは、現じゴミ問題でも、互いの国での問題意識の違いを共有した結果として、エコバッグの普及を目標に掲げ、両国でそれぞれ製造・販売を企画した。iPadやスマホのSNSといったICTツールを存分に駆使し、生徒たちは教員だけでなく、企業や大学生のアドバイザーからのポートを受けながら、大人たちが驚くような柔軟性で様々な企画を立案・実践していく。毎回の活動をポートフォリオにまとめ、定期的にそれを見直して、次の活動を軌道修正していく過程で、まさに社会生き抜く力を育んでいる。「異文化の人たちと一つのものを作り上げる」という経験は、生徒たちの間に驚くべき化学反応を起こし、これまでにない成長を促している。

●ノートパソコンでSkypeをつなぎ、iPadやスマホで情報検索や資料作成。ホワイトボードを用いてディスカッションと、生徒たちは様々なツールを駆使する。授業には毎回、企業担当者や大学の留学生が参加し、また、各グループには関学大生のアドバイザーが参加し、生徒たちをサポートしている。それらサポーターやインドネシア側の生徒たちClassiを用いて、進み具合などを共有している。

The students are adept at using a variety of tools, such as Skype link-ups on their laptops, information searches and presentation material production on their iPads and smartphones, as well as discussions using whiteboards. Representatives of companies and international students from the university participate in every class, and KGU student advisors also attend in each group to provide support for the students. The students also share their progress with these supporters and the Indonesian students on Classi.

Initiatives at an SGH (Super Global High School)

Five years have passed since our selection as a Super Global High School (SGH). In collaboration with Kwansei Gakuin University, a designated Top Global University, KGU Senior High School has engaged in programs designed to cultivate global leaders. The development of the ICT environment has become a driving force in creating new forms of learning in the area of global education, as well.

Students who are taking the 3rd Year elective subject, Global Study III, have formed groups with students from Harapan High School, the Senior High School's partner school in Indonesia, and decided on common themes revolving around international cooperation. Through weekly discussions and presentations held over Skype, they think about ways in which they themselves can solve social problems that are close to home. For example, one team that was thinking about the problem of garbage shared the differences in awareness about the issue in their respective countries. As a result, the team came up with the goal of promoting the use of reusable bags. They then planned the production and sale of such bags in both countries. The students, supported not only by teachers but also by companies and university student advisors, devise and execute a variety of plans with a flexibility that surprises the adults around them by making full use of ICT tools, such as iPads and smartphone social media apps. They compile their activities into a portfolio, which they review periodically. They are actively developing the skills they will need to survive in society through the process of course correcting for their future activities. The experience of creating something together with people from another culture has sparked an astounding chemical reaction among the students, and is encouraging unprecedented growth.

In the General Global Program (GGP), a compulsory part of the SGH program for 1st Year students, the students are working in collaboration with NewsPicks, a company that runs a social platform on business news. The students work on these activities with the help of graduates. Taking advantage of the benefits of all students owning their own iPad, over the summer vacation, the students select news topics that interested them from the articles that are posted on the NewsPicks app. They then submit and share those topics on LoiLoNote. In Term 2, after the summer vacation, they narrow down the topics to one per group, prepare presentation materials, and present to their individual classes. The groups chosen to represent each class will ultimately give their presentations to the entire year level at the end of the school year.

Whereas, in the past, students would cut articles out of the newspaper, paste them into their notebooks and use cheap paper to give their presentations, with the advent of the iPad, these methods have been replaced by news streaming apps, LoiLoNote, and Keynote. To manage this activity, the student GGP committee members use Classi to connect with each other to manage the progress in each class and organize the presentation schedule.

In their studies, the students recognize the benefits of using ICT devices in terms of streamlining and depth of content. At the same time, they gain a strong sense of the more "analog" things they need to remain conscious of, such as listening intently to other groups' presentations.

1年生は、SGHプログラムの中で全生徒が参加するGGP（General Global Program）の活動として、半期生を介して、ソーシャル経済メディアを運営するNewsPicks社と連携した活動を行っている。全員がiPadを持っている利点を利用し、夏休みの間にNewsPicksアプリで配信される様々なニュースの中で、自分が興味を持ったニュースをピックアップし、ロイロノートで提出・共有。2学期に入り、グループで一つのテーマに絞った上で、プレゼン資料を作成し、各クラス内で発表。クラス代表に選ばれたグループは発表用の動画をiPadを使って作成し、最終的に学年末に学年全体での発表を行うことになる。

これまで新聞の切り抜きをしてノートに貼り付け、模造紙で発表していたものが、iPadの登場によってニュース配信アプリやロイロノート、Keynoteに置き換わる。そして、その関活動の運営については、生徒のGGP委員たちがClassiを用いて連携を取りながら、各クラスの進捗管理やプレゼン発表の段取りを行っている。

ICT機器の利用で合理的、かつ、直接が書くできる部分と、他グループ発表時の傾聴の必要等、アナログでもっと大切にしなければならないことを、生徒たちは肌で感じて学んでいる。

2018年度　1年生のGGPプログラム　AY2018 1st Year GGP Program

●各グループでプレゼン資料を作成
Each group prepares its own presentation materials.

●GGP委員はClassiで各クラスの進み具合を管理する。
The GGP Committee members manage the individual classes' progress on Classi.

5 KG TODAY No.302

ICT環境整備から始まる高等部の教育改革 Educational Reform at KGU Senior High School Starts with the Development of the ICT Environment

2019・February 6

資料2　運営指導委員会・アドバイザーズ委員会記録

平成30年度　関西学院高等部　スーパー・グローバル・ハイスクール研究開発事業
第5回　運営指導委員会

日　　時：平成31年1月24日（木）　15:20～16:20
場　　所：関西学院高等部　小会議室

出 席 者：運営指導委員　　橋本　英俊　委員（神戸芸術工科大学特任教授、前加古川西高校校長）
三上　俊生　委員（元国際連合職員）
※石川　和秀　政府代表／特命全権大使（関西担当）はご欠席
山本ベバリー委員（大阪大学大学院教授）はご欠席

アドバイザーズ委員　　時任　隼平（関西学院大学高等教育推進センター専任講師）
森　隆史（関西学院法人部）
五十嵐　駿太（GSⅢ協力　株式会社With The World. CEO）

学校側より　　田淵　結（関西学院　院長）
枝川　豊（関西学院高等部　部長）
田澤　秀信（関西学高等部　副部長）
松浦　克博（SGH実施責任者　SGH主任・GGP主任）
三木　真也（GLP主任　　GSⅢ担当）
塚本　恭子（GLP副主任　GSⅢ担当）
磯村紗耶加（GLP委員　　GSⅠ担当）
泉川　貴史（GLP委員　　GSⅡ担当）
永野　誠（関西学院高等部　事務長）

議　　事：
1.　開会の辞　　枝川　豊　高等部長
2.　出席者紹介
3.　平成30年度スーパー・グローバル・ハイスクール研究開発事業についての概要説明
～　5年間の指定を振り返って　全体：松浦　GLP：三木
4.　質疑応答
橋本委員：KG Marchéという企画に着眼した理由は何か
枝川：アジアユースサミットに参加した生徒の関心の広がりによるもの
橋本委員：キャンドルランタン企画については
三木：ハラパン高校はインドネシアのバリ島に所在していて、ヒンドゥー宗教の伝統や文化が根付いている影響もあり、学校周辺とのネットワークが確立されている。一方、私立の関学高等部は地域とのつながりが薄い。今回、ハラパン高校とのスカイプセッションで交流を深めていく中で、バリ島の特産品にキャンドルランタンが知られていることが分かった。関学が所在する兵庫県西宮市には、伝統工芸品として和ろうそくがあったため、バリのキャンドルランタンの文化を西宮の伝統工芸品の和ろうそくで作れたら面白いと、本校生徒と西宮の和ろうそく業者との間で自主的に企画、実施された。
橋本委員：教員側の人材育成はどうしているか
枝川：若手教員にも実際にSGHの様々なプログラムに関わりながら経験を積んでもらい、今後も継続できるようにしている。

5.　委員より指導、助言
橋本委員：iPadは単なるツールであるから、使うことが目的にならないようにする事。同様にJICA訪問も「行ってそこで課題発見・解決すること」が目的である。行くことが目的にならないように気を付けること。
三上委員：●生徒はビジネスプランなど企画して終わりではなく、「試行→失敗→修正→再試行」を体験してほしい。
●同じテーマばかりにならないようにしてほしい。 ex）貧困問題ばかり
●プレゼンターはリスナーが誰か、どんな知識があるのかなどを考えるべき。それができれば内部の人だけが分かる略語などは使わないようになる。
●その他、個別生徒のプレゼンの評価をいただく。
時任先生：○的場さんのプレゼンテーション能力は十分に高く、今後、3年生の理想のレベルとして良い。
○生徒の取組みによる「伸び」を教員がどう評価できるか今後の研究課題として良いかもしれない。それができれば成長の証とすることができる。成長の可視化。
五十嵐氏：地域とのつながりを作ることができた（和ろうそく業者、GSⅢをサポートしてくれた大学生）ことは大きな成果である。

6.　来年度以降の取組について
枝川：今までの取り組みで得た成果を今後も生かしていきたい。来年度以降、金銭的な制限で今年度と同じ内容はできないかもしれないが本質は見失わないようにしたい。

7.　閉会の辞

研究開発の内容

■全学年

全生徒を対象に世界市民を目指したグローバルな視点と課題解決能力の伸長を加速させる

GGPグローバルセミナー

研究内容

目標	高校生としてグローバルな視点を持つ
対象	GGP/GLP　全校生徒
実施計画	

	内　容	講　師
5/2	テーマ：“My American Life” テーマ：高等部の食意識改革プロジェクト ～KG Marché開催に向けて～	関学大1年生　勝川結友氏 GSⅢ　笠松胡桃
12/12	ジャパンハート設立までと、現在の海外医療活動について	特定非営利活動法人ジャパンハート最高顧問　吉岡秀人氏
2/1	PHD協会の概要と研修生サンダーモーさんの研修報告	PHD協会　研修生

内容の詳細・成果

【第1回GGP講演会】
13:10～　高中部礼拝堂にて
①勝川氏（高等部卒業生）より長期留学について（プレゼンテーション）
卒業生で現在関学大1年生の勝川氏より、長期留学で訪れたヒューストンでの体験談と留学することの意義・目的などについての発表。留学中は不慣れな環境のなか、新しいことにチャレンジしたり、アメリカならではの学校行事に参加したりなど積極的に行動した。特に感慨深かったのは、ROSESというダンスチームに所属し、幸運にもヒューストンで開催されたNFLスーパーボールにダンスメンバーとして参加できたことや、ディズニーワールドでダンスパフォーマンスをおこなったこと。「失敗は成功のもと」。度重なる困難に立ち向かい、その時々で辛いこともあったが、一度しかない人生で訪れたチャンスを無駄にしないように、と生徒たちにメッセージを送ってくれた。
②3年笠松よりKGマルシェPR活動と実施概要について（プレゼンテーション）
5月9日（水）のKGマルシェ開催に先立って、この企画に携わったきっかけと目的、昨年度参加したアジア・ユースサミットとSGH甲子園について、食育アンケートの結果報告、農家栽培野菜の安全性や直売の魅力など、マルシェ開催に至るまでの活動報告とプロモーションをおこない、生徒たちに積極的な参加を呼びかけた。
14:00　終了

【第2回GGP講演会】
10:00～　高中部礼拝堂にて
ミャンマーで無償の医療活動をスタートし、認定NPO法人ジャパンハート設立するまでの吉岡氏の軌跡から現在の活動記録や現地の様子など、映像を交えながらお話しいただいた。10代の頃に自分の生き方について深く考え、何かしなければという思いに駆られ、医師になって困っている人たちを助けようと奮起された。医療が全額自己負担、32万人いて医師はたった一人、手術の設備もないという貧しい街で、一つ一つできることから始めた。一生病気のまま生きていかないといけない子どもたちをとにかく助けたいという一心で医療に従事していたが、あるとき口唇口蓋裂の子どもが恥ずかしさから話さず下を向き、学校にも通えないことに心を痛めた。子どもたちの教育の機会をも奪っていることに、医療の役目について改めて考えた。今そこにある命を助

けるだけでなく、その人たちの生活の質を上げることも、医者の仕事だと気づいた。また家族の心が救われるような医療を施したい、たとえ人生の最期を迎えようとしている病気の子どもたちに出会っても、その子たちのために全力を尽くすこと、自分の仕事はそういった活動の連続だが医者になって本当によかったと思える、と話された。

講義の後半では、「ジャパンハート海外医療活動」として、途上国など現地に赴き共に働いている日本の学生たちやボランティアの人たちからのメッセージ動画を中心に、実際の現場で起こっていることやなぜ自分たちがこの活動に参加しているのか、など伝えていただいた。

＜生徒レポートの抜粋＞

・吉岡先生の話を聞いて今という時間が人生を創り出していき、時間というものが人生そのものだということが分かりました。医療においても、病気の人たちにとって時間というものは可能性であり、それは私たちにとっても同じことだと思いました。時間の大切さこれだけ知ることができるのは常に命と隣り合わせで仕事をしている吉岡先生だからこそだと思いました。

・吉岡先生は、病気の子ども達を助けるということで具体的な援助を行って、例えどんなに大変でうまくいくかわからなくてもやってみて、出来ることから努力すれば出来るとおっしゃっていました。このような実際の体験談を聞いてすごいなと思ったし、自分もこんな人になりたいなと思う。私は医者という道には進まないと思うが、世界でも日本でも苦しんでいる子どもや、社会的弱者の人で苦しんでいる人を助けられる人になりたいと思った。

【第3回GGP講演会】

10:00～　高中部礼拝堂にて

坂西卓郎先生（ＰＨＤ協会事務局長）とサンダーモー（愛称：モーモー）さんにミャンマーの現状と、日本での研修で学んだこと、将来の夢などを話していただいた。

留学生紹介

サンダーモー（モーモー）	サビナ・ビスンケ・ラムテル	レニ グスティカ
出身国：ミャンマー 研修テーマ：健康、教育、栄養 宗教：上座部仏教	出身国：ネパール 研修テーマ：人権、保健衛生、農業 宗教：ヒンズー	出身国：インドネシア 研修テーマ：保健衛生、口腔衛生、教育 宗教：イスラーム教

＊サビナ・ビスンケ・ラムテルさんとレニ グスティカさんは、GLP 1・2年生対象に特別授業でお話をしていただいた。

＜生徒レポートの抜粋＞

・世界の男女の平等ランキングが日本は高い方だと思っていたが、以外にも今回お話を聞いたネパールやインドネシアよりを大きく下回っていたのが驚きでした。

・発展途上国の若い人々は日本に来てまで世界について学ぼうとしているのだから、自分もただ自分の住む国で世界の問題について学んでいるだけではいけないともっと行動しなければならないと感じた。

■1年生　学年の目標【世界に目を向け、興味と関心を持つ】

GLPの取り組み

グローバル・スタディⅠ

研究内容	目標	「世界を知る、体験する」：基礎的・体験的な内容を中心としたプログラム
	対象	GLP　1年生
	内容	３回の授業で1つのテーマを考える。 ①予習用資料（英文）の提示（２週間前迄） ②1回目：講義 ③2回目：グループワーク・ディスカッション形式の授業 ④3回目：高等部教員によるまとめ。
	評価基準	事前課題にしっかりと取り組めているか 授業を聞く態度、及び取り組む姿勢（ノートなどを含めて） 授業内でのグループワークやプレゼンテーション
	授業計画	毎週木曜日　放課後　15:40～16:25　に実施

	内　容	指導教員
4/19	オリエンテーション・SGH とは	三木（GLP 主任）・西室（GS Ⅰ担当）
4/26	オリエンテーション	GLP3 年生
5/10	体験授業①	国際ボランティア経験大学生
5/24	体験授業②	孫良先生
5/31	メンバー確定・GS オリエンテーション	西室（GS Ⅰ担当）
6/7	【GLP スタートアップ①】	枝川・田澤・三木
6/21	【GLP スタートアップ②】	枝川・田澤・三木
9/6	【国際協力①】	中村明先生
9/13	【国際協力②】	中村明先生
9/20	まとめ	磯村（GS Ⅰ担当）
10/4	【異文化理解・イスラーム教①】	八尋（社会科教諭）
10/18	【異文化理解・イスラーム教②】	八尋（社会科教諭）
10/24	高校生討論会への事前学習	關谷武司先生
11/8	【当事者参画型開発①】	武田丈先生
11/15	【当事者参画型開発②】	武田丈先生
11/22	まとめ	磯村（GS Ⅰ担当）
1/10	準備：最終成果用映像と資料・出前授業（中学部）	磯村（GS Ⅰ担当）
1/17	準備：最終成果用映像と資料・出前授業（中学部）	磯村（GS Ⅰ担当）
1/24	SGH 最終成果発表会	磯村（GS Ⅰ担当）
2/14	クラス内最終成果発表（GS Ⅰ）	磯村（GS Ⅰ担当）
2/15	出前授業（関西学院中学部）	磯村（GS Ⅰ担当）
2/21	クラス内最終成果発表（GS Ⅱ）見学	磯村（GS Ⅰ担当）

内容の詳細・成果

【オリエンテーション4/19（木）】

1年生全員にGLP参加ガイダンスの案内を事前に呼びかけた結果、当日は62人の生徒が集まった。GLP主任よりリーフレットを用いたSGH、GLPの趣旨と概念の説明、GLPのGSI授業担当者より説明資料を用いた授業の内容、評価方法、ルール、今後の予定についての説明を行った。

【オリエンテーション4/26（木）】

高校3年生のGLP生5名によるGLPのガイダンスが行われた。学校の授業やクラブとの両立、宿題の量など生徒の日常生活に関わる側面と、具体的な活動（授業、高校生討論会、アジア学院での研修、カンボジア研修、M4Rの取組など）の側面についての説明を、パワーポイントを用いて行われた。フロアからもいくつか質問が出るなど、関心のある生徒にとって大変分かりやすいガイダンスとなった。

【体験授業①5/10（木）】

＜内容・生徒の活動＞

関西学院大学総合政策学部の学生2名を講師としてお招きし、「国際社会貢献活動を知る」と題して、お二人が関西学院大学の海外インターンシップ制度を利用して活動されたことを発表していただいた。マレーシア、オーストラリア、ラオスにおいて、赤十字国際委員会、ラオス日本センターで仕事をされた経験から、高校生に対して「世界は広い」「新しい環境で挑戦し続けてほしい」「自分の足元にある当たり前を大切に」とメッセージを送ってくださった。それぞれに関西学院大学のプログラムを利用されたことから、学内選考基準や英語の資格の話など、参加するまでの具体的な手続きの話もお聞きすることができた。3,4年後にその立場になる生徒にとっては、大変イメージが湧く話であった。

＜生徒レポート＞

・実際に海外でインターンシップをされたお2人の話を聞いて、普段私達がテレビやインターネットで見る世界はほんの一部だということを実感しました。なので、これからは興味を持ったことには積極的に行動に移そうと思いました。また、現状に満足せず、新しい挑戦をし続けることが大切だと気づかされました。私も海外のレベルの高い学生とレベルの高い議論ができるようになりたいです。そのためには、もっと語学力と知識を高め、違った価値観を理解することが重要だと学びました。日本という1つの島国に留まるのではなく、世界は広いということを、自分の足を運んで体験したいです。そうすることで、関西学院が掲げる世界市民の一員となれるよう努力します。

・こんなにも日本が世界との繋がりを必要としていることに驚いた。世界を知ること、体験することの大切さに気付くことができた。また、お二人のお話から、積極的に自分から行動することの大切さを学んだ。自分自身が動き出さないことには何も始まらないので、少しの不安があったとしても、興味を持ったことに思い切って挑戦していこうと感じた。ちょっとした出会いや興味が、大きな体験に繋がることもあるため、一つ一つの出会いを大切に過ごしていきたい。また、お二人とも繋がりの大切さについてお話しされていたため、たくさんの人やものとの繋がりを大切に過ごしていこうと思う。

・私は、今まで「世界」について考えたことが無かった。身の回りの事に気を取られて、広い視野をもてていなかった。今まで自分が思っていたよりも世界が広く感じた。私が今日まで生きてきて、これからも生きていくには「日本」という狭い視野だけでなく、「世界」を見ることができる広くて大きな視野をもつことが必要なのだと思った。今後、「世界」をとらえて新たなことに挑戦していきたいと思った。

【体験授業②5/24（木）】

＜内容・生徒の活動＞

関西学院大学人間福祉学部の孫良教授とゼミ生2人による講義とワークショップを開催していただいた。Go beyond Bordersというタイトルで、世の中には様々なborder、すなわち違いが存在するが、自分の社会と他の社会に社会的責任を果たすことのできるGlobal Citizenになるためにいくつかの提案をしてくださった。Borderを越え違いを受容するには「想像する力」が必要であること、またその「想像する力」を身につけるには間違いを恐れないこと、チームワークを大事にすること、見方を変えること、ストーリーテリングのスキルを鍛えること、と話してくださった。それを実践するために8つのグループに分かれ、自分たちが恐れるモンスターを想像して絵に描き、またそのモンスターを倒すための方法と武器を考案して絵に描き、そのモンスターがどのような存在でそれをどう倒すのかの物語を他のグループに伝える、というワークショップを行った。生徒たちは実に楽しそうに自分と友人の想像力を合わせたモンスターと武器を作り上げ発表をしたが、その過程の中で「想像する力」を発揮することの難しさと楽しさ、また発揮することでより多くのことが達成されることを経験した。これからGLPの授業を受けるにあたり、それにふさわしい心構えを提示してくださった。

＜生徒レポート＞

・今まで世界市民という言葉は何度も聞いたことがあったが、具体的に何をすれば世界市民になれるのか疑問だった。今回孫先生のお話で気づいたなんとなく世界に貢献している人=お金持ちというイメージだったが、別にお金など必要なくただ積極的になればいい事を知った。始めに自分を信じる事、失敗を恐れない事と言われた時ドキッとした。なぜなら常に信じる事が出来ていないから。これからは自分に自信を持ちたい。

・TEAMという文字に隠れている意味がある事に驚いたと共にチームワークについて的確に示した内容だと思った。実際にワークショップを通してチームでやるとアイデアが溢れている事を感じた。これからもチームを大切にしたい。

・私は今回の授業で初めて「見えないボーダー」について考えた。今私が暮らして生活している中で、あまり感じることの無いことで、認識が出来ていなかった。でも、人は1人1人それぞれ違うのだから、自分と違う人=おかしい人と思うのは違うと思った。クリエイティブを求められるこれからの社会では、自分と違う人を受け入れて、自分もこれから進化し続けないといけないと思った。お互いに受け入れ合って、もっと色々なことに挑戦していきたいと思う。

【GLPスタートアップ】

＜内容・生徒の活動＞

選考を終え、GLPとしての初めての正式な授業を行った。スタートアップとして高等部部長の枝川、副部長の田澤、そしてGLP主任の三木の3名の先生方に講義をして頂いた。1回目の授業では「グローバル化」の本当の意味、グローバルに活躍するためには何が必要なのか、Global Studyで何を学びたいのか、講義だけでなくグループワークも交えながら、最後にはグループごとに話し合った内容を発表した。2回目の授業ではSustainable Development Goalsについて考えた。2030年に向けて世界が合意した『持続可能な開発目

標』、グループに分かれてどの目標が最優先されるべきかを話し合い、17個の目標をポスターにまとめ、最後に発表した。まとめ方はグループで様々で、意見を合わせることに苦労したグループもあったようだが、話し合い、相談しあうことの重要性を気付くきっかけになったようだ。

＜生徒レポート＞

・答えが一つではなく、何通りもあるようなワークだったので、グループで考えるととても面白かったです。私たちのグループでは、他人意見にネガティブな発言をせず、ポジティブに話をすすめることができました。大きな模造紙にまとめる方法も、工夫を凝らすことはいくらでもできることに気づきました。
・自分と意見が違う人と一つのものを完成させるために、話し合いがどれほど大切かということに気がついた。そして相手に説明して行くうちに自分の言っていることの矛盾点に気がついた。逆に意見がはっきりと明確になってくるということもわかった。相手の意見を聞き自分との共通点を見つけ、また相手が納得するように説明し、自分も納得することで着地点が見えてきた。

【国際協力と開発】

＜内容・生徒の活動＞

関西学院大学国際教育・協力センターの中村教授に2回授業をして頂いた。本格的なGlobal Studyのスタートに相応しい内容の濃い授業だった。開発とか何か、貧困とは何か、世界の様々な問題、色々な工夫をすれば解決出来ること、開発をすれば変わるかもしれないこと、世界に目を向ける上で大事な側面を学ぶことができた。1人1人が世界の今後を考えること、その必要性を今、異常気象が増える中で人々は感じるようになっている。持続可能な開発をしていく、つまりそれは将来の世代のことも考えた上で今のニーズを充足すること。人類の繁栄と地球環境の両立を世界全体で考えることが大事。SDGsの基本理念は"No one will be left behind"、全ての人のための国際協力。その実現のためには全員の理解と行動が重要だと中村先生は強調された。今回の講義で、世界について新たな一面を知ることで見えてくる世界が変わること、色んな気付きが出来ることを生徒たちは痛感できたと思う。

＜生徒レポート＞

・家族なら協力できる、友達となら協力できる、クラスで協力する、クラブで協力する、学校で協力する、地域で協力する…の延長線上ではないかと考えています。なにかどの国のどの地域の人たちにも有意義だと感じることのできる国際協力の案があればすぐ解決できることも多い気がします。
・発展途上国である国々は独立してから歴史が浅いために発展するには時間がかかってしまい、他国からの協力があってこそだと思います。また、先進国は国としてもまだまだ余裕はあると思うので同じ世界にあるのに、目を背け、ない事にしてしまうなんてことはいけない事だと思っています。現在でも、国同士で協力し合っている事でお互いに助かっていることがあると思います。国際協力をする事によってお互いに高め合える素晴らしい事だと思います。
・ついつい環境を良くしようと考えると自国を優先してしまいそうな感じがしますが、それでは1人先走って他国を置いていってしまい、1人先走っても何か問題が起きた時には他国は助けてくれなくなっているかもしれません。なので、環境を工夫して改善していく中にも常に他国の事を考えながら先走った考えにならないようにすることが大事だと思います。 そして、この理念は簡単そうであってもひょっとすると今までなかなか出来ていなかった事なのではないかと思いました。歴史の中でも国の代表者が自国のことばかり考え、行動した結果滅んでいくという事を繰り返しているような気がします。自国のことに加え、少しでも他国を視野に入れることによって課題解決の良い方向へ進んでいたのではないかと思います。

【異文化理解・イスラーム】

＜内容・生徒の活動＞

高等部社会科教諭の八尋がイスラームに関する授業をした。1回目ではイスラームの始まり、ムハンマドの人生、イスラームの信仰など学んだ。生徒にとって、今までなかなか触れる機会がなく、誤解してしまっていた部分の多さを気付くきっかけとなった。2回目ではイスラームが拡大した背景、イスラーム特有の文化などを学び、イスラームに関する知識を深めることが出来た。3回目も八尋が担当し、2回の授業を通して生徒たちがイスラームに関して感じた疑問点などを質問する質疑応答の時間を持ち、より深くイスラームについて学んだ。今回の講義を通し、イスラームについて色々な気付きを経験し、異文化理解にとどまらず、異文化尊重が出来るようになるためには、まず理解しようと努力することの大切さを実感することが出来た。「異文化と共存するためには、お互いを理解し、できるだけ自文化中心主義を廃止しようとする努力がやはり必要です。」と最後にメッセージを送って下さった。

＜生徒レポート＞

・私にとってとても遠い宗教で関わりも関係もないと正直思っていたけれど、アッラーの教えや身近にあるイスラームの存在を知って今までよりずっと近くに感じるようになりました。きっとこのような機会がない限り自分で調べてみようとは思わないし、自分で学んだとしてもわかりやすい説明や具体的な話などを聞ける場面がないので、本当にこの授業があり、学ぶことができてよかったと思っています。
・初めてイスラームについて深く学びました。日本人にとって関わりがとても少ないイスラームだけど、二回の授業で本当にたくさんのことを学べました。また、もっと知りたいなというふうにも思いました。私の勝手なイスラームについての偏見も薄れたと思います。これから、もしイスラームの人と話す機会があるといいなと思います。
・つい最近まで（最近見なくなりましたが）、「イスラーム国」の話題がニュースでたくさん上がっていました。しかもあまり良いものではなく、日本人も何人も捕まっています。市街地を爆破したりテロをしたりとそんな情報ばかり入ってきていました。 なので、日本人の多くは「イスラーム教は過激だ、危ない」といイメージを持っているのではないかなと思います。しかしいざ学んでみると決してそうではありませんでした。また機会があれば次は「どうしたらその誤解が解けるだろうか」を考えながら学んでみたいなと感じました。

【当事者参画型開発】

＜内容・生徒の活動＞

関西学院大学人間福祉学部の武田先生に2回授業をして頂いた。以前まではトップダウンアプローチで国際開発をするのが主流だったが、今はボトムアップのアプローチで様々な開発がなされている。そのボトムアップのアプローチ方法の1つがPLA、当事者参画型開発である。あるコミュニティをより良くしたい時、まずは下準備としてその集団をよく学ぶこと、そして実際にそのコミュニティが住む村に着いたらまず村人たちと信頼関係を築くこと。その上で村の現状把握をし、開発の計画を立て、実際に実行し、自ら評価し、もう一度同じサイクルを繰り返し、色々な取り組みを通して開発をしていく。村をより良くするためには村に住んでいる人々みんなが話し合いに参加することが必須。村人それぞれ立場によって困っていることやニーズは異なる。意見を言えない人、意見を言える人、つまり権力がない人、権力がある人、様々だ。実際に助けるべきは困っている人、その人たちは権力がない貧しい人である場合は多い。ではそのような意見はどう吸い上げていくべきなのか。PLAの手法として、Matrix　Ranking　を実際に体験した。楽しみながら話し合うことが実際に出来たこと、工夫

をすることで意見を吸い上げることが出来るということを実感することが出来た。

＜生徒レポート＞

・PLAは本当に大切だと思う。というのも、ただ募金活動をしているだけ、文房具を集めているだけではなくて、本当は何が欲しいのか、何を求めているのかを的確に知る必要があると思った。身分の違いなど、家庭の事情によって求めているものは違う。中でも教育制度がないからその機会を求めている人たちに対して文房具を寄付したところできっと何もできずに変わらないままでいると思う。本当に何が欲しいのか、教育を受ける環境づくりであったりその為のお金であったり先生であったり学校であったりが望みかもしれない。ただただあるものを、ではなく、一緒になって、その人たちと同じ立場になって必要なものを探すことが大切なのではないかと思う。

・専門の学者さんや偉い人たちだけで考えるのではなく、市民、村の人たちと一緒に考えなければ、お互いの立場のことを知れない上に、意見を交換し合えないという発想にとても共感できた。しかし実際にそのような話し合いの場を設けるとなると、時間も人も場所も足りないのが現状だと思う。

・日本人ならではかもしれないが、他の人の意見が見える分、その意見に流されて特に理由もなく自分の意見を変えてしまうことがあったので、意見が見えるのがPLAのいい所だが、地域によって工夫が必要なのではないかと思った。

【準備】

＜内容・生徒の活動＞

3グループに分かれて、それぞれのプロジェクトの準備を進めた。2グループは成果報告会に向けての準備をした。GSIでの学びをそれぞれリーフレットと動画にまとめていった。何を学んだのか、それを通して自分自身がどう変化したのか、1年間の学びを振り返り、その内容を全校生徒に伝える機会を得た。もう1グループは2月に行われる中学部への出前授業の準備をした。何を伝えたいのか、どうしたら伝わるのか、試行錯誤しながら計画を立てた。本番当日は30名以上の中学部生が参加し、非常に和気藹々とした雰囲気の中で授業をすることが出来ていた。

【年間発表】

＜内容・生徒の活動＞

4つのグループにわかれ、GSIで学んだことをまとめ、クラス全体に英語で発表した。時間は5～7分で設定した。準備時間を授業中に取ることが出来ず、難しい面もあったと思うが、それぞれしっかりとプレゼンすることが出来ていた。またGSIIの生徒にその発表を聞いてもらい、内容に関して質疑応答の時間を設けた。先輩が見ているということで緊張している様子だったが、良い機会だったと思う。GSIIの生徒の発表を見学して刺激を受けたGSIの生徒も非常に多かった。

【中学部への出前授業】

＜生徒レポート＞

2019年2月15日（金）中学部出張授業報告

事前準備として昼休みや放課後に授業構成やアクティビティ内容、役割分担を話し合い、事前準備班、授業班、アクティビティ班に分かれた。1月31日には中学部で宣伝をさせて頂き、担任の先生方にアンケートを取って頂きおおよその参加人数を把握。2年生は学年閉鎖のため調査できなかったが予想をはるかに上回る参加者数が予想され、アクティビティ班を増員した。16班作る予定で各班の担当者や発表の進行役、アクティビティ前後の授業担当者を事前に決めておき、当日の流れがスムーズになるようにした。

当日は2年生参加者がいないというハプニングがあったが班を減らし対応。授業が始まるまで中学部生にホワイトボードに思いつく限りの国際問題を書いてもらい、まず福永君が大阪万博とSDGsについて簡単に説明した。12班に分かれSDGsのマークを自分たちでデザインし発表した後、各班の担当者が実際のマークについての解説。その後藤野さんが世界には多くの問題があること、その実験場として大阪・関西万博が開催されることを伝え、私たちは今何を学び、どんな大人になるべきなのかを問いかけた。

この授業を受け、中学部生からは「大坂万博に行ってみたい」「GLPに興味を持った」といった声が寄せられ、我々も事前準備の反省から情報共有方法を見直した。

時間が予定を超えてしまったものの、先生方や22人のGS1生の尽力により成功を収めることができた。何より、参加してくれた35人の中学部生が「楽しかった」「また参加したい」と言ってくれたのが嬉しかった。これからもより多くの後輩たちに国際問題を考える入り口が開かれることを切に願う。

分析

【年間を通しての成果と分析】

・グローバルな知識・理解

1年間、「世界を知る、体験する」というねらいのもと、幅広い分野の知識を学んできた。大学の教授によって行われる授業はレベルが高く、内容も難易度が高く、講義を受けている間は必死にノートをとっている様子が印象的であった。事前課題として課されていた英語の文章を読むのもなかなか苦労したようだったが、1年間頑張った成果は最後の年間発表の英語での発表で発揮されていたと思う。世界のことを知ること、目を向けること、そうすることで色々な発見が出来ること、それに気付けたことは大きな成長だった。学ぶだけに留まらず、何らかのアクションに繋げるまでには至っていない生徒が多いので、2年生になり、より深い学びを通し、自分自身で課題を見付け、その解決に向けて少しでも行動できるようになって欲しいと願う。

・主体的な学びの姿勢

講義型の授業がメインであったが、授業終了後に教授の方に質問したり、自らの気付きや疑問点をノートにまとめていたり、積極的に学ぼうという姿勢がよく見られた。授業中に紹介する色々なイベントにも参加する生徒も多く、意欲的な生徒が多かったと思う。

iPad導入学年ということもあり、iPadを用いての活動も多く取り入れた。グループごとの活動での情報共有やプレゼンテーションのための準備などは今までの学年と比べて、非常にスムーズだったと思う。今年度初めて行った中学部への出張授業も担当生徒だけでなく、GLP全員が関わる形で準備をしていた。自ら主体的に学ぶ、ということだけでなく、協力し合いながら共に学び合うことも出来るように成長したと感じている。

今後の課題

1年目ということで受動的になってしまっている生徒も多かったと思う。2年目は「世界を学ぶ」ということで、より幅広く、更に深い知識を身に付けることになる。色んなきっかけを自ら掴み取りに行き、次のステップへとつなげていって欲しいと願う。次年度はカンボジアでの研修や高校生討論会もあるので、今後の活躍に期待したい。

今年度は日本語での活動や発表が多かったので、英語での活動、グループワーク、プレゼンテーションなども力を入れていきたい。自分の意見をきちんと発信し、日本語だけでなく英語でも伝えられるようになるためにも、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上に努めたい。意欲的な生徒が多いので可能な限り、そういった機会を設けることで変化が見えてくると感じている。

GLPセッション・デイ／GLPセミナー

研究内容

対象：GLP1年生

授業計画

	内　容	講　師
7/11	GLPセミナー　国語	方波見彰（国語科）、谷口雄梧（能楽師）
12/7	GLPセミナー　数学	宮寺良平（数学科）
12/12	GLPセッション・デイ	杉本夏奈（法学部、3回生）
12/17	JICA関西訪問	遊川章宏（JICA）、早瀬悟志

内容の詳細・成果

【GLPセミナー　国語】

＜概要＞

日本古典芸能として世界でも知られている「能」。室町時代から伝承されていて、武士の存在との結びつきが非常に強く、武士の考え方や動き方と能の内容や踊り方は密接に繋がっている。言葉や内容は確かに難しく、江戸時代には注釈が存在していた程であるが、わかる部分や聞き取れた言葉をつなげて、理解して、若い人たちにも能を一度見て欲しい。ずっと受け継がれてきた能、それを今生きている人が舞台に上がり、生きている人がそれを見ている。色んな当たり前を表している能、実際に見て、「明日をどう生きるか」を考えるきっかけにして欲しい。

＜成果＞

なかなか日頃触れることのない「能」について学び、日本のことなのに知らないことがまだまだあることを知った。身近なところでも新しい世界に気付くきっかけとなり、世界に目を向ける前にまず日本のことを知る大切さを学んだ。

＜生徒レポートの抜粋＞

・海外の人から日本の伝統的な能や禅のことなどについて聞かれても答えられなかったら恥ずかしい思いをします。他の国に目を向けるのも、もちろん良いことだけれども、まずは自分の国の文化や伝統、歴史を知って海外の人に伝えられるようにすることも大事という事を学びました。

・能面が少し下を向いただけで暗い表情になり、扇を持った手を高く上に上げて顔も上げると、とても堂々としていたので少しの角度で表情を変えることができるのはすごいと思いました。

【GLPセミナー　数学】

＜概要＞

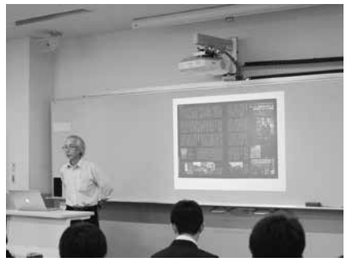
「世界で活躍するために必要なこと」をテーマに数学科の宮寺教諭に講演して頂いた。独自のコンテンツ（専門性）、発信するための英語力（語学力）、目的（人生の最終目標）、この3つが必要で、書く英語力は発信する上で重要だが、それよりもコンテンツ、特技、ちょっと違う部分の方が不可欠だと話して頂いた。実際に世界大会に参加した卒業生にも話してもらった。最後に「まず目標を見付けること。ただし途中変更は当たり前。何をしたいかを自分に問いかけ続け、他より一歩二歩前に出ることが大切。」とメッセージを頂いた。

＜成果＞

世界を舞台にするとなると何だかすごく大きなことを成し遂げないといけないようなイメージを持ってしまいがちだが、そうではないことを身近な存在である卒業生から話を聞けたことはとても良い刺激となった。何かをしたいけど、何をしたらいいのかわからない生徒も多い中、今何をすべきなのかを考える良い機会となった。今回の講義を受けて、自分の目標を考えた上で、それぞれ新たな一歩を踏み出して欲しいと願う。

＜生徒レポートの抜粋＞

・同じ高校生や大学生でも、時間の使い方や、目的を持つか持たないかで全く違うものになることを改めて深く実感しました。私は人生の最終目標についてきちんと考えたことがなかったので、これを機に考えてみようと思いました。



【GLPセッション・デイ】

＜概要＞

法学部3回生の杉本さんにカンボジアでのボランティア活動について話をして頂いた。子ども達が教育を受けることができれば子どもの将来が変わる。より良い社会のためには教育が一番必要だと感じたからこそ、カンボジアで教育支援を行った。初めは途上国で暮らす人々のことを悲観的に感じていたが、カンボジアの現地の人々は目を輝かして満足そうに暮らしていた。自分の立場が上だと思って接していたことに気付き、恥ずかしくなった。上から目線で支援している人が多いと感じた。支援する側が一方的に考えてはいけない。支援を押し付けることでむしろ発展途上国の人々の迷惑になる。現地の人々が何を望んでいるのかを考え、手を差し伸べることが本当の支援である。最後に「恵まれた環境で教育を受けられることは素晴らしいことだ」とメッセージを頂いた。

＜成果＞

ボランティア活動をする上で支援する側の心得を教えてもらい、相手の立場に立って考えることが必要不可欠であることを改めて考えさせられる機会となった。高校生のうちから、あるいは大学生になってから、何かしらの形でボランティア活動をしたいと考えている生徒も多いようで、杉本さんの話を聞いたことで、よりその気持ちが強まったようだった。

＜生徒レポートの抜粋＞

・発展途上国をイメージするとどうしても悲観的にみてしまう。治安が悪い、食料が十分にないと思いがちだが全部の途上国がそうではないことを忘れてはいけないと思った。その勘違いがニーズに合わない支援に繋がるのだと思う。先進国の人だから支援してあげなきゃ、と心のどこかで思っていたことが恥ずかしくなった。半分自己満足のために支援したいと思っていた。先進国でも途上国でも同じ立場で支え合う、お互いのことを親身になって考えることが大切だと感じた。自

分の間違った考えを改めるためにもカンボジアなどの途上国に行きたい。

・私も大学で発展途上国の支援に関するボランティア、海外派遣に参加したいと思っているので、今回の講義で実際に行った人の感じたことや学びを具体的に聞くことができてよかった。私も正直、発展途上国に対して悲観的に見てしまっていたが、本当はそうでないと知った。私も現地で経験することで考えが変わるのではないかと思った。

【JICA関西訪問】

＜概要＞

13:30 エスニックランチ

14:30 JICA概要説明　遊川章宏氏

日本の食糧自給率は？日本製品を買うのは誰？電車を動かす燃料はどこから来ているの？当たり前の日々もよく考えてみると途上国とのつながりがある。日本も以前は援助を受けていたし、東日本大震災の時は174の国から支援をしてもらった。国際協力とは決して一方通行ではない。世界を信頼でつないでいく、その架け橋の役割を担っているのがJICAである。

15:00 青年海外協力隊の活動体験談　早瀬悟志氏

スリランカで2年間体育教師としてボランテイア活動をしていた。他の誰かがやったらいいと思うことを自ら積極的にやってみようと思ったのがきっかけ。この経験を通じて人のために生きることが自分にとって幸せに生きる方法だと気付いた。スリランカでは体育は座学で学ぶことが一般的。その中で日本人として伝えられる教育は何かを考えた。チームとして、みんなで体を動かすことを大切にしようと思い、ラジオ体操などを授業で行った。たった2年間の経験、皆さんも入口のことよりも出口を考えて、今後の人生の選択をして欲しい。

16:00 施設見学

＜成果＞

担当の方からJICAがどんな活動をしているのか、ボランテイアに行っていた方からどういう活動を行ってきたのか、直接、話を伺うことが出来た。たとえ小さな1歩であろうと、実際に何かしら行動をすることの大切さを知るきっかけとなった。自分たちには何が出来るのか、どんな協力の仕方があるのかを考えさせる内容の講演で、世界の状況を普段のGlobal Studyで学んでいる生徒たちにとってはとても良い刺激となった。

＜生徒レポートの抜粋＞

・私はこれまで、JICAのことを聞いたことがあるくらいでしたが、どんなことをしているところか知らなかったので、実際に行き知れてよかった。また「世界を信頼でつなぐ」というモットーがとても印象に残った。これができたら世界は絶対にうまくいくだろうなと思いました。でも、一人一人が意識を持っていたら変わっていくと思います。また、入口よりも出口を考えることが大切という言葉が印象に残りました。これから自分がどんな人になりたいか考えたいと思いました。

・まず、漠然としたイメージしか持てていなかったJICAについてよく理解することができた。特にODAという言葉などは聞いたことがなかったのでとても充実した学びになったと感じた。また、林さんの体験談は本当に開発途上国に行っていた人にしかできない内容だったので心に響いた。自分の利益を求めずに自分にできることを誰かのためにしようという気持ちが海外に出ていきたいと思う人にとって最も重要なことであると思った。

分析	・グローバルな知識・理解 様々な知識を得る上で、色々な先生方からお話を聞いたり、ボランテイアをしていた方の体験談を聞いたり、実際にJICA関西に訪問したりすることは良い刺激になった。「知る」だけで終わらず、「では具体的にどのようにしたらいいのか」という部分まで踏み込んで考える機会もあり、知識だけでなく実践的な学びをすることも出来た。 ・主体的な学びの姿勢 それぞれの講義を通し、色々なところに気付いた生徒が多かった。同じ講義を受けても、心に残った部分は異なっていたが、今自分が何をすべきかを全員が考えるようになったのは大きな成長だ。最後のJICA関西を訪問した際は講演会の後、多くの生徒から質問が出た。話を聞くだけでなく、自分自身の問題として捉えられるようになった成果だと感じている。
今後の課題	知りたい、学びたいという意欲はあるものの、積極性や行動力が伴っていない生徒も多いのが現状。1年生だからと遠慮せずに、来年度は興味があることに関しては自ら進んで行動し、色々なことに挑戦し、様々なきっかけを掴み取っていって欲しいと思う。

国内フィールドワーク

研究内容

対象	GLP希望生徒　9名（1年生7名、2年生2名）
研修計画	

1．参加生徒募集及び選考	2018年4月11日～6月8日　参加生徒募集
2．事前ミーティング	2018年7月18日
3．国内研修	2018年7月30日～8月1日

内容の詳細・成果

アジア学院とは、有機農業の技術（身近なもので可能な農法）を持った人材を育てることによる国際協力の現場

「Foodlife」という概念を重視している。うまく日本語訳はできないが、食によって命は成り立っている、食べ物はよい土から生まれる、といった概念である。施設内では、ほぼ自給自足の生活を送っている。

学校法人ではあるが、明確な教員・校長などから成る組織もなく、共通の価値観を共有する人たちが集まる、不思議な共同体で、途上国からの研修生（パティシパント）のほか、欧米からの研修参加者（数ヶ月ほどの中長期、キリスト教会関係者が多い）、日本国内からの研修生（学生や社会人）も、彼らが各食事、朝の集いなどで一堂に会し、情報や食事を共有、4つのグループに分かれ、農作業に従事している。研修では、その食事や朝の集い、朝の農作業に一緒に参加した。朝の農作業では、家畜（ヤギや鶏）の世話、飼料づくり、除草などに参加した。2日目の午前には約2時間弱、ニンジンの種まきなどを手伝った。メインは、1日目夜の、パティシパントへのインタビュー。基本的に、パティシパントは各国各地域のリーダー的な役割の人たちで、帰国後は農業だけでなく社会やコミュニティの中心的な役割のために働きたいという熱意を持って来ている。

アジア学院でのスケジュール

1日目	2日目	3日目
オリエンテーション	ラジオ体操	ラジオ体操
アジア学院紹介DVD鑑賞	清掃、朝のフードライフ・ワーク（農作業）	清掃、朝のフードライフ・ワーク（農作業）
キャンパスツアー	朝の集い	朝の集い
夕食後、アジア学院の学生にインタビュー	ファームワーク	那須セミナーハウスの清掃
	食べ物と命の話　（講義）	キャンプの振り返り
	インディアンカレーワークショップ	

【生徒の様子・成果】

各国から農村のリーダーを招いて有機農業や共同体づくりを学ぶ学校法人ということで、野菜の栽培だけでなく鶏やヤギといった家畜まで、本格的な農業を実践されていた。酷暑での農作業ということもあってかなりハードであったが、体調不良者も出ず、全日程を終了できた。

分析

【グローバルな知識・理解・研修全体の感想、主体的な学びの姿勢】

本格的な農作業だけでなく、いろいろな国から集まっているパティシパントやインターンなどの外国人と話す機会、真剣に農業と命について考える機会など、非常に刺激が多く濃密な三日間であった。英語によるコミュニケーションや食についてディスカッションする機会が多く、2年生はそれなりにこなせていたが、1年生にとっては十分に発信、消化しきれていないところもあった。

生徒にとっても、食べ物が作られる背景にどんなことがあるのかを知る機会となり、有意義な研修となったようだ。

【研修に参加した生徒達の感想・ふりかえり】

・初日、見学ツアーで学院内を回りながらアジア学院職員の山下崇さんが農業用の道具が置いてある場所で「最新の技術ではなく最適な技術が必要です」と言われました。私にとってとても共感する言葉でした。ＡＩが開発される中、以前から私は疑問を持っていましたが、その気持ちを代弁してくれたようでした。農業においても科学の発展により虫に効く薬が開発されていますが、将来を考えると自ら首を絞めている行為だと知りました。アジア学院では、土に栄養を与えるために酢に動物の骨を入れて肥料を作ったり、土に微生物を入れ四十度ぐらいで発酵させ豊かな土を作ったり、発展途上国で手に入りそうなものでサイクルを作っていました。養鶏場で鶏に餌を与え、産みたての卵を取りました。その場も臭かったですが餌を作るために発酵させる場所はさらに臭く強烈でした。いつも食べている野菜やお肉、卵はあんなにお世話するのが大変で長い時間をかけている事を体験したからこそ、有機野菜を選び、無駄に物を買わず、大切にし、ゴミをあまり出さないように努めたいと心から思えました。作っている方の気持ちを心に留めていきたいです。また、うちには庭があるので簡単に育てられる野菜からチャレンジしたいと思います。その第一歩から変わっていくと信じています。世界に最適な技術が更に広がってほしいです。発展途上国だけでなく中国やアメリカなどの先進国でも最適な技術を取り入れれば世界規模で取り組めると思います。アジア学院にアメリカの大学生の方が来ており、意外に思いましたが、今そして将来に繋がる期待の星だと思います。もう一つ素晴らしいと思ったことがあります。礼拝堂で喋る人（偉い人、リーダー）が一番下の位置であったことです。学校の礼拝堂でも教室でも前に立つ人は壇上に立ちます。それは立つ人が聴衆より上の立場であることを示しています。それが普通だと思っていましたが、理想のリーダーを考えた時、その形とは真反対でした。学生さん達は宗教も違えば文化・習慣も違う、にも関わらず大きい争いもせず共同生活を送っています。皆には礼拝堂の形であるリーダーこそ下から支えなければいけない事をよく分かっているからだと感じました。イエスが弟子の足を洗うように人に奉仕する、人に必要とされる人になる事を私も目指そうと思いました。関学もマスタリーフォーサービスをスローガンに掲げていますが今回改めて自分の理想にする姿を確認することができました。これまで主に二つの事を書きましたがここには書ききれないほど学び、感じた事があります。ザンビアについてのお話、食堂に隠された意味、食糧自給率など考えさせられました。最後に思ったのは、アジア学院は世界が理想とするコミュニティであるということです。三日間で感じた事を家族に友達に未来に伝えていければと思います。このような機会を与えてくださった方々に感謝を忘れず過ごしていきます。

GGPの取り組み

GGP1年生活動報告「今世界で何が起こっているか ―タブレットで追跡せよ」

研究内容

目標　現在世界で起こっていることに興味を持ちそれに対して自分なりの意見を持つ

対象　1年生全員

授業計画

日　付	内　容	講　師
7/13	グローバルタブレットセッション全体の説明	
7/17	講演会「ニュースサイトの見方」	西村修平氏
9/11	クラスごとに班の立ち上げ・テーマ決め	
9月～11月	ニュース紹介スライドの作成	
12/18	各班のニュースをクラスで発表し互いに評価する	
3/12	クラスの代表者が講師の前で発表し講演を聞く	苫野一徳氏

内容の詳細・成果

＜内容の詳細＞

本校のGGPのプログラムの目標は「本校の全生徒が、世界のグローバルな問題に目を向け、『国際協力』『国際問題』への公正な理解と認識が持てるように導くこと」であるが、1年生ではまず、世界で起こっていることに興味を持ち、さらにそれらに自分なりの見方・意見を持つことから始める。

1年生全員が、所持しているタブレットを用いて現在世界で起こっていることの中から興味のあるものを一定期間調べ、グループに持ち寄ってAirdropでシェアし、ひとつのプレゼンテーションを仕上げる。世界は激動を続けているが、この方法だとその変遷を捕捉しすぐにプレゼンテーションに反映させることができる。このプロジェクトを通じて世界で起こっている問題をリアルタイムで捉え、それへの専門家やジャーナリストの解説を参考にしつつ自分なりの意見を持つことを最終的な目標とする。今回活用したニュースアプリNewsPicksは、配信したニュースに対しその分野の専門家や一般の方から解説コメントや意見が寄せられることを最大の特徴としているが、クラスの代表者が最終動画を作成する上でNewsPicks社スタッフ(本校卒業生)の協力を得ることもできた。

＜成果＞

まず生徒たちは、ニュースサイトを通して幅広く時事・国際問題に触れることにより読解力や分析力を得、仲間と協力してまとめる中で協調性やリーダーシップを深めた。また最終発表会である動画コンテストにおいて互いの動画を見ることにより共感力や発信力を得ることが期待される。

分析

・グローバルな知識・理解

各クラスの代表者が取り組んだテーマは、AI問題・大阪万博で何をしたいのか・日本のごみ問題の解決法は・入れ墨は日本でなぜ肯定されないのか・GAFAの世界席巻にどう対処するか・日本食はなぜ世界に広がったのか・日本の2050年問題とは、であるが動画作成に向けて自分たちが選んで調べたテーマに関して多くの知識と多面的な理解を得ることができた。

・主体的な学びの姿勢

動画作成は初めての経験で苦労したこともあったが、完成に向けて班員同士で協力し合い、作品を仕上げるための主体的な努力がなれた。それゆえに、作成にかかわった者たちは3月12日のコンテストでの講師の評価や講演でさらに多くのことを得ることになるだろう。

今後の課題

代表班の間でも、最初の段階で意欲に差があり、モチベーションの低い班に関しては担任の協力を仰がなければならない局面があった。代表班にはクラスを代表しているという意識を持ってほしかったが、そこまでには至っていない班があったり、一方でクラスの方も代表班を十分サポートできていない場合は代表班の頑張りに頼らざるを得ない状況もある。もっともこのような状況は、発表までの短い期間で変わる可能性が十分にあるのでどのクラスがどのように仕上げてくるか楽しみなところでもある。

■2年生　学年の目標【さまざまな視点でグローバルな課題にある原因を調査・分析する】

GLPの取り組み

グローバル・スタディⅡ

研究内容	ねらい	「世界を学ぶ」：専門の大学教員から深く学ぶプログラム
	対象	GLP　2年生
	内容	３回の授業で1つのテーマを考える。 ①予習用資料（英文）の提示（２週間前迄） ②1回目：講義 ③2回目：グループワーク・ディスカッション形式の授業 ④3回目：高等部教員によるまとめ。
	評価基準	授業への出席率、レポート、授業ノート、プレゼンテーション、GPS Academic®テストの点数を対象に評価。国内外のフィールドワーク、大学の発表会や外部イベントへ自主的に参加したものは加点する。 **授業ノートの評価基準は以下の3点** ①授業内容をしっかりまとめているか②テーマごとに課される事前課題への取り組み③授業に対する自分の感想を述べているか **プレゼンテーションの評価基準は以下の4点**　*英語でのプレゼンテーションは加点対象 ①内容が魅力的か②話し方（声の大きさ・アイコンタクト・原稿を覚えているか）③パワーポイントが見やすいか④興味を引くための工夫があるか
	授業計画	

	内　容	指導教員
4/12	オリエンテーション	泉川（GSⅡ担当）
4/19	【グローバリゼーション①】	福田　豊生先生
4/26	【グローバリゼーション②】	福田　豊生先生
5/10	【グローバル経済と開発①】	栗田　匡相先生
5/24	【グローバル経済と開発②】	栗田　匡相先生
5/31	【教育・保健　事前学習】	泉川（GSⅡ担当）
6/7	【教育・保健①】	岩坂　二規先生
6/21	【教育・保健②】	岩坂　二規先生
9/8	【難民問題①】	志甫　啓先生
9/13	【難民問題②】	志甫　啓先生
9/20	まとめ	泉川（GSⅡ担当）
9/27	【国際援助①】	山田　好一先生
10/4	【国際援助②】	山田　好一先生
10/18	まとめ	泉川（GSⅡ担当）
10/24	高校生公開討論会事前学習合同授業	關谷　武司先生
11/8	Culture & Perception	ビビアン・カバリ先生
11/15	Culture & Perception	ビビアン・カバリ先生
11/22	まとめ	泉川（GSⅡ担当）
1/10	最終成果発表準備・出前授業	泉川（GSⅡ担当）
1/17	最終成果発表準備・出前授業	泉川（GSⅡ担当）
1/24	最終成果発表会	泉川（GSⅡ担当）
2/12	出前授業（関西学院初等部）	泉川（GSⅡ担当）三木、枝川
2/14	GSⅠクラス内発表見学	泉川（GSⅡ担当）
2/21	GSⅡクラス内発表	泉川（GSⅡ担当）

内容の詳細・成果

【グローバリゼーション　福田先生】

＜内容・生徒の活動＞

経済がグローバル化し、世界経済全体がボーダレス化している。金融の巨大化と生産の国際化により、国同士の関係が増大している。グローバライゼーションが引き起こしている深刻な問題として、国内産業と移民があげられる。Globalizationを促進する要因としてa）経済原理 b）情報ネットワーク c）技術の普遍化 d）英語の国際語化が挙げられる。世界の企業が求める学生の資質として“大学が国際的かどうかは関係なく、学生一人一人がInternationalismの意識をもっているかどうか”がみられており、Global Mindsetが重要になってくる。

1）何事にもチャレンジすることが楽しくて面白い。
2）できないことをできるようにするのが面白い。
3）努力するほど上達すると思う。
4）なぜできなかったのか、失敗の原因を深く知りたい。
5）他の人の成功は、勉強になるし刺激になる。

この5項目から最も重要と思わるものを各自考えた。また、“IB learner profile”の10項目（Inquires, Knowledgeable, Thinkers, Communicators, Principled, Open minded, Caring, Risk-takers, Balanced, Reflective）の中で自分なりに強化すべきものは何かを考えた。

＜生徒レポート＞

・グローバルな人材には何が必要なのかということを考えることができた。単に英語が話せるだけではなく、人間的な総合力が必要とされる。今回授業で学んだ、“A Global Mindset”や“IB Leaner Profile”から自分の必要とするものを考えて行動していきたい。
・国際的に活躍するためには、自国や相手国の良い点、改善点を理解すること等の基礎知識、チャレンジする気持ちなどが必要だと思った。これらのことからまず何事にも興味を持つところから始めていきたい。
・福田先生から、社会の全体を幸せにすることは不可能で、どこかを犠牲にしなければならないということを学んだ。また、グループで改善策を一緒に考えることで、協力して考えることのメリットを学ぶことができた。

【グローバル経済と開発　栗田先生】

＜内容・生徒の活動＞

導入として貧困とは①所得・消費・教育・健康などの水準が低い水準にあること、②生活が脆弱な状態におかれていること、③声・力のないことの3つに定義されていることを学んだ。所得で見た貧困や貧困の捉え方、貧困計測のための3つのステップなど専門的なことを説明され、貧困ラインの設定の仕方など専門的なことを説明された。貧困国でもマダガスカルに焦点が当てられ、6つのグループに生徒達は分かれ、マダガスカルの①農業 ②教育 ③ジェンダー ③幸福 ④健康 ⑤交流 ⑥事業について話し合った。各グループにはゼミの大学生のアドバイザーがつき、テーマについての助言を促す役割を担った。第1回目の授業でグループごとに宿題を出され、第2回目の授業までにその宿題へのアドバイスをもらいに大学の方までグループごとに訪れるというワークが課された。第2回目の授業では、その宿題への解答をグループごとに5分程度で報告してもらう。最後に、栗田先生と栗田先生のゼミ生から発表に対する講評を兼ねたフィードバックをいただいた。

＜生徒レポート＞

・今回セネガルの事例を挙げて問題解決策を考える中で、具体的な数字や実際の取り組みとその後の現状を比較することで人に伝わりやすくなるということが分かった。なかなか先進国では想定できないような根深い問題が現地にはあって、改善の難しさを痛感し、先進国の私たちだけで解決できるような甘い問題ではないことが分かった。
・調べ学習では、零細漁民という言葉さえ知らなかったが、調べるうちに楽しくなってきた。班で解決案を考えるときは、それぞれ農業をもっと促進する考えを持つ者、漁業にもっと促進する考えを持つ者がいて、その中でもアプローチの仕方が異なっていて面白かった。

【グローバル社会と教育　岩坂先生】

＜内容・生徒の活動＞

1.グローバル世界における教育と開発では2.「万人のための教育」から「持続可能な開発目標」へ3.“グローバル社会と教育”を問うという3つテーマをもとに講義された。世界の教育の現状と教育の質について説明され、また国際社会の教育の取り組みの変遷としてユネスコ憲章やミレニアム開発目標などを引用された。

＜生徒レポート＞

・教育を受けさせるためには学校を作ればよいという考えが、必ずしもどこの国にも通用することではない。学校があっても家庭の経済状況や生活環境によって通えない人々もいることを知った。そのため、学校の建設費にお金を使うよりも教育を無償化、もしくは安くするなどの対策を考え、誰もが卒業できるように工夫する必要があると思った。

・最初のフォトリーディングで感じたのが、写真のミャンマーの少年を見て、勝手に貧しい、農業をはだしでしているなどの勝手な考えが浮かび、まさかパソコンを使っているとは想像もつかなかった。教育と貧困が強くリンクしているということを今回の授業で再認識した。

・日本などの先進国でも質の高い教育は必要だと思う。銃を持っている人はいなくても、暴力や言葉の圧力によって不登校になってしまうことがある。教育を変えることは決して簡単なことではないが、少しずつ意味のある変化を行っていく必要があると思う。

【難民問題　志甫先生】

＜内容・生徒の活動＞

一回目の授業では、世界中で問題視されている『難民』についての定義・世界各国の事例・問題点などを学び、二回目の授業では、①自分は難民と呼ばれる人々にどのようなイメージを持っているか②日本は難民の受け入れに消極的だと言われているが、なぜ積極的になれないのか③難民の人々を助けるという救いの手が差し伸べられなければ世界はどうなるのかという3つの問いに対して、4・5人のグループに分かれて自分たちの意見を発表してもらった。志甫先生は、人道的な観点から考えると難民は受け入れるべきだが、受け入れることによって生じる問題を考えると様々な対策が必要となる。この問題を考えるにはデータをもとにミクロとマクロのそれぞれの観点から解決策を考えていかなければならないとおっしゃられていた。

＜生徒レポート＞

・日本の人々は難民に対して、人道的な面から援助したいという気持ちがあるにもかかわらず、実際にそれを受け入れる制度が整っていないことを知った。

・今までメディアで難民について良く取り上げられていたが、彼らがどのような問題に直面しているのかをより具体的に学ぶことができた。

・難民については、メディアにおいて先進国側が受け入れを拒否している映像を見ることが多かったので難民を受け入れることの利点を考えたことがなかった。労働力の確保、国際性の促進、他国からの信頼向上など重要な要素を含んでいることが分かった。

【国際援助　山田先生】

＜内容・生徒の活動＞

一回目の授業では、「なぜ国際協力をする必要があるのか」という抽象的な問いから入り、様々な国際協力の中で『防災』というものをピックアップして、日本がこの分野でどのように国際的に貢献しているのかという具体的な話をされた。世界各国で起こる可能性のある防災に対し、その当事国である日本が、過去の経験、知識、技術を生かして各国の災害の被害を最小限に食い止めるための活動が行われている。授業の後半ではJICAの作成した防災ゲームを行い、様々な災害のシチュエーションの中で、どのような判断をすればどれだけの人々を救うことができるのかということを学んだ。

＜生徒レポート＞

・授業の初めに「支援は必要なのか」という問いについて考えたのが印象的だった。そして、支援もいつまでもできるわけではないのでいかに現地の人々が自分たちで自立させるかが大切だということが分かった。

・災害を予防したり復興したりするのにかなりの段階を踏んで計画的に行われているということに驚いた。国際支援も世界各国との信頼に大きく影響していることを学んだ。

・日本の防災技術が世界の中でトップレベルであり、日本がいかに世界の中で貢献しているかを学ぶことができた。しかし、日本は東北の復興などを最優先で行うべきではないかと疑問を感じた。

【高校生公開討論会事前学習合同授業　關谷先生】

＜内容・生徒の活動＞

1月26日の高校生公開討論会に向けて、GSⅠ・Ⅱ合同で事前学習を行った。今回の高校生討論会のテーマ「世界の歴史的諸問題」と「教育」から、關谷先生の研究テーマから情報提供していただいた。關谷先生は、国際教育・教育開発の中でも特に小学校や中学校を対象とした基礎教育の分野についての教育支援の研究をされている。

まず、授業の導入として、關谷先生が実際に調査にした中米や東南アジア、アフリカの小学校の様子を紹介され、世界には様々な理由で学校に通えない子どもたちがいることや、日本と途上国の進学率の比較などアカデミックなデータを分析しながら途上国の教育環境について見識を深めた。続いて、關谷先生からGLPの生徒たちへ公開討論会の議題でもある「これからのグローバル人材に求められるものは何か」と、「グローバル化する世界で生きていくにあたり私たちは何を学ばなければいけないのか。過去のグローバル人材の功罪をあらかじめ用意された事例から2つ選択し、それらを踏まえて提示しなさい。」という問いが課された。

【Culture & Perception　ビビアン・カバリ先生】

＜内容・生徒の活動＞

一回目の授業では、「文化とは何か」というテーマから、自分たちの文化についての理解を深めていった。実際に世界中の地図や、列の並び方など国・宗教などによって様々な文化が存在することを学んだ。8つの日本の習慣に関するリスト（礼をすること、マスクをすること、生卵を食べることなど）が世界中で共通認識されるのかを考えた。実際に自分自身が当たり前と思ってとらえている事柄は、周りから必ずしも同じように受け取られているかはわからない。

二回目の授業の前に商品の世界中の宣伝チラシを集めてくる課題を出された。マクドナルドやシャンプーなど様々な事例を集めてきていた。そこには、国や宗教の文化の違いがはっきりと表現されていた。

三回目の授業では自民族中心主義と文化相対主義に触れ、その結果社会に生じている事象について考えた。

	＜生徒レポート＞ ・今回の授業では、自分が日本人であるということについて深く考えるきっかけになった。これから異文化の人々と接する機会が増えると思うが、日本はこうだからというバイアスを外して接するようにしようと思う。 ・課題で商品の宣伝チラシを集めたが、そこにはその国や宗教の文化が表現されていることを感じた。グローバルな人材になるには、文化の違いを受け入れ、他者の意見を受け入れながら問題を解決していく必要があることを学んだ。 ・オールイングリッシュの授業で全員を巻き込んで行われる授業が楽しかった。自ら考えて意見を述べる機会がたくさんあったので、すごく充実感があった。今日学んだ文化の多様性を様々な国の人々と共有したいと思った。
分析	＜グローバルな知識・見解＞ GSIIでは、GSIの「グローバルな世界と体験する」というテーマで得た経験を生かし、「グローバルな問題を知る」というテーマを掲げ、世界各国で生じている諸問題に取り組んだ。関西学院大学内部や外部から、経済・教育・保健・国際援助・難民・異文化理解などの様々な分野を専門とする方々をお招きし、それぞれの分野においてより深い知識を蓄えた。講義で学んだ内容をもとに、グループワークやプレゼンテーションを取り入れ、お互いの考えを共有した。生徒の中には、教授から与えられた情報をもとに、外部で行われている様々なイベントに積極的に参加する生徒も少しずつ増えてきた。それらの生徒が、控えめな生徒たちを上手にリードし、良い学びの空間を作り出しているように思われる。GLPセッションでは、関西学院大学の国際貢献プログラムに参加している生徒を招き、「グローバル人材とは何か」というトピックについて話し合った。「海外で仕事をする人」「英語を話せる人」などの漠然とした考えから、「異文化の価値を受け入れ、そこから更なる価値を見出せる人」というような意見も出るようになった。彼らの中のグローバルに対する意識が、プログラムを通して少しずつ変化してきているように感じた。関西学院大学GSIIIでは「自らアクションを起こす」という目標をもとに授業が展開されるので、彼ら彼女たちがプログラムにどのように取り組んでいくのかが非常に楽しみである。高校生の彼らにとってできることは限られているかもしれないが、この学びの中から得たものを生かし、地域、そして世界に貢献していけるようなプロジェクトが生まれることが期待される。 ＜主体的な学び＞ 「グローバルな問題を知る」というテーマをもとに一年間様々なテーマについて学んできたが、大学の教授の講義されるとても複雑な問題についても学ぶ機会があった。それらの講義の中でのグループワークやプレゼンテーションでも作業を分担し、インターネットや書籍を通じて様々な情報を取り寄せ、自分たちの言葉で説明することができるようになってきている。また、英語のネイティブの講師によって行われた異文化コミュニケーションの授業では、自分の頭の中にある語彙とジェスチャーを駆使しながら、積極的に相手に考えを伝えようとする姿勢が見受けられた。英語力の差はもちろんあるが、話す側も聞く側も相手の意図することを理解しようと取り組んでいたのが印象的だった。2年間を終えて、クラスの中にはグローバルに対して学ぼうとする意識を高く持ち、それぞれの分野に積極的にチャレンジする生徒が固定化されてきているのも事実である。
今後の課題	この2年間、GLPの講義やGGPの講演会を通して、世界の現状や問題点など様々な知識を身に着けることができた。カンボジア研修においては発展途上国の現状を肌で感じ、アジア学院では発展途上国から有機農業を学びに来られている方々と貴重な意見交換ができた。また、高校生討論会（関西学院高等部・関西学院千里国際高等部・大阪府立北野高校・兵庫県立長田高校が参加）では、グローバルな課題に対して同世代の仲間たちと意見を共有するという貴重な経験をすることができた。今までどちらかというと受動的な活動が多かったが、3年目はこれまでに得た知識や教養を生かして自分たちには何ができるのかということを考え、行動へと移してもらう。実際に今年の3年生は、難民支援を目標としたM4Rや、インドネシアのハラパン高校とスカイプを通して交流するというプロジェクトを行った。これらのプロジェクトを継続していくか、何か新しいものに取り組むのかは、生徒たち次第であるが、この学年はどのようなことに取り組むのか非常に楽しみである。プロジェクトの成果を上げられることに越したことはないが、実際に彼らが思い描くプランはなかなか思い通りにはならないことも多いだろう。たとえそのプロジェクトが上手くいかなかったとしても、そのプロセスの中で大きな収穫を得ることができると考えている。

GSI・Ⅱ出前授業

SGHの最終年度にあたってSGH終了後に活用できる枠組みを模索すべく、今年度挑戦したのが系列の小学校（関西学院初等部）・中学校（関西学院中学部）への生徒による出前授業である。本校SGHの柱のひとつは「高大連携」であるが、それは大学からの教員派遣や大学生ファシリテータの参加などで一定の枠組みは見えてきた。そこに、小学校から大学院までを擁する総合私立学校としての本校の特性を活かし、高校「から先」の大学に加え、高校「まで」の小中学校とつながることで、高校生にとってさらなる教育的効果が得られるのではないかと考えた。

3学期の1,2年の各学年GLP生徒に対して、1年間の学びをまとめて紹介する動画とリーフレットの作成、そして出前授業の3つのグループに分かれて取り組んだ。1年生は中学生向けに、2年生は小学校向けにそれぞれで授業1時間分の内容を考えた。交渉の結果、小学校では6年生3クラスの「総合」の時間を充当していただき、中学校では放課後に1,2年の有志生徒に対して展開することとなった。

2月12日、関西学院初等部にて、2年生11名が6年生3クラスに分かれて出前授業を実施した。各グループとも初めは緊張していたが、初等部出身の生徒もおり、次第に自然な姿勢で授業をリードしていた。主な内容は以下の通りである。

	主な内容	主なメッセージ
6A 対象	様々な国の価値観についてのクイズ	
6B 対象	「文化」について 9 の点を一筆書きでつなぐクイズ ブレインストーミングの重要性	先入観にとらわれないこと 他者と意見交換することの重要性
6C 対象	外国のあいさつ、世界に関するクイズ	

このプログラムの効果として、まず生徒の学習の深化が見られた。生徒自身が、小学6年生という相手を意識し、効果的な導入から始まり、最終的に伝えたいメッセージと、それに適した素材を選択し、効果的な表現を考えることが出来た。全てのクラスで、小学生を巻き込んだ発問・対話型の形式を取り入れ、PowerPointの視覚効果を利用し、最後にメッセージまでつなげていた。もちろん、抽象的な概念の説明がうまく出来なかったり、時間配分がうまくいかなかったりと細かなところで想定と異なる部分はあったが、受け身の学びを、小学生向けに分かりやすくアウトプットする作業を通じ、自身が深く理解することが出来た。なかには、自身が授業で受けた内容を利用したグループもあったが、そのまま利用するのではなく、自分たちで咀嚼・消化できていた。表現や伝えるという実践的なスキルだけでなく、グローバリゼーションやグローバル化する世界のとらえ方について、生徒自身が能動的に理解を深められた意味は大きい。また、この経験により、生徒にとって大きな自信につながった。単に失敗せず準備したことが出来たというだけでなく、伝えたかったことが伝わったという実感を生徒に与えてくれた。特に小学生らしい活発な応答や意外な返答を受けながらのコミュニケーションの成功体験は、単に企画をやり遂げた手応えや達成感だけでなく、生徒自身のこれからの学びの姿勢にも大きく影響してくるであろう。
2017年度の成果発表会における公開授業と、そして今年度の対外行事のひとつであった関西学院大学主催の高校生討論会で、奇しくも1人の生徒が「このままの（受け身的な）授業でいいのですか?」という旨の質問をした。指導する側としては心に刺さる発言であるが、それは順当な成長の表れでもある。1年間かけて受け身的ではあるが、様々なことを学びつつ、しかしそのアウトプットや活用の場が乏しければ、環境は生徒の成長に見合わなくなる。この発言は、生徒の成長を示すものとして肯定的に受け止めたいと思う。

そして、小学6年生やその保護者からは、この企画が概ね好評であったと聞いた。その理由は、単なる新しい知識の獲得だけでなく、小学生が自身の将来を投影できる存在として見られたからだという。こんな人になりたい、こんな風になれる、小学生にそんな具体的なイメージを与えることが出来た。多くの小学生が関西学院の中学、高校へとそのまま進学することが「当たり前」になってしまうことも多い。その中にあって、具体的な人物像や学びの方向性を提示できたことは、一貫教育を目指す本学院にとっても有意義であった。

また、2月15日には、GLPの1年生が、関西学院中学部の有志生徒を対象に、1時間半ほどの出前授業を実施し

た。「大阪万博を100倍楽しむ方法」と題して、2025年の大阪万博のテーマに関わるSDGsを切り口にした内容を展開した。参加した中学生は、学校の事情により中学1年生のみであったが、中学1年生と高校1年生ということで、適度な年齢差になった。まず、会場に入ってきた中学生に、教室のホワイトボードに「今起きている国際問題」を書いてもらうところからスタートした。授業の導入として、SDGsの内容を対話形式で紹介し、続いて3,4人のグループに分かれてSDGsのテーマを自分たち自身でイラスト化するワークを行った。その後、各グループのイラストを共有し、再び全体で2025年の大阪万博がSDGsのゴールの5年前であり、解決は簡単ではないが、中学生に国際問題について学ぶ意欲をもってもらいたいというメッセージで締めた。

このプログラムで目立っていた点として

まず1点目、高校生自身が学んだSDGsというテーマを、自分たちなりに理解・解釈し、それを中学生の目線で伝えるという視点をはっきり意識できていた。特に教員が指導したわけではないが、大阪万博というニュースとSDGsを結びつけた生徒の発想そのものから、単なる知識ではなく、それが活用できたことを示している。

関連して2点目として挙げられるのは、生徒の創造性である。ワークという形式自体、またイラスト化するという課題も、楽しさと思考のバランスが取れていたし、自分たちで創るという姿勢が印象的であった。しかも、最初の導入ではSDGsのロゴは紹介せず、先入観を持たないまま問題の内容を考えさせたことも特徴的であった。たとえば、「海洋」というテーマであれば、中学生が考える海洋の問題は、生物や人だけでなく陸も関わる問題と認識していた。中学生が考える余地を残し、考える可能性やイメージの広がりを意識できていたのも、知識学習にとどまらない学びを高校生自身が考えていたことを意味する。

そして3点目は、主体的な学びの姿勢である。授業が始まる前から知っている国際問題を書かせ、その話題を拾いながら進行し、最初の導入、最後のまとめとも、中学生との対話を中心に進めた。そして、グループワークの時間帯には、各グループに高校生が1名付き、ファシリテータとなった。当初このプログラムを計画していた人数よりも多い1年生が集まり、グループワークをリードするとともに、グループ間で連携しながら全体の進行に関わっていた。その姿はいきいきとしており、高校生自身が問いかけやグループワークの魅力や難しさを知っているからこそできたことである。

最後の4点目としては、やはり中高一貫教育における意味合いである。高校生にとっては、おそらく不安が多かったなかで、趣向を凝らし考え、しっかりと準備し、そして実際に活発なワークが出来たことで、かなりの達成感や自信につながったことが想像できる。知識の習得だけでなく、その活用や新たなコミュニケーションを成功させられた経験は貴重である。そして、全く新しい中学校での生活を1年終えようとする中学生にとっても、比較的身近でイメージしやすい3年後の姿を見られたことで、学校としての一体感だけでなく中学生のモチベーションにもつながったと感じる。高校生は、この学年から必携化されたiPadを駆使してグループワークや授業進行をしており、その姿も中学生にはひときわ印象的に見えただろう。中学生、高校生双方にとって3年間の成長が意識できる時間であった。

この企画は、高校生にとって知識や理解の深化、情報伝達や表現のスキル、学びに向けた自信の獲得、小学生に将来のビジョンを提示できたというメリットをもたらした。SGHを実施していた中で実現した企画だが、グローバル教育に関係なくとも、たとえば小学校教員志望の生徒を対象に実施することも効果的であろう。小中高大の一貫教育校だからこそ実現しやすく、しかも効果も大きい。ぜひ継続実施に向け検討していきたい。

GSⅡ初等部への出前授業の様子

GSⅠ中学部への出前授業の様子

GLPセッション・デイ／GLPセミナー

対象	GLP　2年生		
授業計画		内　容	講　師
	12/7	GLPセッション・デイ	国際ボランティア経験学生4名（濱野氏・關谷氏・宮内氏・伊東氏）
	12/18	GLPセミナー	社会科：三木教諭

内容の詳細・成果

【GLPセッション・デイ】

＜内容・生徒の活動＞

関西学院大学の国際貢献プログラムに参加した４名の学生に来てもらい、彼らの参加した活動・大学生活・高校生の間にやっておくべきことなどを５名ほどのグループに分かれて話し合った。

初めのトピックは、グローバルリーダーとは何かというテーマで話し合った。英語が話すことができる、コミュニケーション力がある、広い分野の知識がある、人の心を動かすことができる、多様性を受け入れることができるなどの様々な意見が挙がった。

次に大学生活について話し合い、大学生が参加した活動の経験談、それを大学生活にどのように生かしているのかをグループで話してもらった。最後に高校生の間にしておくべきことをグループで話し合った。関西学院高等部という大学が直結しているという環境だからこそできることは何なのかということを大学生と高校生が一緒になって考えた。

＜生徒レポート＞

・大学生は楽しそうだというイメージを持っていたが、それはすべて自分自身の行動にかかっているということを痛感した。高校生のうちに大学生活のビジョンを思い描いて、早いうちから行動できるようにしたい。
・今回のお話で印象に残ったのが、『グローバルリーダー』と『グローバル人材』の違いです。私はその違いが主催する側と参加する側に分かれると思う。『グローバルリーダー』になるには、全体をリードしていく能力が必要であると感じた。
・今回グループで話し合った『グローバルリーダー』について、私自身はパキスタンのマララ氏があてはまると思う。彼女が考える教育の必要性は自国だけでなく他国にも当てはまることで、国連の持続可能な開発目標にも掲げられている。彼女の人生から『グローバルリーダー』になるには、経験と行動する勇気、人々に信頼される力が必要になると思った。

【GLPセミナー】

＜内容・生徒の活動＞

NPO法人ACEが作成した『バレンタイン一揆』という映画を視聴した。日本の女子学生３人がアフリカのガーナで子どもたちが働かされ、学校に通うこともできないという『児童労働』の現実に直面する。そこでフェアトレードで作られたチョコレートをバレンタインの日に食べ、世界の現状を少しでも知ってもらうという計画を立てる。この映画はそのアクションを起こす過程での様々な出会いや苦労などが描かれていた。映画の後に、社会科の三木教諭よりフェアトレードやアフリカの児童労働の現状の講義を受けた。

＜生徒レポート＞

・ガーナで行われている児童労働の厳しさに驚いた。少年の詩の中で、『大変な仕事を小さな手で行う』という内容が心に残った。この子どもたちが働かなければならないという現状を国が早急に対策していかなければならないと感じた。
・この映画の内容は以前学んだことのある内容だったが、一つ違ったのは、自分たちと同じ世代の学生たちが行動を起こしているという点だった。今まで学ぶことが多かったが、この高校生活の間に何かアクションを起こせるように考えていきたい。
・ガーナの少年が言った、「誰が僕たちの声を聞いてくれる？誰が僕たちを助けてくれる？」「お金を儲けるのは結局あの人たちだから。」という言葉が印象に残った。児童労働をしている子どもたちは毎日苦しい思いをしているのにそこから抜け出せない現状があることを知った。

海外フィールドワーク

研究内容	仮説	海外現地でのフィールドワークを通して、生徒達の国際協力の認識と取り組みへの意識が変わる。
	目標	1）常に”Why?”の意識を持ち、研修への参加を通して生徒達が海外での国際協力に関する実践の場を体験し知識を深める。 2）カンボジアの歴史や文化を学び、現地で日本が実際に行っている協力の現場、NGOや海外協力隊の活動などを学ぶ。 3）自主的に出発前から帰国後まで目標と計画を立てて実行することにより、計画力、情報収集力、行動力を身につける。
	対象	GLP希望生徒16名
	研修計画	

1. 参加生徒募集及び選考	2018年4月13日～5月8日　参加生徒募集 2018年5月12日　選考（志望理由書＋中間テスト成績） 2018年5月19日　参加生徒決定
2. 事前学習	2018年6月22日（金）15:40-16:40　第1回　自己紹介・行程内容の確認 2018年7月13日（金）15:00予定　第2回　カンボジアについての勉強会（メアス博子氏のお話） 2018年7月20日（金）13:00-14:00　第3回 2018年8月6日（月）13:00-14:00　第4回　最終確認 ― 学校交流会のリハーサル
3. 海外研修	2018年8月10日～16日

内容の詳細・成果

2. 事前学習

事前学習は計4回行った。初回は、このプログラムの成り立ち・趣旨を知ってもらい、発展途上国カンボジアに初めて訪れるにあたっての心構えを生徒たちに確認した。2回目は、メアス博子さんにお越しいただいて、カンボジアの現状、彼女が働かれている孤児院のお話をお聞きした。3回目は、各自しおり作りのために担当するテーマ（歴史・気候・文化・言語など）について5分間のプレゼンテーションをしてもらった。出発直前の4回目では、現地の学校との交流プログラムで行うアクティビティの内容や持ち物・現地での注意点などの最終確認を行った。

3. 海外研修　2018年8月10日～16日　カンボジア・シェムリアップ5泊7日

【カンボジア概観　歴史・遺跡・内戦】

2日目はJASA（日本国政府アンコール遺跡救済チーム）のオフィスで、チア・ノルさんにカンボジアの教育・歴史・社会的な問題点について、ご自身の経験と重ね合わせながらお話していただいた。そのあと、バイヨンインフォメーションセンターでアンコールワットと遺跡修復について学んだ。キリングフィールドに行き、ポルポト時代の大量虐殺について学んだ。午後から、アンコールワットに向かい、建築の歴史や壁画について学んだ。

【国際協力視察　「農村自立支援」】

3日目にアンコール・クラウ村を訪問・散策して村人の暮らしや、子どもたちが通う絵画教室を見学した。日本人の絵画教師から、カンボジアで活動を始めた経緯を聞き、国際支援の在り方について考える刺激となった。昼食は村の学生たちと一緒にカンボジアの料理を作った。午後から子どもたちと交流の時間を持ち、共にうちわの作成・長縄・折り紙などを行い、日本文化を紹介した。言葉は通じなくても様々なことを共に体験できることに気付き農村の子ども達の置かれている生活環境について、自らと比較しながら様々な問題を考える機会となった。

また、最終日にＮＰＯ「SALASUSU」の工場を訪ねた。ここでは、習得した技術に自信をもって朗らかに、かつ仕事にやりがいをもって生き生きと働く女性たちに出会った。工場で作られる製品はクオリティも高く、同情で買ってあげるのではなく、積極的に購買したいと思わせるような商品であったことから、生徒たちは、新しい「援助」の形を学ぶ機会となった。

【同世代との交流・国際協力視察　「教育」「人材育成」】

4日目の午前中にアンコール高校を訪れ、お互いの文化・教育などについてプレゼンテーションを行った。この学校に通っている生徒は、都市で生活している裕福な家庭で育っているため、教育をしっかりと受けてきている生徒がほとんどだった。そのため、想像以上に彼らの語学力・表現力が優れていて、勉強に対する意識の高さも感じることができた。プレゼンテーションの後は、少人数のグループに分かれ、ディスカッションを行った。同じ世代の高校生の生活・異なる国の文化に触れることができ、お互い有意義な機会になったと思う。

午後からはバイヨン中学校を訪問した。中学校の校長先生が、農村部の学校の現状をお話してくれ、アンコール高校とは全く生活水準の異なる生徒が通っていることを知った。また、生活水準と関係して、中学校から高校への進学率の低さも大きな社会問題となっている。話の後に、現地中学生たちがカンボジアの伝統的な踊りや遊びを披露してくれた。本校の生徒たちも日本のポップミュージックを披露し、最後は一緒にカンボジアの生徒と踊った。そのあと、サッカー・長縄・水風船などのアクティビティを現地生徒と一緒に行った。言葉が十分に通じなくてもコミュニケーションを取ることができるということを実感してくれたと思う。

【国際協力視察　「遺跡修復を通した人材育成」】

アンコール遺跡に赴き、ＪＡＳＡによる遺跡修復の現場を訪問し、その活動の大切さと難しさを体験した。広大で深く歴史の刻まれた遺跡内を見学し、その価値と歴史の深さを感じた。上智大学チームの遺跡修復の取り組みについても話を聞くことができ、世界遺産をカンボジア人自身の手で維持・管理していくことの意義と、その事業を背後からサポートすることの意味について考えることができた。

【国際協力視察　教育支援・漁村自立支援】

トンレサップ湖へ赴き、水上生活の様子を見学した。ここで行われている教育支援について実際に見聞きし、現地の方々から特産品のホテイアオイを使用した工芸品の作り方を直接教わりながら各々の作品（コースター）を完成させた。コースター以外にもホテイアオイで作った様々な形の籠などを販売していた。近隣には小学校もあり、子どもたちが活発に授業を受ける姿も目にすることができた。特性ある自然環境に応じた支援の在り方についても考えが深まった。

分析

【グローバルな知識・理解・研修全体の感想、主体的な学びの姿勢】

カンボジアという国については、生徒たちもあまりなじみがなく、事前学習の中で学ぶことには限界があった。百聞は一見に如かずと言うが、今回の研修はまさにその学んだ知識を現地で触れて学ぶという貴重な機会になったと思う。

1970年代に行われたポルポト政権による大量虐殺という負の歴史が、現在の発展の遅れに大きく影響している中で、日本から様々な形で国際協力をしているということ、またその方々の熱い想いを直接聞くことができたというのは、彼らの人生の中で大きな財産になったと思う。その約40年前の悲惨な歴史がもたらした出来事によって、家族や友人を失った人々の話を聞けたことも貴重な経験だった。

世界には日本のように恵まれた国ばかりではないということを再認識した。教育を十分に受けられなかったり、生活費を稼ぐために物乞いする人々がいたり、地雷の中で不安を抱えながら生活する人々もいる。その中で私たちは今の生活のままでよいのか、何ができるのか、ということを考えさせてくれる機会にもなった。

この研修の全体の流れとしては、今回5回目になるので、2年前に行った時よりもプログラムが改善されていた。日ごとにテーマ分けされていて理解しやすく、個人旅行では体験できないようなプログラムが凝縮されていた。今回の研修は、最初は生徒たちの意識にも個人差が大きかったので心配したが、いざプログラムが始まると積極的に質問し、主体的に学ぶという姿勢を強く感じることができた。この貴重な経験をこれからの学校生活で活かし、これからの勉学の中で深めていってもらいたいと思う。

【研修に参加した生徒達の感想・ふりかえり】

・今までは国際協力と聞くと相手に何をしてあげられるかを考えがちでしたが、今回の研修を通して、国際協力とは相手にとっていいことだと決めつけて一方的に与えることではなく、相手から学びそれを活かして共に考えることだとわかりました。また、現地の人たちが意義を感じ、彼ら自身が担っていけるように機会と技術を共に学び、支えることが国際協力なのだとわかりました。実際にカンボジアの人々と接し、カンボジアで活動している方々のお話を聞いて、国際協力に携わりたいという気持ちが一層強くなりました。自分に何ができるのかを考えると規模が大きすぎて具体的に何をしたらいいのか途方に暮れていましたが、経済を回して生活に不自由がある地域のインフラが整備されるようにする、栄養不良をなくす活動をする、という夢

ができました。

・この研修旅行を通して感じたことはその国に実際に自分で足を運んで行かなければ、その国の美しさや持っているパワー、可能性はわかりません。だから、ニュースや新聞、テレビだけの情報に迷わされず、今後何をするにおいても、自ら足を運んで感じ、自分の目で確かめなければいけないということ、そして、人間というのはどれだけ遠くに住んでいようと、話す言葉が違えども、通じ合えるということを学びました。現代はSNSが流行し、相手の顔を見なくても話したり、繋がったりすることができます。だから、カンボジアを訪れ、改めて出会いの大切さに気づくことができました。

・行く前の私のカンボジアに対するイメージは「日本と比べると貧しい国」でしたが、行った後は「自立していて、前に進んでいる国」となりました。環境が全く違うカンボジアの子供達と触れ合うことで貧富の差を目の前にし、紙の上だけの話ではないこと痛感しました。しかし、「自立」という部分は共通しているなと感じました。詳しく言うと自分のやるべきこと、置かれている状況を把握し、もし嫌なら飛び出すことのできる勇気を持っているという所です。それに比べて日本人は周りと合わせることが1つの礼儀と考えられているし、関西学院というエスカレーター校にいる私達は自立しているのかと考えさせられました。私は授業やテストを真面目に努力しているのでこの2つに関してもっと頑張ることはなかなか難しいです。しかし、プラスαで英語を身につけること、趣味を広げること、自分のやりたいことを探すということを心がけて夜寝るときにその日の自分に満足して眠れる生活を送ることを目標にしたいと思います。

今後の課題

今回が5回目となるカンボジア研修でだったが、２年前に訪問した時よりも様々なプログラムが改善されていることに気づいた。一日一日、普段経験できないような濃密なプログラムで実りの多い研修だった。

次年度ももしこの研修を継続できるのであれば、改善点が2点ある。

一点目は、生徒のモチベーションを上げることだ。最初はどうしても研修ではなく、観光気分で参加している生徒がいたことが気になった。チア・ノルさんのお話を聞く中でカンボジアの現状を知り、改善されていきましたが、事前学習の段階で生徒に意味をはき違えないように伝えておく必要があったかと思う。

二点目は、現地校とのアクティビティやプレゼンテーションの準備をしっかりとしておく必要があると感じた。今回のアクティビティに関しては、臨機応変に対応していたが、カンボジアの気候を考えるとスコールも起こりうるので、雨天時のアクティビティの流れもある程度考えておいた方が良いと思う。またプレゼンテーションでは、相手校がテスト中にも関わらず、しっかりと準備をして臨んでいた。また、アンコール高校の発表グループが多かったので、本校とグループ数を統一した方が良いと感じた。

GLP2年生　課外活動

研究内容

・関西学院世界市民明石塾「Challenges for SDGs! ～Goal 1: No Poverty～」

日 程：2018年8月5日、6日、25日、26日（全4回）

会 場：関西学院大学　上ヶ原キャンパス

生徒レポート：

明石塾に参加して自分と同じような国際問題に関心がある高校生とたくさん意見を交わし問題について考えることができた。私の中で一番印象に残ったのはGiFTの方々の講義だ。地球市民になるには、自分を知り、相手を知り、私を重ね、共に創り、社会に参画し、還元することが大切だと教わった。自分一人では地球市民になれないこと、創り上げるところで終わりではなくそれを還元してやっとゴールであると知った。「2030 SDGsカードゲーム」はそれぞれのチームに目標が与えられ、その目標をアクションカードを使って達成させるというゲームだ。アクションカードにはそれぞれ経済、環境、社会にどれくらい影響が出るのかが＋－のついた数字で表示されており、全チームのアクションによってその時の地球の状況が変化するというものだった。

ゲームは前半と後半に分かれており前半終了時の地球は経済が20、環境が2、社会が3という経済だけが大きく発展した今の地球と同じような状態になってしまった。後半では地球の状態を変えようと全チームが協力してアクションカードを使った。すると、後半終了時には経済17、環境が10、社会が13になった。経済の数字が多少減ったものの安定した地球を作ることができた。また、全チームが自分たちに与えられた目標を達成することができた。考察として、前半では自分たちに与えられた目標を達成することだけを考えゲームを行ったので不安定な地球を作ってしまったと思った。逆に後半では自分たちの目標が達成できていたので余ったアクションカードで地球の状況をよくするために助け合えたのだと思った。なので、SDGsを実現するためにはたくさんの国がお互いに協力することと、一国が権力を持ち平等に話し合えないと意味がないので国際的な議会では国の大きさや経済力に関わらず意見が交わせるような関係を作ることが大切だと思った。明石塾に参加して同じ高校生の仲間からたくさんの刺激を受けることができたのでこれからはもっと国際問題に関する勉強会に参加したいと思った。

・第12回全日本高校模擬国連大会

日 程：2018年11月17日・18日
会 場：第73会期国連総会軍縮・安全保障委員会（第一委員会）
議 題：武器移転
参加生徒：GLP2年生　2名
生徒レポート：
＜内容＞
　各ペアが各国の大使となり、様々な国際問題について他国の大使と議論・交渉をしながら解決策を導き出し、共有する競技である。今回の議題は武器移転だった。私たちは2つある議場のうち、議場Aでエチオピアを担当した。
＜感想＞
　模擬国連は、今まで考えたこともなかったトピックについて知れる機会を与えてくれた。特に、今回の議題である武器移転は、模擬国連に出ていなければ考えることはなかった。詳しいことまで情報を集め、それをもとに国ごとのスタンスを示さないといけないため、自分の知識として蓄えられた実感がある。もちろん今回のリサーチだけで武器移転について完璧に理解できたとは思ってはいないが、学ぶことができて良かった。また、様々な立場の国と合意に向けて議論するのが大変だったが、おもしろかった。
　はじめは資料を見つけるのが大変だったが、慣れるとどんどん見つけていくことができ、いろんな知識を身につけることができた。リサーチを進めていくうえで、少年兵や強制労働など衝撃的なことも知った。
　平和な世界にするためには武器がなくなればいいと思っていたが、政治機関が確立していなかったり、情勢が安定していなかったりする国にとっては、戦争はいけないから武器をなくそう!武器移転を透明化しよう!という考えは容易に成り立たないことがわかった。立場の違う国同士が納得できるよう案をすり合わせることの難しさと重要さを、今回、武器が必要であり、武器移転を透明化しないことによって周辺国との関係を保つアフリカの一国の大使になったことで実感することができた。いろんな学校の人たちと議論ができ、とても刺激的だった。しかし、会議の中で今後の課題も見えてきた。説明不足で意図が伝わらなかったり、説明に時間がかかったりという事態が起こってしまった。そのため、時間が限られた会議の中で、自国のスタンスや政策、主張を簡潔かつ論理的な説明ができるように訓練していきたい。

　一からの中、準備もスピーチも大変だったが、本番を迎えて自分たちが生き生きとしていることを感じることができた。私たちの学校には毎年模擬国連に出場している実績はないが、今回充実した日々を送らせていただき、自分も模擬国連の活動を続けるとともに、後輩にも伝えていきたいと強く思うようになった。応援してくださった方々、貴重な経験をありがとうございました。

・One World Festival for Youth　高校生のための国際協力助成プログラムコンペティション大会2018

日 程：2018年12月24日（月・振替休日）10：00～16：00
会 場：大阪YMCA（大阪市西区土佐堀1-5-6）
出展場所：2階 ホール
参加生徒：GLP2年生　4名
生徒レポート：
　高校生の課題解決へ向けて一歩踏み出したいという気持ちを重視し、高校生の「国際協力を推進する活動」に対して活動費を助成する高校生対象のコンペ大会。優勝チームには助成金5万円が出され、全チーム33チームの内、選考で選ばれた5チームのひとつに関西学院高等部も選ばれ、当日のプレゼンテーションに進んだ。高等部からは「MAK」というチーム名で出場した。「Heart Photo Heart」というテーマでカンボジアのバイヨン中学校と関西学院中学部がチェキを使って手紙交換をすることで国際交流を図ることができ、また識字率が低いカンボジアの教育状況を改善しようとこのプロジェクトを提案しましたが、残念ながら賞を取ることはできませんでした。反省点は、カンボジアの子どもたちのニーズがあるのかどうか確認をとれていなかったことです。善意の押し付けになってしまっていたのではないかと思いました。優秀賞を受賞した学校のプレゼンテーションはメンバー全員が発表原稿をすべて頭に入れており、視覚的にも面白く内容も工夫されていました。今回のプロジェクトは中学部の先生方にも協力していただいたので、何らかの形で実現させたいです。

・平成30年度SGH等カンボジア合同研修会

日 程：2019年1月5日～6日
会 場：奈良ユースホステル
幹事校：西大和学園高等学校（奈良）・和歌山信愛中学・高等学校（和歌山）
参加生徒：GLP2年生　3名
趣旨：SGH及びアソシエイト校のうちカンボジアをフィールドとして研修を行っている高校が一堂に会し、各校が研修を通して学んだ情報や知識の共有、内容の深化を図る
生徒レポート：
　今回のこの研修に参加したことで学べたことがたくさんあった。カンボジア研修についてのプレゼンテーションの場では自分たちはカンボジアに行って学んだことを活かした活動やプロジェクトを何かすることが必要だと他校の発表から気づくことができた。行ったことよりもその後の活動に意味があると思ったのでプロジェクトを考えて実行したいと思った。ワークショップでは、①カンボジアの改善点、②カンボジアの良い点のマインドマップを作り、共通点、共有点、矛盾点を見つけ発表した。グループで挙げたカンボジアの改善点と良い点で共通しているものがあった。この矛盾は物事の二面性を示すものであり、バランスの必要性を感じさせられた。また、カンボジアの改善点について議論したことは今までに幾度かあったが、良い点について議論したことはほとんどなかったので、

自分にとってとても学びになった。カンボジアの良い所、残していきたい所を保護する支援プロジェクトを考えるのも面白そうだと思った。ワークショップ③ではより良いカンボジア社会、日本社会、地球社会のためにやりたいことをグループで考えた。私の意見は「一般教育にSDGsを取り入れる」というものだ。これからの活動で高校生が高校生のために行う国連フォーラムのようなものを開催したいと思った。また、小学生や中学生にもSDGsのことを伝える機会を作りたいと思った。

・高校生公開討論会『グローバル化する世界で生きていく君に問う
ーわたしたちは何を学ばなければいけないのかー』

日　時：2019年1月26日（土）11：00～16：00
基調講演：『僕の人生と、世界の新生児死亡について』　講師　葉田 甲太 氏　医師、NPOあおぞら代表
特別講演：『「世界の歴史的諸問題」と「教育」』　司会進行　關谷 武司　関西学院大学国際学部教授
場　所：関西学院大学西宮上ケ原キャンパス中央講堂
共　催：EUインスティチュート関西（神戸大学・関西学院大学・大阪大学）
　　大阪府立北野高等学校、兵庫県立長田高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部
後　援：文部科学省
公開討論会パネリスト：GLP2年生　4名
フロア参加生徒：GLP1年生・GLP2年生
生徒レポート：

・葉田さんの講演は、ノートを取る暇もないほど、話に夢中になった。その中で一番心に残ったのは、「目の前に苦しんでいる人、死んでいく人がいるのに、何もできない自分が悔しいとか悲しいのではなく、もやもやする。」という言葉でした。私もカンボジアに研修で行きましたが、同じような感覚に陥りました。この気持ちを行動に、そして誰か一人でも多くの人に伝えたいと思いました。
・全てのプレゼンに通じていたのは、自国ファーストの考えから起こった問題だということだが、これは日本も過去の歴史から考えると決して他人事ではないと感じた。今回の討論会では、パネリストの人たちのような幅広い知識と自分の考えを相手に伝える勇気が必要だと感じた。
・今回の討論会で、様々な意見を共有することができ、新たな疑問もわいてきました。二酸化酸素を出してはいけないといった当たり前のことがなぜ変えられないのか、それにはもちろんいろんな要素が絡んでくると思います。世界のトップの人々に私たちの想いを伝えるために様々な知識を習得し、若者たちの考えを変えていくことが大切だと思いました。

・SGH甲子園

日 程：2019年3月23日
会 場：関西学院大学上ケ原キャンパス
研究成果プレゼンテーション（グループ・日本語発表）：GGP3年生　グループ代表
研究成果ポスタープレゼンテーション（グループ・日本語）：GGP1年生　グループ代表
ラウンド型テーブルディスカッション
〈テーマ1〉日本が女性の社会進出を進めるにあたっての課題と解決策　GLP2年生

GGP　2年生活動報告「イノベーション・プログラム」

仮説	主にアメリカの大学（スタンフォード大学など）で実施されているイノベーション・プログラムに、日本の高校生が取り組めば、同様の成果を得ることができる。	
研究内容	目標	自身のタイプを自覚しつつ、グループで課題に取り組み、各自のイノベーション力を向上させる。
	対象	2年生全員
	授業計画	

日　付	内　容	講　師
5/8	DVDスタンフォード白熱教室　観賞	後藤稔
6/12	イノベーション・プログラム	後藤稔

内容の詳細・成果

①自身のタイプを知る。
　アメリカのデボノ教授が提唱した「シックスハットプロジェクト」と日本の坪田信貴氏が発案した「9タイプ診断」を組みあわせ、日本人型のタイプ類別を作成した。まず生徒各自にタイプ診断をしてもらい自分のタイプを知ってもらった。なおタイプは、「完璧主義者」「献身家」「芸術家」「統率者」「奉仕者」「調停者」に分かれる。タイプ診断の結果、この学年で最も多いのは「完璧主義者」タイプ、次に多いのは「芸術家」タイプ、最も少ないのは「統率者」タイプ、次に少ないのは「献身家」タイプであることも判明した。
　②同じタイプのグループに分かれ「イノベーション力向上問題」に取り組む。この問題は、海外の大学の入試（入社）問題、スタンフォード大学の講義で実際に出題されている課題、水平思考問題、世界各国に伝わる謎々、行動経済学の実験的問題などから抜粋されており、柔軟な思考力と豊かな発想力を向上させる目的として構成されている。
例題をいくつかあげておく。
　(1) バットとボールは合わせて1ドル10セントです。バットはボールより1ドル高いです。ではボールはいくらでしょうか？（ノーベル経済学者ダニエル・カーネマンからの出題）
　(2) ここに3リットル用の容器と5リットル用の容器があります。この2つを使って4リットルを測ってください。（オックスフォード大学の入試問題）
　(3) あるとき孔子が道を歩いていると馬が首をにゅっと指し出しました。しかし、孔子は弟子たちに「牛が首を差し出したね」といいました。どうして孔子は、そんなことを言ったのでしょうか。（『今昔物語』からの問題）
　(4) ペプシ・コーラに業績を越えられそうのなったコカ・コーラは、ある新商品を売り出して巻き返しに成功しました。その新商品とは何だったでしょうか。（高野研一『超ロジカル思考』より）
　(5) ある学生達は「あなたの自転車のタイヤ圧を無料で測ります。もし、空気を入れる必要がある場合は、1ドルでお入れします」というプロジェクトを起こしました。しかし、彼らは途中から、もっとお金がもうかる方法を思いつきました。さて、彼らは、どうしたでしょうか。（スタンフォード大学のイノベーション問題）
　(6) 空（から）のコップには、水は何滴入るでしょうか？（オランダの有名な謎々）
　(7) ビリヤードの球が八個あります。そのうち一個は「欠陥品」で、他のものより重くなっています。天秤を使い、重さを二回計るだけで、どの球が欠陥品か見分けてください。（ビル・ゲイツの面接問題）
　(8) 3人で旅行に行き、宿泊費一人1万円をホテルに支払いました。その後ホテルの支配人が知り合いとわかり、支配人が5千円返金するようにフロントの従業員に指示しました。従業員は5千円だと3人で割り切れないので3千円返金して、残り2千円を自分でもらってしまいました。ここで問題ですが、3人のお客さんは最初に1万円払い、千円戻ってきたので9千円支払ったことになります（9000×3＝27000）。ホテルの従業員は2千円持っています（27000＋2000＝29000）。差額の千円は、どこに消えたのでしょうか。

	③次は違うタイプのメンバーで1つのグループを作り（同グループの中に「完璧主義者」「芸術果」「調停者」など複数のタイプがいるようにする。グループの分け方は任意）、そのグループで同様の「イノベーション力向上問題」に取り組む。 ＜成果＞ デボノ教授の研究によれば、違うタイプで構成されたグループの方が、視点が多角的になり、各人の発想力や想像力が向上するので、正答率はあがる傾向にあるとされている。一方、日本人の場合は、必ずしも同じ結果が出ないという報告もある。高校生に課題に取り組ませた結果、同じタイプで構成したグループの方が、幾分正答率が高いという結果になった。同タイプと組んで課題に取り組んだ方が違うタイプと組むよりも協調性が発揮され、そのことがよい結果に結びついたと考えられる。
分析	（グローバルな知識・理解） ・アメリカの有名大学の入試（入社）試験やフランスのバカロレア、あるいは外国に流布されている「なぞなぞ」などを解くことによって、日本人とは違う感性や価値観、発想力を実感した。 ・2020年入試改革以降に、日本人にも要求されるようになる課題解決能力を習得することに努め、すでに世界各国の学校や企業で先んじて要求されているであろう能力を想定し、その能力を獲得していくためには何が必要であるかを考察する機会をもった。 （主体的な学びの姿勢） ・日常的に生徒達は自分の適性やタイプを自覚しながら問題に取り組むという経験を、あまりしたことがない。また他者の適性やタイプを認識して接するという機会も少ない。したがって、まず互いのタイプを知り合うという作業自体が生徒達にとって、たいへん興味深いものであった。また、イノベーション問題をクイズ形式で提示したため、生徒達はゲームに挑戦するような感覚で、プログラムに取り組むことができ、積極的に楽しみながら課題に取り組んでいた。
今後の課題	・タイプ診断は適性診断と結びつけることができ、将来の職業適性判断にも役立てることができる。 ・海外の大学や企業で要求されるグローバルな発想や思考というものは、必ずしも日本人に適しているものとは限らず、日本独自の伝統的な感性や価値観というものともタイアップしている必要はあるのではないか。一方、イノベーション力というものは、閉塞した状況に対して課題を解決していく能力ひいては生きていく力とも結びついていくものである。イノベーション力をつけておいた方が、より豊かに社会の中で生きていける可能性は高まるのである。一過的なものではなく、平素の授業などにおいても、イノベーション力を高めるような課題が生徒達に与えられることが望まれる。

■3年生　学年の目標【グローバルな課題の解決について提案し実践する】

GLPの取り組み

GSⅢ

概要

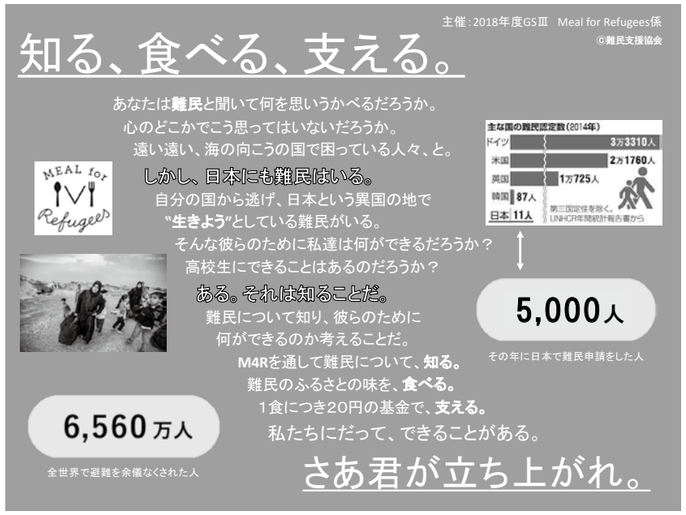
SGH事業の中核となるGLPの第3学年は、第1学年の体験・体感、第2学年の学びを経て、行動・実践へつなげることを理念としてきた。今年度は、これまでの食堂と連携しての難民支援プログラム、M4R（Meal For Refugees）と文化祭での企画実施に加え、新たにインドネシア・バリのハラパン高校との通信型授業を中核に据えた。これまでと異なるのは、生徒を半分に分け、片方のグループが1学期にM4R、2学期にハラパン高校との通信型授業を、もう片方のグループが1学期にハラパン高校との通信型授業、2学期に文化祭での企画実施を行った。これらにより、課題発見・情報収集と整理・アイデアに基づく企画・広報・実施・振り返りといった実践的な経験とスキルの養成を目指した。

M4R

1学期には本校として3回目となる難民支援プログラムであるM4R（Meal For Refugees）を実施した。昨年度と異なるのは、担当する生徒がおよそ半分になったことであるが、関わる生徒が多すぎて意識共有や分担がうまくできなかった昨年の反省からすれば適切な規模となった。今回は、難民支援協会との渉外や他の生徒を束ねる統括、高校生に魅力的に感じてもらえるメニュー担当、最も重要なメッセージを伝えるポスター作成担当、その目的を可視化するためのアンケート担当に分かれ行動した。

今回の進行に際しては、同じく昨年の反省点であった、食堂での出食数を伸ばすことに終始してしまい難民問題の普及が進まなかったり、自身の取り組みの目的がずれてしまったりする点を意識して進めた。難民問題は、難民の発生・受け入れ、そして受け入れにも各国の事情や受け入れによる社会の変容、偏見など様々な問題がある。まずは、個人で何もリサーチせずに難民問題の所在とM4Rの目的を考えさせ、それをグループで共有することで問題や目的を整理するようにした。それを、全体としてのスローガン考案に活用し、しっかりと時間をかけて議論し、内容もともなうスローガンとして、「知る、食べる、支える」に決定した。これには、実際の食事を通じて難民のことを知ってもらい、日本での難民支援に協力してもらうという意図が込められている。時間をかけてしっかりとスローガンを決定できたことは、目的の明確化と、全員での意識の共有という点において有効であった。そして、その難民問題に関するメッセージを具現化するためのポスター作成、食事という入口からメッセージへとつなげる広告などを考える機会を持った。文字、写真、グラフといった様々な情報を、どうすれば一般生徒にうまく伝えられるか、見てもらえるかという意識を持てる機会となった。【資料1-1】

【資料1-1】M4Rポスター



そのほかにも、アンケートの実施に際して目的や一般生徒のことを想定して項目を精査するよう指導し、学校全体への告知においては聴く側の一般生徒を想定しての内容・形式・時間を考慮するよう指導した。共通して意識したことは、自分たちの目的をしっかり踏まえたうえで、いかに効果的に相手に伝えるかという点である。アンケートや学校全体への告知の後には、クラスや全体集会での様子をどう感じたかなど、自分たちの行動を客観的に見る機会を持たせた。こうした企画では、進める側と受ける側とで、動機や熱意、予備知識が全く異なり、何をどう伝えるかが非常に重要になる。企画についての情報を受ける側の立場を意識しつつ、自分たちのメッセージを最大化する試みが重要である。このGLPの生徒はそもそも国際問題への関心が一般生徒よりも強く、予備知識もある。問題の深刻さを自分たち自身は理解していても、難しいテーマであればなおさら、一般生徒には届きにくい。一般の社会でも往々にして見られることであり、そのギャップを感じただけでも意義はあった。

今年で3回目となることもあり、目新しい変化はなかったものの、前年よりも多い387の出食数を挙げることができ、7,740円の寄附金を集めた。アンケートからは、難民問題に対して関心がある（とてもある・あるを合わせて）と答えた生徒が23.3%から32.4%へ、9.1ポイント上昇した。ただ、2ヶ月程度の期間をかけて得られた7,740円が、実際にどのように使われるのか想像してみるなど、その結果や難民の問題を真摯に考える機会を持つには至らなかった。【資料1-2】

このM4Rは、現時点では高校生にとってはあまり身近とはいいにくいものの、問題の所在を明らかにする過程やそれをいかにして伝えるかという工夫をする過程、食堂との連携で実践している実感を得やすい点など、有効なところが多い魅力的な学びである。特に、高校生という時期に、不特定多数の人を相手に特定のメッセージを伝えることの難しさを感じられるのは今後にとっても有意義である。高校生の時期におけるPBLの位置づけにとって、示唆に富む素材である。ただし、これで完結してしまうことなく、難民問題の理解の深化など、ほかの継続的な取り組みのなかで位置づけていく必要を感じる。

【資料1-2】M4Rプレゼンテーションスライド

文化祭企画

2学期には、今年度で3回目となる文化祭を利用した企画実践に取り組んだ。昨年度の反省点である、グループ（企画）を細分化しすぎたことを受け、今年度は実施したいことがある生徒がそれを表明し、賛同する生徒が集まるという方式をとった。その結果、地元の都市農業に関する企画と、東南アジアに関する企画の2つが決定した。

地元の都市農業に関する企画は、もともと食育や農業に強い関心があった生徒の存在がルーツにある。この生徒は、2年次に、グループでアジア友の会主催のアジアユースサミットに参加し、地域の農家が野菜を売れる機会を学校で提供する「KG Marché」の企画をプレゼンで発表し、最優秀賞に輝いた。以降、この生徒は自身で食育や和食の専門家を訪問したりセミナーに参加したり、高校や中学の生徒にアンケート調査をしたり、地域の農家と連携したりと、積極的に行動して知識とビジョンを広げていった。2018年3月には、そうした主体的な学びの成果と企画実施のビジョンをまとめ、関西学院大学主催のSGH甲子園に応募し、予選を通過して口頭発表を行った。アジアユースサミットでの賞金を活用し、2018年6月には、本校生徒・教員・保護者のみ対象ではあるが、校内で放課後に「KG Marché」を実施。連携し続けていた農家の野菜販売、野菜を使ったスープの調理・販売を行った。その延長として、その生徒が再度の「KG Marché」実施を呼びかけ、自身を含め12名が参加した。文化祭に向けては、クラブ活動の都合により当日の参加状況が芳しくないためスープ等の調理は諦めたものの、一般来場者も多いので野菜の販売を拡大、自分たちで農作業にも関わり、その様子を動画やポスターにまとめることで地元の農業のアピールを行った。この企画については、実績・ビジョンとも豊富な1人の生徒が核となり進められた。その1人以外のメンバーはそれを支える側に回ったが、指導する側としては、そのビジョンだけでなく、多人数のよさを活かすべく、様々なアイデアを出し合い、いろいろな手段を試みるよう指導した。最終的にその生徒が文化祭当日に参加できなかったため、はっきりと大きな成果を上げるには至らず、奇しくも求心力の高い生徒を中心にした企画を進める難しさ、意識の共有・チームワークの管理といった面での課題を、生徒も感じることとなった。

こちらが全員で共有させようと意識したことでもあるが、最も大きな課題は、問題の所在を明確化できなかったことにある。6月のマルシェ実施の折も、何のために野菜を売るのかが明確に打ち出せてはいなかった。農業には、自給率、食糧廃棄、後継者不足、都市農業の行方、健康と食生活、食育など非常に多くの分野が関わる。その生徒本人の関心も非常に幅広く、どちらかというとビジョンや目標ばかりが大きくなり、このKGマルシェの焦点がぼやけてしまった。とりあえず野菜を売るという結果を重視したことで、企画実施後も振り返りが十分に活かされず、問題意識の深化にも繋がらなかったのが残念な点である。やはり、企画実施においては問題をいかに明確に、シンプルにするかが重要である。

もうひとつの東南アジアに関する企画は、6名の生徒が参加した。生徒自身が本校在学中の海外での経験を元に、各国の実情を知ってもらうというのが主旨であった。具体的には学校のSGH事業として実施したカンボジアとバリ、そして学外で行われたマレーシアでの植林キャンプの3つである。それぞれカンボジアは、貧富の差や治安、地雷や内戦の記憶などのネガティブなイメージを遺跡や人柄といった要素で打ち消そうとし、バリは観光地のよいイメージとは違うゴミ山や教育格差という問題に焦点を当て、マレーシアでは植林の効果をアピールしようとした。実際に研修で訪れた土地で、思い入れや実感があるはずのところ、結果的には表面的な内容のポスターのみに終わっていた。実際に現地に行き、様々なことを学び、感じたからこその深い理解を導き出すべきだったが、思うような成果には至らなかったのが実際である。

これには、昨年同様、共学化してクラスなどの文化祭企画が盛んになったために、この企画に割かれる労力が低下したことが考えられる。ただ、このケースに関しては、先のKGマルシェとは正反対の構図が見られた。そもそも、研修で訪れた土地に関係することをしたいという思いと、たまたま訪問先が全て東南アジアだったということが共通点のグループで、グループ全体を束ねる考え方や人材が欠如していた。各地域に対する理解に浅い深いがあっただけでなく、この企画を通じて何をしたかったのかという目的意識、特にそれを3つで共通化させるプロセスが欠如していた。確かに関わる生徒の性格も様々で、もともと関係が深かったわけではないが、まさしく異なる価値観のメンバーが集まる集団となり、その意識共有がうまく導き出せなかったことが最大の反省点である。

今年度は、集団づくりという面においては対照的な2つの企画となった。また、強い求心力のある生徒とその他の生徒/核がなくまとまりにくい集団と、様相は異なるものの、問題意識や目的意識の共有においては共通して課題が残った。

インドネシア通信型授業

今年度から実施したインドネシア・バリのハラパン高校との通信型授業は、新しいビジネスモデルを提案する企業の担当者（五十嵐駿太氏・現With The World社・以下、五十嵐氏）から本校に提案された企画で、若いうちから国際問題に関心を持ち、同世代の外国人と連携して行動することが大切だという五十嵐氏自身の理念に基づく教育コンテンツである。本校には大学受験を意識せずに自由な授業が組める「選択授業」という枠組みがあり、GLPで「行動・実践」を目的としたプログラムを必要としていたニーズとも合致し、プログラムを共同開発するというかたちで実施に至った。

提携先は、五十嵐氏が教育プログラムの一環として独自に開拓したインドネシア・バリのハラパン高校で、第二次大戦後に設立されたバリ・キリスト教の流れを汲む私立学校である。今回は特にホテル、レストラン、観光ガイドの3つの職業訓練に特化した高校生を対象としたが、この提携先は非常に有効だと考えている。本校がアジアで交流ができる学校を探していたという事情もあるが、何よりバリ島という地域の特性が魅力的であった。言わずと知れた世界有数の観光地であるが、その観光資源は個性的なバリ・ヒンズー教に根ざす豊かな文化に裏付けられている。観光地としての文化や歴史には、植民地化の歴史のほか、現地社会のアイデンティティに関わる要素も含まれる。また、単なる観光地ではなく、活力に満ちた新興国としての側面もあり、そこには東南アジア特有の活気と課題が存在している。バリという選択は、学ぶ対象としてはこの上ない可能性や魅力を有している。

こうした素材の魅力を土台に、インターネットによる映像通信を利用して外国の高校生と企画の実践やプレゼンテーションを行うPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）が今年度の特色である。このプログラムの目的は、実践的な英語コミュニケーション、単なる異文化交流にとどまらず異なる価値観を持つ人たちと社会問題について深く考える協働、外部や他者を巻き込んで展開する行動・実践に関する多様なスキル（問題の発見・分析・多面的な理解、解決に向けた発想や企画立案、相手を考慮した様々な広報、チームでの意識共有、PDCAサイクル）など多様である。これらの目標は、昨年まで実施してきた文化祭での企画実施と同様であるが、実際に外国人と取り組み、外部を巻き込んでより大規模に展開することで、より大きな効果が得られることが期待された。

インドネシア通信型授業の概要・進行

授業自体は、各国（各校）において3～4名のグループを5つ編成し、両国のグループでペアを組んでひとつのテーマに取り組む。1,2学期でメンバーを入れ替え、約3ヶ月間で10回の授業をひとつのサイクルとする。可能な限り毎回インターネット通信（今回は無料のSkypeを使用）で協議や提案、議論を重ね、2回の「実践」に至る企画や振り返りを経て、最終プレゼンテーションを行う。10回のモデルパターンは以下の通りである。

第1回	チーム発表/自己紹介/テーマ選択	第7回	実践②に向けての計画
第2回	アイデア出し（なぜ問題になっているのか）	第8回	実践②
第3回	自身で取り組める解決策の共有	第9回	実践②の結果共有（チーム）、最終プレゼンテーション準備
第4回	実践①に向けての計画	第10回	最終プレゼンテーション
第5回	実践①	第11回	クロージング（感謝のメッセージ交換、修了証授与）
第6回	実践①の行動結果・次回施策共有（チーム・クラス単位）		

取り組むテーマについては、五十嵐氏と協議し、バリ島と日本に共通する社会問題で、身近なところからでもアプローチできる分野を予め設定して提示した。具体的には、現地で深刻なゴミ問題やマングローブの減少といった環境問題から、移民が住むスラム地域（ゴミ処理場の周囲）での教育の不足、食品廃棄、観光や伝統文化、家族観といった社会問題に至るまで多様で、生徒はグループとしてテーマを選択するところから調整・協議を始めた。

学外との連携や、一般生徒を巻き込むプロセスなどの行動・実践に至る過程では、五十嵐氏自身が企業で経験してきた企画立ち上げに関するノウハウを活用し、実践的な能力育成につなげる。具体的には、具体的な問題を切り取ることから始まり、その原因や影響を調査・想像し、その解決策を考え、提案・協議し、そのために必要な施策を計画し実行するというプロセスを提供した。また、クラス内での状況報告や最終発表のための効果的なプレゼンテーションについての学びや、期間中に2回の実施を組み込んで1回目の実践に対する反省と2回目への活用を促す枠組みも用意した。

実践・行動の提携先については、五十嵐氏がこの授業やテーマ設定にあわせて予め交渉してきた団体・個人をリストアップし、生徒が目的や内容に応じて選定した。具体的には、地元西宮市の伝統工芸である和ろうそくや伝統芸能の人形劇を担う企業・団体のほか、学校周辺の飲食店、インドネシア側でコネクションのある学校や団体である。

指導体制としては、教員や五十嵐氏に加え、ファシリテータを配置した。まず両校に五十嵐氏サイドからの人材が1名ずつ付き、毎回の授業を進行して作業シートやプレゼンテーションに関する指導に携わったほか、関西学院大学の協力を得て、大学生ファシリテータを各グループに配置した。英語力が高く、教育プログラムに関心のある大学生に各グループに張り付いてもらい、毎回の英語によるコミュニケーションや企画立案、プレゼンテーションについてのアドバイスやサポートを行ったほか、各グループ内での成績評価や分析も担当した。

以上のような体制で、最終回の授業では、これまでに取り組んできた活動について、やはりオンラインで通信を行い、日本とインドネシアの双方から英語によるプレゼンテーションを行った。

また、この教育プログラムには相互に訪問することも組み込まれおり、実際に現地に赴き、自身が扱ったテーマについて直接ふれることで実感を持ち、教育の効果を高めることを目的としていた。実際に6月にインドネシアから生徒10名が来日し、8月には日本から生徒5名がインドネシアを訪問した。

インドネシア通信型授業の評価の視点

成績評価は、大学生ファシリテータによるグループ評価と個人評価、グループごとの最終プレゼンテーション、個人による振り返りなどで行った。大学生ファシリテータは、それぞれのグループしか担当していないが、五十嵐氏を中心に頻繁に情報共有の機会を持ち、評価基準をできる限り合わせるようにした。主な具体的な評価の視点は以下の通りである。

グループ評価	問題に対する分析や実践に関するリサーチ力、丁寧さ	4段階
	行動・実践に対する計画性、緻密さ	4段階
	行動・実践の度合い、他者の巻き込み、インドネシア側との協働	4段階
	アクションのオリジナリティ	4段階
個人評価	議論のための準備、リサーチ	4段階
	英語力、コミュニケーション力	4段階
	リーダーシップ	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	オリジナリティや発想	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	グループワークにおけるサポート	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	プレゼンテーション力	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）

また、毎回の授業後に、各回を振り返るアンケートを実施した。質問項目としては、準備の取り組み・授業への積極性・英語でのコミュニケーション・議論における役割・新しい気づきや学び・改善点などで、それらを自己評価する形式で行った。このアンケートは、本校が今年度から第1学年に導入したClassiというWEBベースの教育プラットフォームの活用を意図したものである。本来は同じく第1学年から導入したタブレット端末の必携化と合わせて効果を発揮するもので、学習や振り返りの蓄積・可視化が魅力のひとつである。この学年はタブレット端末を持たない学年なので、簡単にタブレット端末に入力できる環境ではなく、主にパソコンからWEBベースで利用することになるものの、振り返りの蓄積には一定の効果が期待できた。そはして、それらの集大成として、最終振り返りを課題として設定し、評価対象とした。設定した質問項目は以下の通りである。

①グループで取り組んでいるプロジェクトの目的（ゴール）、内容（アクション）とその理由を「なぜそう行動したか」が分かるよう取り組んだ問題に対する理解や分析も含め自分の言葉で書いてください。

②グループの目的のために、自身が取り組んだことを時系列で整理してください。

③自身がこのプロジェクトで「出来たこと・成功したこと・身に付いた力」を①協議/②計画/③実施/④まとめ/⑤発表の類に細分化して分析してください。　（KGグループ内での立ち位置や役割、両国グループ内の協力体制について、目的実現のためにどのようなことを考え、工夫したか、何を達成できたか、結果の事実だけでなく、自身の内面について分かるように記載ください。

④自身がこの活動で「出来なかったこと・今後の課題」を分析してください。　（何が出来なかったのか、その原因は何

だと考えるのか、今振り返ると何が出来たか、このプロジェクトにこだわらず、自身として今後どんなことに取り組んでいきたいかも合わせて記載ください。）

⑤プロジェクト前後での自身の変化について分析してください。　（取り組んだ問題に対する意識の変化、国を越えて協議・行動すること、実践（アクション）することに対しての意識や授業における積極性（リサーチ/タスク整理/リーダーシップ/コミュニケーション）の変化など）

⑥このプログラムにおける満足度

そして、この振り返りに対する評価の視点としては、以下の3つを持った。

①問題意識・理解度：取りあげたテーマについて、いかに主体的に（自身あるいは自身に関係することとして）捉えているか、日本やインドネシアの実情と結びつけられているか

②関与・貢献：グループの目的に対して、どの程度貢献できたか

③成長・深度：グループでの活動を経て、取りあげたテーマについての理解や協働について、いかに理解が深められたか

インドネシア通信型授業の結果

1、2学期あわせて10のグループが以下の通りの企画に取り組んだ。

テーマ	行動・実践の内容
教育	移民街の学校のために、Skypeによる歌や手遊びの紹介、文具や絵本等の寄付集め
教育	移民街の学校のために、Skypeによる歌や手遊びの紹介、募金活動
食品廃棄	学校の食堂での食品廃棄に関する調査と啓発のためのポスター展示
ゴミ問題	インドネシア側に、ゴミ捨てや分別の習慣づけを促すため、投票できるゴミ箱を提案
観光	地元の和ろうそくや人形芝居を担う方々へのインタビューを通じて日本の伝統文化を見直す機会を提供し、Instagramを通じての日本とバリの魅力を発信
食文化	両国の食生活を見直し、健康への影響について情報発信し、健康志向のメニューを提案
伝統文化	和ろうそくをきっかけに日本の伝統文化を知ってもらうことと、SNSを通じてバリの人気ビーチへの一極集中とゴミの問題を広く知ってもらう
家族観	家族間のコミュニケーションの減少に対し、会話のきっかけとしてLINEスタンプを作成する。また、生徒が書いた家族宛てのメッセージを貼り付けたボードを双方で作成する
ゴミ問題	プラスチックゴミの問題に対し、ペットボトルゴミをブロックとして用いるエコブリックの手法を紹介し、日本ではプラスチックから紙への転換を提案
ゴミ問題	プラスチックゴミの問題に対し、障がいのある子ども施設でデザインしたエコバッグの普及を支援する

また、相互の訪問は以下の日程、内容で行われた。

インドネシアから日本へ・6月11日（月）～16日（土）生徒10名

11日（月）	日本到着
12日（火）	西宮市クリーンセンター見学・神戸観光
13日（水）	京都観光
14日（木）	西宮神社の御興屋祭に参加
15日（金）	学校の授業に参加・交流授業・クラブ体験・お別れ会
16日（土）	日本出発

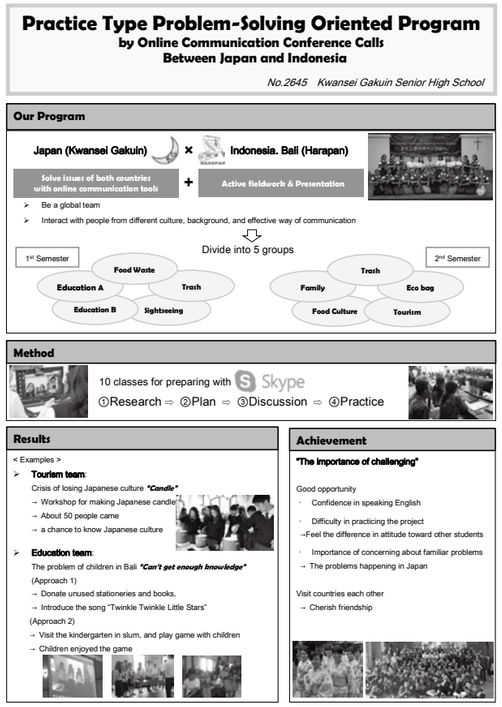
日本からインドネシアへ・8月25日（土）～31日（金）生徒5名

25日（土）	インドネシア到着
26日（日）	ウブド観光
27日（月）	バリ伝統芸能見学・学校の授業に参加・バリダンス体験
28日（火）	ゴミ山地区の移民街にある幼稚園を訪問・学校の授業に参加

29日（水）	バリ博物館見学・マングローブ保護活動見学・クタ観光
30日（木）	学校で歓迎式典、授業に参加・お別れ会
31日（金）	インドネシア出発

また、この取り組みについては、12月に東京で行われた全国SGH高校生フォーラムにおいて、本校のポスター発表として発表した。【資料2-1】

【資料2-1】全国高校生フォーラム発表ポスター



インドネシア通信型授業の分析・効果

別添の【資料2-2】は、このプログラムを受講した3年生へのアンケート結果である。問1では、こちらが想定したGLPの目指す25のスキルのなかから重要だと感じたもの5つを挙げてもらい、問2では25のスキルについて成長の度合いを尋ねた。結果として、問1では上位から、多様な価値観の理解・プレゼンテーション力・英語での会話力・他者や社会と関わる・多方面の情報を整理する力・言語以外でのコミュニケーションとなった。

このアンケートはこのプログラムだけを対象にしたものではないものの、より実践的な英語コミュニケーション、身近な社会問題への関心、実践的な企画立案と実行といった当初目的としていた分野で概ね効果があったと判断できる。英語コミュニケーションについては、当初は英語やコミュニケーションに不安のある生徒も多かったが、継続的にコミュニケーションをしていくなかで人間関係も構築され、何らかのきっかけで積極的なコミュニケーションができるようになった生徒が多かった。同じ世代の生徒どうしである点、日本の文化（サブカルチャーも含む）や世界共通のポップカルチャーが人気を集めている点などが人間関係の構築にとってよいきっかけになったほか、議論の進行において、リサーチや提案、聞き役などグループに多様な役割が必要になり生徒それぞれの適性や個性が発揮できたという背景もある。また、両校の生徒はともに英語を第二外国語とするが、現地のエリート校にあたるハラパン高校の方が、本校生徒よりも英語力が高いということもあり、当初はただ相手の発言を聞いていただけの局面が多かった。ただ、聞く一方でも相

槌を打つなどの細かな工夫でコミュニケーションが格段にスムーズになるのを体感した生徒も多かった。映像も交えた通信ならではの実践的コミュニケーションの効用の典型例であり、これには大学生ファシリテータの存在が大きい。海外経験や英語に関わる経験が多い大学生を優先的に選んだことで、より具体的なアドバイスが得られた。高校生にとって、同世代の外国人とコミュニケーションができる機会は貴重であり、その経験が生徒の満足度を高めている。価値観の違いを越えて協働することもこのプログラムの魅力であり、たとえばゴミに対する意識の違い、行動力やアイデアといった面で、相互に刺激・影響し合う場面が多々あった。

身近な社会問題への関心については、私立学校の特性上、地域に根ざした活動があまりなかった本校において、地域の伝統にふれられる機会が持てたり、家族間のコミュニケーションの減少を双方が客観的に考えたりと、自分自身に関わる事柄として捉えられる効果があった。特に、家族をテーマにしたグループは、それぞれの学校の生徒に、普段は伝えにくい家族へのメッセージを書いてもらい、それをメッセージツリーとして掲示するという企画を立てた。そのアイデアは高校生ならではのものであったし、インドネシア側は、会話のきっかけにとLINEのスタンプを制作し、若者らしい柔軟性と着眼点が印象的だった。

より実践的な企画立案・実行に関しては、寄附や募金、メッセージツリー、イベント実施など実際に形のある結果に結びつくことで、生徒にとってやり甲斐があったようだ。典型的なPBL型学習の効果といえ、それを通じて、事前の関係者との調整やターゲットを想定しての効果的な広報、綿密な計画や効果的なプレゼンテーションの作成と実践といった細かな実務的能力が培えた。【資料2-3】は、生徒の最終振り返りで、生徒自身が身についたスキルについて言及している部分をまとめたものである。その深さについては個人差があるが、こちらが想定した以上に、様々なスキルが身についたと感じている。

たとえば、2学期に伝統文化をテーマに取り組んだグループは、「意外と地元のことを知らない」ことからスタートし、伝統産業の和ろうそくを手がける会社のことを知り、その会社が地域のイベントで蝋を用いたランタンを作るワークショップを行ったニュースを見て、学校でそのワークショップを行うことを企画した。当初は、一般の方にも公開して行うことを企画したが、学校の管理上の理由から高校生・一部の大学生に限定されたものの、自ら休日のイベントに参加して実際のイベントをリサーチし、実際に会社を訪れ計画を練り上げた。そのほか、当日までの告知や予算立て、当日の受付から案内、方法のレクチャー、作業などを4人の生徒で回しきった。学校で行う以上、交渉の途上では管理責任の面で制約も多く、生徒の思うようにいかないところもあったが、様々な制約を乗り越えて妥協案を探るのも、交渉を学ぶ一環となった。年間通じた10のグループのうち最も大規模になったこのグループは、その行動で得た成果も大きかった。
一方のインドネシア側にも、ゴミ山地区の移民街の学校という身近な社会課題を知って生徒が自ら積極的に行動するようになった、学校でのゴミの分別など常識となっていたことに違う意識を持って行動し始めた、など生徒の自主性が育てられたという効果が報告されている。【資料2-4】

以上のような実務的能力に共通して言えるのは、やはり大学生ファシリテータの存在である。各グループで継続的に観察・評価してもらうことで個人の特性を把握でき、的確なアドバイスを適切なタイミングで与えてもらうことができた。高校生にとっては教員ではなく、生徒自身に近い年齢あるいは環境が違う人からアドバイスをもらえることが刺激になった。プログラムの内容だけでなく、授業時間外には大学進学や大学の授業のことなども話題になっていた。大学生の側も、これまでにこうした高校生との関わりや授業・企画に指導する側として参加したことのない学生がほとんどであったが、評価の一端を担う責任感もあり、高校生の活動に刺激されて自身の学生生活に対する意識が変わるなどの変化もあった。

こうした効果はPBL型学習の魅力であるが、成功に至った理由で最も大きいのは、継続的なコミュニケーションの存在だと考える。授業・課題としてだけでなく、国を越えて一人の高校生として接する時間を多く持つことで、授業・課題以上の関係性を持つことができたようだ。若者らしく、画面越しでSNSのアカウントを交換したり、授業時間以外でもSNSで繋がったりと、簡単に「ボーダー」を越えていく若者の潜在力や柔軟性を感じる局面も多々あった。外国の人と継続的にコミュニケーションを持ち、同じ目的のために協議・行動するという非日常的（少なくとも通常の学校カリキュラムにはない）なプログラムが、生徒に満足感や達成感を与えた。6月、8月の相互の訪問では、ホームステイや生徒どうしで過ごす自由な時間もあり、6月の来日時の最終日にはインドネシア側の生徒が別れを惜しんで号泣する姿が多く見られた。8月のバリ訪問時には、全日程をホームステイとしたため、生徒どうしで過ごす時間が長く、やはり最終日には双方の生徒が号泣する姿が見られ、生徒は授業のパートナー以上の絆を得たのだと感じた。

このプログラムは、Skypeというごく一般的なICTツールを用いており特別なものとはいえないが、その枠組みの緻密さが成功の理由と言える。日本に関心のある海外の高校生の選定から始まり、初対面からの交流・問題意識の共有やリサーチ・企画の立案と実行・プレゼンテーション・相互の訪問に至るまでの毎回の時間の使い方とそれを可視化して下支えするワークシート等の準備、生徒を評価する視点や基準のほか、進捗についてのファシリテータのミーティングなど、人材や授業体制などのソフト面がしっかりと整っていたことが、内容の濃い、効果的な学習につながったと結論づけられる。

インドネシア通信型授業の課題

今年度初めて導入したパイロットケースとしては概ね良好な結果となったが、継続していく上での課題も多い。

やはり、生徒にとってもストレスとなったのが通信環境の技術的な問題である。今回は、無料のインターネットサービスであるSkypeを使用したが、Skype自体の品質に不足はない印象だったものの、1つのパソコンで最大5名が通信をするにあたり、音声の聞こえやすさや伝わりやすさといった細かい点から、特にインドネシア側のインターネット環境の不安定さといった問題があった。ただ、本質的・決定的な問題ではなく、プログラムの進行を大きく妨げるものではなかった。

むしろ大きな課題はPBLとしての進め方で、本来は自由な発想に基づく企画立案を、今回は3ヶ月で約10回という短期間でコントロールするという制約があった。そのため、取り扱うテーマについてはこちらから提示したものを生徒が選ぶという形式をとり、実際に行動・実践する提携先（たとえば学校の食堂、周辺のレストラン、地元の伝統産業、インドネシア側のエコバッグ制作会社など）も、予め交渉して対応可能という返答をもらったうえで準備していた。こうした状況は、本当の意味での課題発見・自発的な行動にはなっていないが、高校生に行動・実践の手応えや難しさを学んでもらう上ではやむをえなかったという面もある。PBL型学習の目的・効果と、時間や効率とのバランスが重要であり、そもそも高校生という時期に、PBL型学習を通じて何を求めるのかという大きな目標設定が必要となる。

また、行動・実践については、従来の「調べる・発表する」という自身の内部で完結するものではなく、他者・外部を巻き込むことを意識させた。しかし、実際の形態としては、先述の蝋を用いたランタン制作以外に、ポスターによる啓発に留まったもの・SNSを用いた情報発信・募金や寄付・それぞれの高校での活動報告など様々なレベルがあった。なかでも、InstagramなどのSNSによる情報発信が目立ったのは、いかにも現代の若者らしい選択であった。個人的な情報発信・交換に限らず、商業的な広告や社会的な現象に至るまで、SNSは様々な面で高校生の生活に定着している。また、日本だけでなくインドネシア側でもポピュラーな存在で、双方に利用可能で魅力的なツールとなっていたのもいかにも現代的である。指導する教員側とで感覚が異なるのかもしれないが、かんたんに情報発信ができてしまうだけに、その重みや真意が伝わりにくいと感じることもある。

そして、行動・実践と関連して課題と感じたのが、問題自体に対する理解の深化である。このプログラムは、各グループが、日本とインドネシアの双方で課題を発見し、その解決に向けて取り組む。その過程で、その原因や背景を探り、解決策を提案するという段階を踏んでいくものの、具体的に企画を実施する段階になると、その企画の成功だけに関心が行きがちになる傾向がある。これはGSⅢを始めた2016年度から課題と認識してきた点であり、どうしても目先の成果や分かりやすさ・楽しさに偏りがちになってしまう。計画した解決策が、対症療法的になってしまい、その施策が本当に効果があったのか、どんな影響・変化をもたらしたのかなどの冷静な反省にはつながりにくい部分がある。ひとつの解決策を実施したことによって、問題やその原因・背景についての理解をさらに深めるプロセスが必要となる。

ほかに、このプログラムの根底に横たわるのが、双方向の協力という問題である。今回の各企画は、必ずしも、ひとつの問題に共同して取り組んでいるとはいえない状態であった。たとえば、インドネシアの貧困層における教育の問題に対して寄附を集めるであったり、双方の異なる観光事情を改善しようとそれぞれに取り組んだりと、一方的な支援あるいは別々の動きというように、ひとつのテーマ・問題に取り組むという姿勢は万全ではなかった。日本とインドネシア、となればどうしても先進国と新興国という構図が先に来てしまい、新興国に対して支援する、という方向性が固定化しやすい。特に本校のSGHは「国際協力」を主なテーマとしてきたため、その傾向はさらに強い。しかし、インドネシアでも特にバリ島は日本以上の観光地であり、観光やそれに関わる文化面において様々な示唆に富む材料があり、観光が重要になりつつある日本も学ぶべきことは多い。教育やゴミといった問題においても、必ずしも日本が優れているわけではない。インドネシアの事例を通じて、日本国内にも問題があることを知る機会にも活用できるはずである。例えば、親子の関係が日本よりも濃いインドネシアから、家族観について意識し直す機会が得られるように、日本側もインドネシア

から学べることはある。このように自分たちの社会を見つめ直し、対等な立場でものごとを捉えていく姿勢こそが本来のグローバルな感覚であり、どうしても途上国・新興国への支援という方向性に陥りがちな姿勢を修正していく努力が必要といえる。

以上のような分析は、あくまで指導する教員側、特に社会科の教員としての意識に偏るものなのかもしれないが、日本とインドネシア・バリ島という環境を考えれば、十分に潜在的な魅力がある。単なる行事実施による達成感だけでなく、問題を本質的な面で理解する可能性があるプログラムであり、その発展の余地は大きい。

【資料2-2】

１．能力・スキルのうち、3年間のGLPを通じて最も重要だと思ったものを5つ選んでください

GLP3年生	男	女	集計
①多様な価値観の理解	5	5	24
②知識量	1	1	3
③情報収集力	1	1	2
④多方面の情報を整理する力	3	3	9
⑤情報を分析する力	2	2	6
⑥レポートの構成力	0	0	1
⑦文章表現力	0	0	2
⑧写真や動画の編集力	0	0	0
⑨パソコン使用のスキル	0	0	1
⑩プレゼンテーションの作成力	0	0	2
⑪プレゼンテーション力	1	1	14
⑫計画の立案	2	2	8
⑬交渉する力	1	1	5
⑭他者や社会と関わる	0	0	10
⑮宣伝する	0	0	0
⑯メンバーと議論する力	3	3	9
⑰結果を振り返る・分析する	0	0	4
⑱英語の語彙力	1	1	2
⑲英語の構成力	0	0	0
⑳英語での会話力	1	1	12
㉑言語以外でのコミュニケーション	2	2	8
㉒実際に海外で活動する	0	0	3
㉓国際情勢への関心	2	2	7
㉔国内の時事問題への関心	0	0	1
㉕地域社会への関心	0	0	2

２．以下の能力やスキルの度合いを答えてください
（１ほとんど伸ばせられまかった－２－３－４大きく伸びた）

GLP3年生	1	2	3	4
①多様な価値観の理解	0	1	7	19
②知識量	0	1	14	12
③情報収集力	0	5	17	4
④多方面の情報を整理する力	0	5	14	8
⑤情報を分析する力	1	6	13	7
⑥レポートの構成力	0	8	14	5
⑦文章表現力	4	9	8	6
⑧写真や動画の編集力	7	11	4	5
⑨パソコン使用のスキル	3	8	8	8
⑩プレゼンテーションの作成力	1	0	9	17
⑪プレゼンテーション力	0	1	14	12
⑫計画の立案	0	3	10	14
⑬交渉する力	1	6	11	9
⑭他者や社会と関わる	1	2	10	14
⑮宣伝する	1	12	7	7
⑯メンバーと議論する力	0	3	9	15
⑰結果を振り返る・分析する	0	2	18	7
⑱英語の語彙力	2	13	8	4
⑲英語の構成力	3	13	8	3
⑳英語での会話力	0	6	12	9
㉑言語以外でのコミュニケーション	4	2	15	6
㉒実際に海外で活動する	9	3	9	6
㉓国際情勢への関心	1	0	10	16
㉔国内の時事問題への関心	2	6	7	12
㉕地域社会への関心	1	6	9	11

４．満足度　10段階	7.6

	1	2	3	4
７．①3年間のGLPを通じて意識や行動の変化はあったか （ほとんど変化はなかった１－２－３－４大きく変わった）	0	2	16	9
７②学校でGLP以外に自発的に何か取り組んだか (何もしていない１－２－３－４積極的に取り組んだ)	8	5	6	7
８．大学・学部の選択や将来のキャリア志望など自分の進路に影響したか (影響しなかった１－２－３－４大きく影響した)	2	5	9	11

【資料2-3】GSⅢ生徒振り返りシート抜粋

Q3:自身がこのプロジェクトで「出来たこと・成功したこと・身に付いた力」を
①協議/②計画/③実施/④まとめ/⑤ 発表の類に細分化して分析してください。

①協議

- 英語でのコミュニケーション能力が身につきました。初めは他の人の話を聞いているばかりでしたが、終盤では自分の意見を臆せずに伝えることが出来るようになり、自分自身が納得出来る充実したディスカッションにすることが出来ました。
- 自分が今まで研究してきた「食」または「食育」の分野で学んできた知識を活かすことが出来ました。食育に関して言えば、ただ食べ物のことを学ぶだけでなく、食の視点から社会的な沢山の問題を解決する能力を育むことにつながるということを学びました。今回は日本側で食育実施は出来ませんでしたが、結果ハラパン高校で幼稚園児に対し、考えてきた食育の授業を行うことが出来ました。私たち日本側は、対象を高等部の生徒という身近な存在に絞ることで沢山の実践が出来たと思っています。
- 初めて顔を合わせる異国の生徒たち、また関学でのチームメイトと共に協力し、話し合って 1つの目的に向かって精進した経験により、自分一人でなく全員の意見に耳を傾けながら行動する力が身に付きました。皆それぞれ自分が何をしたいというような願望を持っていましたが、それを押し付けているだけではプロジェクトは前に進まないし、良いものは作れないということが身にしみて感じることが出来ました。言語の壁もありましたが、グループとして 1つの目的に向かうことで、徐々に団結感が増し、最終的には他の人がどう思っているか意見を促すことが出来るようになりました。
- Skype を通じたディスカッションでは、積極的に英語を使って話すことを心がけ実践しました。よって英語を使ったコミュニケーション力を身につけることが出来ました。両国とも英語を母国語としないので、より伝わりやすい英語を用いて話すことを心がけることが出来ました。
- メンバーと協力し、メモなどをまとめてその日に LINE などで共有しました。すぐに分かりやすくまとめて、共有するという力が身につきました。
- 話されている内容について、メリットとデメリットを追加的に提示することを心がけた。司会者なしで自由に話し合いをすると、えてして物事の限られた面にのみ議論が集中し限られた部分のみを見て全体の結論を出しやすいからだ。譲り合いや様子伺いは時間を無駄にするので、チーム全員が適材適所の働きができるよう、誘導していくことを目標にした。
- 授業での協議では、西宮市の観光産業について調べた内容をもとに、西宮市の観光産業を活性化させるためにこんなことができるのではないか、と思いついた意見をたくさん言うようにすることで、自分が考えていることを相手にはっきり伝える力が身につきました。
- 今まで話し合うことはあっても、話し合うことを通して新しい企画をつくるのは初めてでした。その経験によって、自分でアイデアを出す積極性が身についたと思います。
- 私達は観光班であったため西宮市の観光業について考えた。西宮市はたくさんの観光スポットや伝統工業があるのに観光客が少ない。和ろうそくは日本の伝統工芸であるが、私たち西宮市民でさえそのことを知らない。私たちも和ろうそくについて、西宮の伝統工芸であること、ろうそくには和洋があることすら知らなかったが、松本さんへのインタビューで和ろうそくの素晴らしさや松本さんの思いを知り、西宮を、そして和ろうそく業界を盛り上げていくために和ろうそくやそれを作っている松本商店を広めたいと思った。そのためにはまずは西宮市民が和ろうそくに触れて、知ってもらうことが必要だと思ったため簡単に和ろうそくと触れ合える機会を作ろうと思って 11 月 14 日に学校の生徒や保護者、先生、一部の大学生に向けてランタンづくり体験の企画を行った。
- 私達は和ろうそくが西宮の名産品であることを全く知らなかったため、全員が強い衝撃を受け、これをまず私たち西宮市民に広めていかなければならないという結論にすぐ至り、和ろうそくを広める方法をたくさん考えました。意見は多く出ましたが、インスタグラムでの宣伝などはほかの班でもおこなうことができるため、私たちでなにかイベントを行おうという結果になりました。松本さんにインタビューする機会もいただけて、よりイベントへのやる気が出たと共に、イベントの目的が私たちの中で明確になりました。

・最初は聞く方が多かったのですが、どんどん自分から発言できるようになりました。自分からたくさん提案したり、逆に誰かの提案に意見したり、話し合いに積極的に参加できました。その時にはきちんと相手の意見を理解しようとする姿勢を大事にしました。
・自分たちのことを出来るだけ相手に伝え共有すること。自分たちがどの点まで到達したかや、自分が相手の言っていることをどれだけ理解しているかをしっかり相手に伝え、お互いの理解に齟齬がないようにすること。今までの自分は特に、この点の意思疎通が不十分で失敗することが多かったので、しっかり相手に伝えるようにした。
・話し合いの際、周りをみて人の気持ちを汲み取り、話し合いが円滑に進むようにする手伝いが出来たのではないかと思います。私は人の気持ちを考えたり、感じ取ったりするのは得意で、今回は班のメンバーが 4 人と少なかったため、この力を役立てられたと思います。元々、話したことのない 4 人が集まったグループだったため、話し合いの際などもうまくお互いの言いたいことを伝えられないことがあり、不満を持っていそうな子がいたり、話し合いが上手く行ってない時は自分のできる範囲で空気を変える工夫をしました。また、ハラパン高校とのSkypeの際に、英語を話すことは苦手ですが、大きく相槌を打つことを意識していました。話し合いの際、私たちは、言葉では説明しにくいのですが、第一言語が英語でないために、英語で話すのは必要最低限のことだけで、その他の思いやりや繋ぎの部分、例えばありがとうや少し待っててね、などを言葉にしていないように感じました。なので、そういった相槌を打つことを意識しました。その上で、言語に関わらず、コミュニケーションを取る上で、そういった思いやりなどの細かい気づかいは大切だということを学び、これからもそういった部分は大切にしたいと思いました。

②計画

・どのアクションをいつ起こすかという日程を綿密に定めることで、準備物も明確に分かり、余裕を持って行動出来る計画性が身に付きました。
・私自身はアイデアの提案が得意でした。今までの経験とつなげて考えることで沢山のアイデアが浮かび、実際にどう行動に移していくかも具体化して示すことが出来たので、チームの活動の方向を誘導するという点では、みんなをサポート出来たと思います。これに対して、ハラパン高校の生徒は私たちのアイデアに真剣に耳を傾けて、すぐに行動に移す姿を見て、その行動力から私たちが彼らから学ぶことも沢山ありました。結局インドネシア側は、私たちが出来なかったことをほとんどやり遂げてくれていたので全体として両国で協力して解決法を導き出すことが出来たと思っています。
・0 の状態から行動する、という経験を通して、計画の大切さを痛感しました。始めはどうしてもその場の思いつきで、好き勝手に各々が進めてしまっていたので、後になって時間配分にズレが生じるということが起きてしまいました。ハラパン高校の生徒は、その点において非常に長けており、定期的に今何をすべきか?次までにどこまで進むべきか?という疑問をグループに発信してくれたので、立ち止まって計画を練りながらプロジェクトを進めることが出来ました。先を見越して行動する能力はハラパン高校の生徒から、多く学びました。
・問題定義から目標設定、実行、分析、反省などの長期的なプロジェクトを行うのは初めてで、計画を立てることの重要性を学びました。また、今までは「分析をして改善する。」という段階を行う経験があまりなかったため分析・改善における重要性も学びました。初めから最後まで、大きく躓くことなく両国がこまめに情報共有や計画の確認を行ったことで、スムーズに計画的にプロジェクトを進められたことは、大きな自信にも繋がりました。
・企画において目標人数を設定し、そこから予想される必要なものや、合計金額などを割り出していくという企画の基本的な方法を学びました。そして、先生方と相談し、企画を成功させることができました。企画には様々な妥協点などがあり、難しい点も多くありましたが、相互の妥協点を探し、イベントの企画に取り組んでいく力が身につきました。
・バリ側が求めることと日本側がしたいことにずれがあり、時折気まずくなりつつも対話を続け、授業後には日本側だけでも話し合い、現実的な目標と計画を立てることができた。特に、お金を集めるためにエコバッグ販売にこだわらず、募金(と、お礼に子供が描いた絵をシールにしたものを渡す)をしようという話になったのは大きな成果だと思う。 エコバッグがテーマではあるが、それにこだわりすぎると成果を上げるのは難しいからだ。
・時間がない中でイベントの準備をすることで、素早く行動する力が身につきました。保護者の方々が来る時間までに蝋が溶けないかもしれないというハプニングもありましたが、すぐに校舎内を回ってガスコンロとガスボンベを調達することができたことも、この例として挙げられます。
・自分たちで始めるときから終わるときまで決めてやらなければならなかったので、計画も全てする必要がありました。皆で分担を決めることで良いペースで企画を進めることができました。
・私達は 1 からイベントをするのは初めてでたくさんの時間を費やしましたが至らない点が多くありました。費用、場所、許可、材料、集客、当日の流れ、準備、他にもたくさんすることがあり放課後や休み時間、家に帰ってからも企画書を書いたり LINE で話し合ったり材料を探したり買い出しに行ったりとにかくたくさんの計画と準備期間が必要でした。想像していた何倍もの時間がかかり、問題点も山積みでした。
・ゴールを見据えて計画を立てられるようになりました。文化祭に向けてなにをしておくべきかなど準備の面でスムーズに進められたと感じています。
・原点の目標を見失わずに、手段と目的を混同しないようにすること。また、急な事情の変更にも柔軟に対処すること。バリのチームの方では、制作作業が思うようにいかず当初の計画から遅れたりしたが、その度に計画を練り直し、おおもとの目的に合わせて、変えられる部分は変え、残すべき部分は残すという点に苦心した。
・計画を練る際は、部活動などで忙しい人が多いグループであったので、後回しにせず、先に決めてしまうことを意識しました。何日までに何をするかということを早めに計画し、準備することできちんとこなすことができたと思います。しかし、ハラパン高校はあまり計画通りに進んでいなさそうなので心配です。計画をきちんとたてておくということは、仕事や日常において必要なことであり、その通りにできる限り実行していくことが人からの信頼を得ることに繋がることを学びました。

③実施

・綿密に計画を立てたこと、ポスター作りや募金活動のための準備を行ったこと、生徒に関心を持ってもらえるよう数回に渡る告知など、やれることは全て行ってきました。その結果、どのように呼びかければ相手の心に届くのか、また熱意が伝わるのかを学ぶことが出来ました。アクション全体を通して、自分で行動を起こす楽しさを知ることができ、行動に移すことで、受け身の座学よりもその問題に興味を持つことが出来ると分かりました。これからは、自分からアクションを起こすことに前向きになれると思っています。
・全校集会での発表、食堂でのポスター掲示、そしてハラパンの生徒が日本に来た時の Farewell party での呼びかけなど、実際に「伝える」という私たちのトピックでは一番必要且つ大切なことに取り組む機会が沢山あり、良い経験が出来ました。
・チームの行動を通して、現実での実施の厳しさを学びました。私たちはアクションとしてインスタグラムという手段を取りましたが、手軽さ故の確立した支持が得られないという悪い点も実施後に分かりました。実施する大切さ、実行する前の調査の重要性を学びました。
・プロジェクト実施の上で、1番大きく得た力は、「より効果的に多くの人を巻き込むにはどうすればいいか」ということを考える力です。中々自分たちの思い通りの関心を得られず、躓くこともありましたが、様々な観点から自分たちのプロジェクトを分析して、常に改善してプロジェクトを、進められたことが良かったと思います。また、今までのように校内に留まったプロジェクトではなく、全世界に発信するプロジェクトのため、関学の学校名を用いてアカウント運営をする上での著作権や情報の信ぴょう性など多くのことに気を配る必要がありました。このように、責任感が芽生え、様々なところに気を配ることが出来るようになりました。
・私たちが体験したことを正しく説明し、参加して下さる方々に楽しんでたいけんしていただくことができました。また、私たちの目的であった西宮の人々に和ろうそくについて知ってもらうことに成功しました。イベントを少人数で主催することは難しく、たくさんの方々の支えによって成功させることができました。人との関係を大切にして、協力し合うことが大切だということを知りました。また、イベントを実施する側と参加する側の視点で物事を考えることができるようになったので、物事を様々な視点で見て考えることができるようになりました。
・Bグループでの授業時間は多くが Skype セッションに費やされていたが、だからといって必ずしもバリとの会話に積極的に参加することだけがチームへの貢献ではなかった。目標を定めすぎるのではなく、状況に応じてチームに足りていない役割を補うことを心掛けた。例えば、他のメンバーがそれぞれ自分の担当の準備をする間に提

出用のプリントを書いたり、会計やタイピングは早い方だと思うので計画書を書くことやワードデータを作ることを引き受けた。チームメンバーそれぞれが、適材適所の動きができたと思う。

- イベント当日は準備できる時間が限られていて焦ってしまいがちなので、落ち着いてツーリズム班のみんなとコミュニケーションを取ることを心がけました。予想以上にたくさんの人が来てくれたので、準備よりもイベント開催中の方が忙しかったですが、何かあったらすぐに報告し合うことでイベントの進行をスムーズにすることが出来ました。また、たくさんの人が同じ時間に集中して来てくれたので、運営側の人手が足りていない時間がありましたが、注意深く周りを見ることで、常にアンテナを張って観察する力が養われました。加えて、保護者の方々や先生方、いつもは話さない同級生を相手に接客をすることで、コミュニケーション能力が向上しました。
- 企画を実施して、多くの人に参加してもらうということは思った以上に緊張することで、また大変なことでした。これによって、自分の視点だけでなく相手からの視点を意識する良い機会が得られました。
- たくさんの人に来ていただき、目標設定人数も途中で下げたものの、最終的には最初の目標に近い人数を集めることが出来ました。ライトが足りなかったり水風船を追加してもらったり、時間制限を組んでいたのに混んでしまったなど不手際もありましたがみんなに楽しい、きれい、ありがとうと言ってもらえて素敵な時間でした。
- スムーズに実施することができました。準備がうまく進められたので大きな失敗もなくやり遂げることができました。
- 理想や先入観にとらわれすぎず、目標を達成できる範囲で現実的な行動計画に落ち着くこと。文化祭当日はそれぞれに忙しく実施は難しい点もあったが、来場人数などを考えて、一日中やらず半日にするなど、目標の達成が邪魔されない範囲で現実的に動けたのは良かったと思う。
- 文化祭当日に部活動の引退を控えており、当日はあまり活動に参加できないことが予想されていたので、文化祭前日までにできることをできるだけ多くするようにしました。出来ることを出来るだけやる、そしてその誠意を見せることは大切なことだなと思いました。また、文化祭当日は少しでも長い時間募金活動ができるように工夫し、募金活動を行いました。自由に文化祭を回ることは出来ませんでしたが、募金を多く集めることができて良かったです。声を大きく出し、笑顔で募金活動を行っていると、多くの人が募金してくださったり、話を聞きにきてくださったりして、自分の持っていた募金活動のイメージと違っていたため、嬉しく思いました。思っていたより、興味を持って下さる人が多く、関心の多いテーマであるのかなと感じました。

④まとめ

- チームメイトに積極的に意見を聞く立ち位置でした。不明瞭な点が残っていないか、全体をみて考える視点が身に付きました。
- Food Waste という社会問題に取り組み始めた当初から、計画がうまくいかないこともありましたが、その度にハラパン高校の生徒や関学のメンバーと話し合うことでより良い解決方法を見つけることが出来ました。私自身は話し合いが深まる中でアイデアも膨らみ、それは今回のトピックだけでなく、これからおそらく私が研究していくであろう「食」の研究に役立つと思いました。また、今回の学びの中で、様々な問題を「食」という側面から解決法を考える力も身につきました。これは私がこの分野が好きだからということもありますが、食が人々にもたらす影響力の大きさを今回再認識出来たこともきっかけの一つだと思っています。
- 自分たちが行なってきたことを文字に起こし、分析する力が身に付きました。最終プレゼンに向けて紙にまとめていると、自分たちの行動やそれに対する効果が可視化され、このプロジェクトの継続的な取り組みまで話すことが出来ました。改めて議論だけで突き進むのではなく、紙に一度落とし込む重要さに気付けました。
- 両国での合同チームで、1つの問題解決に取り組むことで、とても多くの力を身につけることが出来ました。両国間でのこまめな情報共有や進捗状況報告の重要性も学びながら、両国間での文化の差や共通点なども、PR 活動を通して知ることが出来ました。また、西宮市を見つめ直す良いキッカケとなり、今まで知らなかった西宮市の伝統文化にも出会えました。全体を通し、プロジェクトに協力してくださった学校の先生やファシリテーターなど多くの人に支えていただき、プロジェクトを 1つ行うことの難しさや、達成感を知りました。このプロジェクトを終えることができ、本当に大きな自信に繋がりました。
- 参加してくださった方々にアンケートを実施して、それらをまとめて松本さんに結果を報告し、イベントのまとめにしっかり取り組むことができました。イベントを成功させ終わらせるだけでなく、その後の結果をまとめ、今後の

課題につなげていくことの大切さを知ることができました。

- 問われていることを項目別に分け、見返したときにわかりやすくなるように答えた。
- 普段の学生生活の中では触れることのない収支報告書というものを作成することによって、パソコンのソフトであるエクセルを使う力と、パソコンを使って文書を作成する事務的な能力が身につきました。 また、和キャンドルランタンづくりイベントの準備費用としてグループメンバーが立て替えてくれていたお金と、来てくれた方に払っていただいたお金をそれぞれ計算し、家で小銭をお札に替えてみんなに渡すという作業をすることで、お金を管理し、計算する力が身につきました。
- この活動すべての分析をしたことによって、自分たちの活動を振り返ることができました。今までは先生や、リーダーが引っ張ってくれていた大人数での反省でしたが、少人数の企画であったため、一人ひとりの反省点をより明確に知ることができました。
- ハラパン高校の生徒の人とはなかなか協力はしづらい内容でしたが問題点について話し合ったりお互いの状況を伝えあったりしてランタン作りの時も写真を送ったり動画を流してつながることができました。なにかを一からやることは本当に大変でこんなにもたくさんのことを相談して連絡して許可を取ってたくさんの人に協力をしてもらわないとできないことなんだな、とわかりました。けれど自分たちで作り上げるものは達成感もとても大きく、自分たちがこうしたい！と思ったようになんでもやりたいことに挑戦できることが最大の良さだなと感じました。将来につながるなかなかできないすばらしい経験ができました。
- アンケートなどを実施して実際に話を聞くことでリアルな意見を聞くことができ、自分たちの結論にたどり着くことができました。その時は、自分たちが予想していた結果とは違ったのですが、みんなで話し合い、分析することができたと思います。
- やって終わりではなく、プロジェクトの将来についても考えたこと。また、具体的に子供たちに何をしてあげられたかを可視化できたこと。
- 全体的にみて、このプロジェクトでは、今までの自分よりも積極的に動くことが出来たと思います。しかし、自分には足りない部分が多くあることに気づき、それを改善しなければいけないと思います。そのことに気づけたことも自分の成長に繋がると思うので、良かったです。

⑤発表

- 事前に準備し、これまでの成果をしっかり聞き手に伝えることが出来ました。アイコンタクトや声のボリュームなど、良いプレゼンテーションの方法を学ぶことが出来ました。また、発表の準備を通して、よりチームワークを深めることも出来たと思います。
- ハラパン高校の生徒からもらった買い物リストを配布しながら発表をすることで、学びの成果を伝えると同時に実践につながる材料を聴衆している生徒に提供出来たと思っています。私は解決法の提案と、この授業のまとめについて話しましたが、ハラパン高校と協力することで、この Food Waste の解決法を私たちなりに導き出すことが出来たということをしっかり伝えることが出来ました。
- 取り組みを整理する力がつきました。これだけ熱意と時間をかけて 1つのプロジェクトを行ってきたことによって、この経験を多くの人に伝えたい、という強い気持ちが生まれ、調べたものを発表するのではなく、熱意込めて発表することは、なかなか貴重且つ良い学びの機会でした
- 数回行った発表では、両国での認識を改められ、整理出来る良い機会になりました。また、プロジェクトの内容をいかに分かりやすくまとめるかに気を配り、日本側でよく話し合い、両国間でも話し合いを重ね、自分の意見をまとめて発言する力や、チームの意見をまとめる力など総合的に身についたと思います。
- 私たちが行ったイベントについて、わかりやすく英語で話すことができました。行った様々なことをまとめ、英語に訳すという力が身につきました。
- 最終発表では原稿を担当した。それぞれが自分で原稿を書くよりも、1人が全て書いた方が内容にまとまりが出るからだ。 原稿を書く際、英語だとどうしても理解に時間がかかるので段落ごとに日本語と英語の両方の文章を書いておいた。発表の際は全員がこの原稿を読むことになるので、それぞれが内容を理解しておくことが重要だからである。こうすることで、内容の一貫性と、それぞれが自分で原稿を書いたときのように英語を理解して話

すこととを両立できた。

・時間がない中でプレゼンテーションのスクリプトを考えたことによって、集中して作業する力が身につきました。また、できるだけアイコンタクトをして発表する練習をしたことによって、良いプレゼンテーションをする力が伸びたと思います。 プロジェクトを通して、私は友達や先生にインスタグラムやチラシを配って宣伝したり、関学のグループ内では、全校生徒の前でスピーチをするなど、人の前に立つ役割をすることが多かったです。グループのメンバー4人がそれぞれ得意なことを分担してプロジェクトを進めることができたと思います。 両国グループの協力体制として、こちら側はインスタグラムに投稿されたバリ島のグリーンボールビーチやギットギット滝の翻訳をするなど協力し、バリ側は 12 月 10 日に和ろうそくについて全校生徒の前で発表すると言ってくれています。このように良い協力体制が敷かれていたと思います。 日本側とバリ側の目的を実現するため、それぞれのプロジェクトのアピール方法をお互いがアドバイスし合うなどの工夫をしました。その結果、片方だけでプロジェクトを進めるよりも多くの人にアピールすることができました。プロジェクトを行うにあたって多くの人の協力は不可欠で、一人では何もできないのだと改めて感じました。

・今回の発表は今までよりも堂々とすることができました。これは、スカイプによって英語で考えて英語で話す力がついたからだと思います。これからもこの調子で話す練習を続けていきたいです。

・準備期間が短く、テスト前であったけれどみんなで分担してまとまりのある発表が出来ました。みんながそれぞれ強い思いをもってイベントを行ったので発表の原稿を考える時もすらすら言いたいことが出てきました。自分たちの頑張った成果を振り返る良い機会になりました。

・私は英語での発表がとにかく苦手だったのですが、今回はできるだけ自分の言葉で前を見て話すことができたと思います。

・発表準備における、KG チーム内、および両国チーム間での分担。それぞれに役割を考えて、完成のために一人一人の力を最大限尽くせたこと。また、やはりうまく連携できないこともあったが、柔軟に対応し、それぞれのいい部分をうまい具合に繋ぎ合わせ、最終的なプレゼンの形を作り上げられたこと。自分の意見を主張する力。ポスターやエコブリックスの作成。文化祭に来られた方々に自分たちが行っていることについての紹介をした。全体を通して、チャレンジする力がみについた。相手の目をみて話す力

・最終プレゼンテーションでは、原稿やパワーポイントはグループのメンバーの何人かが作ってくれたのですが、私はハラパン高校との発表についての話し合いをしました。その際に、私たちの伝えたことが相手に伝わっていなくて、プレゼン発表前日に不具合が生じましたが、班員で話し合って解決して、プレゼンに挑むことが出来ました。そこで、臨機応変に対応することの難しさを学びました。発表の際は、しっかり前を向いて話すことができましたし、流れも良かったと思います。リハーサルなしで本番に挑みとても怖かったので、リハーサルなどは行わなければならないなと感じました。

【資料2-4】

プログラムにおけるアンケート調査

関西学院高等部 – HARAPAN 高校

日本 - インドネシア・バリ島

2018 年後期

株式会社 With The World

1

インドネシア側･HARAPAN 高校

Q1：グループで取り組んでいるプロジェクトの目的（ゴール）、内容（アクション）とその理由を自分の言葉で書いてください。

[Food Culture –食文化- テーマを選択した生徒]

私のチームの目的は、インドネシア人に食の大切さを PR することです。インドネシア人のほとんどが野菜不足に陥っていて、その理由の 1 つがインドネシア料理にあると思っています。そこで、インドネシア伝統料理の良さを残しつつ、栄養バランスの良い和食をイメージして栄養のある伝統料理を作り、ポスターなどで PR を行いました。

[Tourism –地方創生- のテーマを選択した生徒]

日本のチームの目的は西宮の和ろうそく産業の PR で、私たちは観光客の分散と、ローカルの産業振興が目的です。理由はバリ島では特定の観光にスポットに人が多く集まる傾向にあるので、渋滞やごみのポイ捨てなど問題が多発しています。そこで、地元民しか知らないまだ知られていない観光スポットを紹介することによって、観光客の分散と、ローカルの産業振興を目指します。

Q2：自身がこのプロジェクトで行ったことを時系列で教えてください。

[Food Culture –食文化- テーマを選択した生徒]

私たちは、まずインドネシアや日本の人たちが「食」からどれだけ健康的な影響、またはその原因をリサーチし、一方で双方の伝統料理の良さについても調べ、議論しました。調べたことは殆ど知らなかったことばかりでしたので、周りも同様と思い、ウェブサイトやインスタグラムを開設し、その内容を 1 人でも多くの人に届くよう投稿し拡散しました。また、インドネシア料理自体に野菜があまり入っていないため、和食×インドネシア料理を組み合わせ、最も健康に効果的な料理を考え、真似できるよう作り方をポスターに書き、両国の食堂に掲載しました。

[Tourism –地方創生- のテーマを選択した生徒]

私たちのグループは、バリの社会問題を考えたときに出てきたのが、渋滞とごみ問題でした。その原因の 1 つはある特定の箇所への'密集'が原因だと捉え、地方の観光スポットを、SNS を使って紹介することにしました。改めてメンバーで紹介するスポットに行き、PR する素材を探し、写真を定期的にアップしていきました。また、日本の和ろうそくイベントが上手くいくよう、バリのイベントで通常行っていることなどを共有したりしました。

2

Q3：自身がこのプロジェクトで学んだことを教えてください。

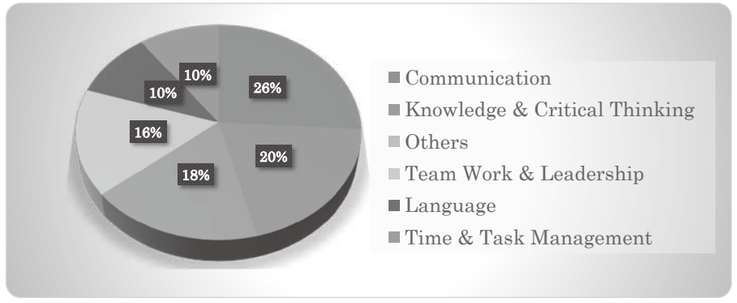
[Food Culture –食文化- テーマを選択した生徒]

とても多くのことを学びました。まず周りの人とのコミュニケーションの大切さを学びました。同じ国のチームや日本の生徒は私とは異なるアイデアを持っていて、私も結構意見しましたが、実際にはチームの意思決定の 75%が周りのアイデアで構成されていき、それが私にとって新鮮で視野が広がりました。2 つ目に目標達成のための計画性です。目標に届くために、常に過去話したことを次話さなければいけないこと考えながらチームをリード出来るようになりました。3 つ目に、人を巻き込む力です。何か手伝って欲しいときや、伝えたい時に、皆の前でスピーチする回数が多く、いつの間にか人前で話すことが得意になりました。他にもプレゼンにも慣れました。大事なことは続けることなので、これからもアクションを継続して行っていきたいです。

[Tourism –地方創生- のテーマを選択した生徒]

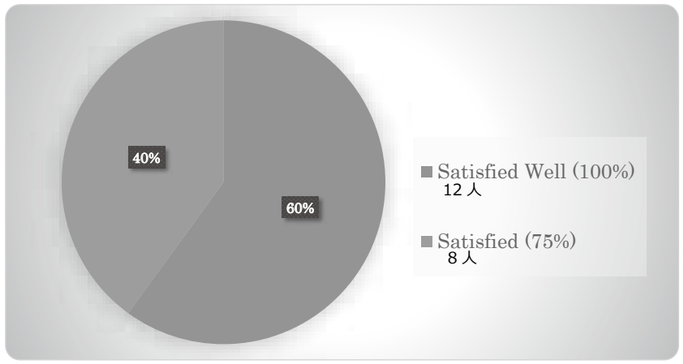
伝統産業について議論することが多く、話をしているうちに日本の伝統産業や特徴について知ることが出来ました。また議論を重ねることで分析力も身に付きました。分析なしの議論は結局前に進まないことが多く、Why を追求し、そこから How を議論することで、さらに本質的な多くのアイデアが浮かびました。この授業を通して、自分の意見を事前に調べた時に初めて英語の新しい語彙も覚えましたし、日本の学生が話す単語も勉強になりました。これまで海外の同級生とあまり触れあう機会はなかったのですが、今回日本の生徒と話せて、外国人に対するコミュニケーションも学ぶことが出来ました。

Q4：このプログラムからどのような力を得ることが出来たと思いますか？（n=20）



3

インドネシア側における満足度調査（n=20）



最後に一緒に記念撮影（関西学院高等部と HARAPAN 高校）

4

Mako Yamagishi

Why are the cityscapes are so different between Japan and Europe?

Purpose and Motivation

The reason why I chose this topic is based on my experience of living in Belgium. I faced a lot of culture shocks there. One of the biggest shock for me was the difference of cityscapes. Since then, I had been wondering why the differences occur, and so I started this research. Also, I learned about the environmental issues in the world in GLP class. I thought it was going to be important for each country to learn the good way of using nature or the environment. By researching the cityscapes, I tried to connect it to a solution for environmental issues.

Problem

I categorized the research results into 3. First, Japan has a unique geographical characteristic which is that it's an island country. The cultures from foreign countries came to Japan slowly so various kind of buildings are mixed in Japan. (On the contrary, European buildings are lined up neatly.) Secondly, the way of thinking is different. For example, many of the Japanese think that convenience is the most important in when they make their house. However, Europeans are likely to adjust their houses so that their neighbors can feel relaxed.

Approach and Results

Finally, there is a difference of culture. Europe has been affected by arts through the times such as in the Renaissance Period, and it improved the architecture too. Another difference is religion. The church was built in the center of the city. The view of nature was another difference, because of the religion. Whether people respect nature or not was not the same in Japan and Europe.

Conclusion

It was interesting to know that the differences of cityscapes is caused by several factors. I think that an interesting way to learn about a country is by analyzing its cityscape.

Kanon Nohara

"Is development assistance really effective to developing countries?"

Purpose and motivation

When I was watching a TV program about development assistance, I wondered if these type of assistance is really effective to developing countries, so I decided to make the theme of my thesis "Is development assistance really effective to developing countries?"

Especially, people in developed countries should think about this theme because we are the people who are giving assistance.

Problem

I looked for the books about previous aid policies that developed countries did. However, there were few books, so it was hard to find the books whose evidences are effective.

I also wrote about the problems of assistance because it was necessary to research them to find the way will improve assistance for the better.

Approach

The most important source was the problems which were caused by assistances, so I researched books

about problems of assistance and thesis papers which professors wrote about it. In addition, I researched the problems points in developing countries.

Results

In 1960, governments in developed countries succeeded in the goal of "10 years of United Nations Development" which increased the annual growth rate by 5% in developing countries. However, the growth rate in developed countries also increased. As a result, the income gap became larger and the North-South Disparity didn't improve. In addition, developing countries had to raise the goal of annual growth rate in "Secondary UN Development" in 1970. On the other side, developed countries were also were irritated because the economy in developing countries doesn't grow by their assistance. It's called "Aid tired".

Conclusion

Developed country side: Improve the problems of human resource development. They had to check whether the assistance was effective.

Developing country side: They make an effort to develop their domestic economy without relying on assistances.

Yuki Nishino

What is in needed in Cambodia "now"?

Purpose and motivation

I chose this topic from my precious experience in Cambodia. I went to Cambodia as part of a field work when I was second grade student. I experienced the restoration of Angkor Wat, Japanese NGO and NPO's activity, and exchanging cultures with Angkor high school student and Angkor Krau village's children. Through these experiences, I noticed that the gap between rich and poor are extreme in Cambodia. This made me to think of what kind of aid will help Cambodians.

Approach

To write this graduation thesis, I collected information from 25 books, 6 websites and interview with Mr. Chia Nor. In the research of this thesis, I found 2 interesting facts. First is that most problems in Cambodia are caused by Pol Pot.

Results

I researched my theme from 3 points of view: history, industry and education. Land mines were buried during the civil war, rice field ruined because of forced emigration, and destruction of the education system were all caused by Pol Pot. Second is that working environment of school teacher is inferior in Cambodia. On average, one Japanese teacher has to take care of 19.4 students. However, one Cambodian teacher has to take care of 41.3 students. Also, the income is lower than most occupations in Cambodia. It's about 30000 yen in a month.

Conclusion

From these results, Pol Pot had a big influence on modern Cambodia, and the government has to put effort into education to develop the country again.

Kurumi Kasamatsu

How does Slow Food affect modern society?

Purpose and motivation

Recently the word "Slow Food" has been drawing attention on the internet and in magazines. So, I'm interested in this movement and I wanted to examine the influence of it.

Problem

Every country has many food problems. For example, disorder of eating habit, hunger, disappearance of traditional dishes and so on. Therefore, I theorized that Slow Food is effective in solving the food problem of modern society, and I thought that if the influence of the slow food movement is proved, it will lead to solving the problems related to food in each country

Approach

I created a questionnaire for junior high and high school students in order to investigate youth's food consciousness. Also, I read a book written by educational researcher and representative of Slow Food Association.

Results

Slow Food gives us a chance to review food culture. Also, the school garden which is one of food education is a good opportunity to broaden the view of children, and it is the most familiar Slow Food movement for students. The above results support my hypothesis. On the other hand, I noticed a fundamental problem. It is the most regions are not acting though they noticed the importance of food, or their awareness of food is low from the beginning.

Conclusion

Slow Food movement is an influential activity. So, we should make this activity more popular in the world. Therefor we have to research connection between food and society from the view point of sociology.

Kana Yamamoto

How do strict club activities affect students?

Purpose and motivation

Some students in KG high school are prevented from studying enough by their strict club. I had suspected if strict club activities really have any meaning. This research would let us know whether strict club activity is reasonable as an educational operation, or whether we should change the situation.

Problem

I believed that students' duty is to study so club activity should be just a secondary educational operation which students can join on their own accord. However, some clubs in KG high school require the members to practice late into the night every day, and they don't have enough time for the members to rest, let alone study. Is such club activity's form really right? I know that there are many things which can be gotten by taking part in club activities. But it can be easier one. That's why I examined if strict club activities is really effective for students' development focusing on "strict" club activities.

Approach

I had found that club activities is effective to make students gain life skill and motivation for study so I decided to examine if strict club activities make students gain life skill, motivation for study, and good grades. I cited some questions from the preceding studies to measure students' ability.

Result

I examined for 3 factors (life skill /motivation to school life & study /grade) sending a questionnaire to KG 3rd grade students. The following is the result. Life skill: Most of clubs which got high life skill grade on the questionnaire was strict clubs. Motivation to school life & study: (1) Most of clubs which got high motivation to school life & study grade on the questionnaire was strict clubs. (2)The lower strictness grade, the lower motivation to school life & study grade the students answered. Grade: (1)There was no relationship between good grade and strict club activities. (2)Students in strict club activities tend to get low grade but some strict club activities' members get good grade. (3)Students in unstrict club activities tend to get low grade. These result of the questionnaire supported the preceding studies, "club activity is effective to let students gain life skill, promote their motivation to study and school life". Strict club activities didn't always have something to do with students' high ability and grade but unstrict club activities seemed to have something to do with students' low ability and grade.

Conclusion

It is interesting that unstrict club activities seemed to have something to do with students' low ability and grade. This result made me come up with an idea —— students' characteristic maybe roughly classified when students choose strict or unstrict club activities. To know more deeply about this subject, I want to examine about "the relationship between students' characteristics and the club activities which they choose to join". Lastly, this research's original purpose was partly to improve the situation of too strict club activities so it surprised me that strict club activities generally got positive conclusion. I want the club adviser, the coach, and the club's member in position not to overestimate this result so that they will not make their club activity stricter.

Hana Ito

The problem of poverty and hunger in developing countries

Purpose and Motivation

I studied about a problem of poverty and hunger in developing countries through GLP classes, and I wondered. There are many advanced countries, NGOs and other organizations who provide assistance for developing countries. However, the problems of poverty are becoming serious. So, I decided to research about it as a graduation thesis. So, my graduation thesis`s theme is "Why haven`t developing countries become wealthier as of now".

Problem and Approach

I researched about developed countries on the Internet, and read books about world problems. For example, I checked websites which are about developing country`s population and analyzed the common points of developing countries. Moreover, especially, I took attention for relationship between developing countries and advanced countries.

Approach

In thesis, I researched and considered mainly about five things: assistances by advanced countries, common points of developing countries, history, assumption of world without developing countries, and effectiveness of assistances.

Results

Based on these statements, I found that developing countries haven`t become wealthy as of now because it is too difficult and even if they can be rich, they will be suffer from additional problems which are caused by a lack of developing countries. To solve the problem, we have to solve not only poverty and hunger problems but also the problem of confrontation between advanced countries and the global warming problem. For example, if people in developing countries became rich, they will be able to use useful transportation and it will cause a lot of CO2 gas. Therefore, to solve developing country`s problems, we have to take a lot of time and make great efforts. It is too hard.

Conclusion

In conclusion, I think my thesis will be able to help people to reconsider how they support developing countries and solve problems. If detailed data about how long it will take to make developing country to advanced country are added, my thesis will be more effective.

Hiromitsu Fujimoto

How the ODA should be to eliminate the poverty in developing countries.

Motivation

Why I choose ODA as a theme of the thesis is I was interested in the lectures that Prof. Keiko Nishino, Prof. Yoshikazu Yamada, and Prof. Kei Shiho did. It made me decide that I will research about why the ODA is needed, how to decrease the poverty in developing countries, and what kind of assistance build up sustainable development.

Problem

People in developing countries expect and depend on assistance like supplies and money, and it keeps the developing countries in poverty.

Approach

I used a lot of books, even the Bible and the Japanese constitution to find information. In the chapter 1, I wrote about whether the ODA is actually needed or not. Chapter 2 is consisted of how the emerging countries like BRICs developed and finds the tips to eliminate the poverty. From chapter 3 to chapter 5, I write about JICA's current situation and issues.

Results

From research about the emerging countries, I found the tips that would be a base of the sustainable development, education, medical, agriculture, infrastructure, and raising leaders. Then JICA is trying to make sustainable development along SDGs.

Conclusion

The ODA which can decline poverty in the developing countries builds up the base of country such as education, medical, agriculture, infrastructure, and raises leaders including local citizens mainly.

Hitomi Morisawa

Can organic farming and products improve the quality of our lives?

Purpose and Motivation

My research question is "Can organic farming and products improve the quality of our lives?". I visited Cambodia last summer for SGH study tour. It was the first time to visit a developing county for me. In Cambodia, I felt the power of nature from the Cambodian lifestyle. Then, I wondered how we can protect the nature and found the word "organic".

Problem

These days, a company can produce on a large scale using chemical things with low cost. Perhaps the products which you have that were made in a dangerous environment for producers and destroy the natural environment. We have to consider those things when we buy products. Moreover, I think that we can spend a better life with real nature.

Approach

I focused on food and clothes which is one of the foundation of our life to answer my question. There were 4 things that I verified in the study; genetic modification/variety improvement, organic farming, earth-and-people-friendly fashion, and effect of herbs. I collected literature written about those topics.

Results

Organic things lead to bringing our lives closer to the original life. The safety of genetic modification failed to reveal the truth. Organic farming for food and cotton used as a material of clothes can protect not only workers' health and also the environment. There are many kinds of herbs which have each characteristics and people can feel the effect of herbs by using them for a long time.

Conclusion

It is difficult to practice making earth-and-people-friendly products. However, I believe that everyone can improve the quality their lives if people know the original nature like me. In addition, there are few people who are interested in those products, so we have to spread importance of the nature.

Yuri Uemura

Does the United Nations really contribute to peace in the world?

Purpose and motivation

I studied about the United Nations in GS class. At that time, I was interested in the United Nations so I decided on this theme. Since I knew only the basic things about the United Nations, I was wondering if it really contributes to the world. Because the United Nations has an obligation to protect world peace, I thought that this research is necessary.

Problem

Despite the fact that the United Nations is active, disputes are occurring in various places.

Approach

I tried to solve this research by using a book and the Internet. First, I studied about the United Nations, then examined the issues and the Security Council.

Results

The United Nations is striving for peace in the world, but it has some problems. For example, usage of support money and concession to major countries. This result was within my expectation. It is difficult to treat all countries equally.

Conclusion

This research concludes that the trust of the United Nations to be lost. We need some kind of solution to prevent it. I should have studied the solution in more detail. It is a point of reflection that the conclusion is not answered in any way. I would like to make use of this research at university

Hana Yagawa

Why do some young people become attracted to being an Islamic Militant?

Purpose and Motivation

The motive of researching was that I studied Muslim and Islamic Militant in GLP class. Also, real Muslim came to the class and spoke about the difference between Muslim and Islamic Militant. So I decided to research about Islamic Militant. So, I needed to research about terrorism and Muslim in detail.

Problem and Approach

When I searched about some key words in my essay, I used books at the library of Kwansei Gakuin High School. In order to collect some information, I also went to my city library and gathered them. However, I had a problem that the materials in books were very old and there were not enough new materials. So, I used updated information on the Internet.

Results

There are three main findings based on my research. First, Muslim doesn't have relationship with Islamic Militant. Second, people chose terrorist as a job and did acts of terrorism at the risk of their lives. Third, young people became terrorist because of the negative conditions of their environment like violence by their parents. Also, puberty in young people made an impulse for them to enter Islamic Militant.

Conclusion

In conclusion, the reason why young people became attracted to Islamic Militant is brain washing and advertising by Islamic Militant. Terrorism isn't another person's affairs for Japan.

GGPの取り組み

特別プログラム「論文全体発表会」	
日時	1月23日（水）　9:25～12:35
対象	3年生全員
内容の詳細	

＜内容・生徒の活動＞
場所：関西学院高等部礼拝堂
スケジュール：全体司会　松浦克博（3学年）　　発表司会：種谷克彦（読書科主任）
9:30～9:40　来賓紹介
審査員　来　賓　田淵　結　関西学院院長
高等部　枝川　豊　部長
福嶋眞二　教務主任
松浦克博　3学年主任
塚本恭子　国際交流部主任
三木真也　入試・広報部主任・SGH担当

9:40～10:40　各クラス代表発表（前半）
1番　H組代表　「人工知能に意識を持たせることによる危険性」
2番　A組代表　「左利きは世間一般で言われているほど不便を被っているのか」
3番　E組代表　「なぜ女性は無理なダイエットをするのか」
4番　C組代表　「人々はどのような違い、共通性があるのか」
5番　G組代表　「イメージは文化によってどのような違い、共通性があるのか」
10:40～10:50　休憩
10:55～11:45　各クラス代表発表（後半）
6番　F組代表　「なぜ忍者は黒服にドロンと消えるイメージなのか」
7番　D組代表　「なぜオスマン帝国はレパントの海戦で神聖同盟軍に敗北したのか」
8番　B組代表　「厳しい部活動は生徒たちにどのような影響を与えるのか」
9番　I組代表　「自動運転の実現により社会はどのように変化するのか」
発表時間7分～8分（発表）・2分（質疑応答）
11:40～11:50　休憩・審査
11:55～12:30　審査発表・賞品授与（枝川部長）、講評（田淵院長）
第1位　B組代表　「厳しい部活動は生徒たちにどのような影響を与えるのか」
第2位　D組代表　「なぜオスマン帝国はレパントの海戦で神聖同盟軍に敗北したのか」
第3位　I組代表　「自動運転の実現により社会はどのように変化するのか」

12:30～12:35　諸連絡・終了

■卒業生

GLPを受講した卒業生を対象にアンケートを実施。設問は以下の通り。

設問項目

1. グローバル・スタディを受講したきっかけ
2. 印象に残っている高等部時代の学内あるいは学外での活動
3. 高等部でSGH/GLPを通して学んだこと、成長したこと
4. 大学での学びや活動との関連性
5. 将来に向けて高校（大学も含む）での学習をどう活かすか

回答者

2014年度卒業生　2019年3月現在　大学4年生
淡島　良太　関西学院大学　総合政策学部
千葉　豪士　関西学院大学　経営戦略研究科会計専門職専攻

2015年度卒業生　2019年3月現在　大学3年生
土屋　優介　慶応義塾大学　総合政策学部
魚谷　航平　関西学院大学　経済学部
小出　将志　関西学院大学　経済学部

2016年度卒業生　2019年3月現在　大学2年生
半田　翔也　慶應義塾大学　総合政策学部
奥平　裕士　関西学院大学　国際学部

2017年度卒業生　2019年3月現在　大学1年生
廣野　裕香　関西学院大学　国際学部
松永　晶太　関西学院大学　文学部
三木まりな　関西学院大学　国際学部
牛場　裕介　関西学院大学　国際学部

2014年度　卒業生（大学4年生）

・関西学院大学　総合政策学部　淡島　良太　　・関西学院大学　経営戦略研究科会計専門職専攻　千葉　豪士

1. グローバル・スタディを受講したきっかけ

淡島：野球漬けの人生の中で、関学高等部に入って野球以外の知らない世界に触れ、そこから多くの学びを得ました。受講したきっかけは、そんな経験より知らない世界を見て見たい、そしてこのプログラムなら見えるかもしれないと言う直感と好奇心で受講することを決めました。

千葉：関学高等部がスーパーグローバルハイスクールに採択された年に私は高等部３年生でした。当時はESSという部活動に励んでいた中で、ESSの部長もしていました。そのため将来は漠然と海外や異文化理解との関わりのある仕事に就きたいという考えを持っていました。そのときにチャペルの時間にスーパーグローバルハイスクールに関学高等部が採択され、異文化理解等の学習ができるということを知り、海外に行くことができるチャンスがあることを知りました。ESSの活動との両立もでき、部活動にも役に立つと考え、受講しました。

2. 印象に残っている高等部時代の学内あるいは学外での活動

淡島：人生の大半を過ごした、野球の活動ももちろん印象には残っていますが、GLPの毎週の授業そのものが印象に残っています。英語が話せない、貧困や世界情勢について何も知らない自分の無知さを知り、少しでもできないことをできるように、知らないことを知れるように、自分で勉強したことが一番印象に残っています。

千葉：私が一番印象に残っている活動はやはり発展途上国であるカンボジアへ行き様々なことを学んだことです。今でも鮮明に覚えています。私がカンボジアに行く前のカンボジアに対する印象として、発展途上国であるということは認識していましたが、他には何も知らず、どこにあるのかさえ知らない状態でした。日本は先進国であるというイメージから、カンボジアはどこか劣っているといったイメージがありました。カンボジアでの７日間で一番鮮明に記憶していることは、現地の小学校の小学生たちがどのような状況なのかを視察させて頂いたときのことです。

そのときに現地の小学生のノートを見せてもらい驚きました。一文字一文字がまるで定規で線を引いたかのように丁寧に書かれており、文字の大きさや行間などが揃っていました。それも一人だけではなくどの子のノートを見てもそうでした。この例は一例に過ぎず、現地の方々が作って売られていた土産品なども精巧に作られていました。私は日本人が世界で一番几帳面だと思っていましたが、カンボジアの方々の丁寧さには本当に驚きました。

3. 高等部でSGH・GLPを通して学んだこと、成長したこと

淡島：1ステークホルダーの観点でしか見ていなかった物事が、その事象によって存在する弊害もあると言うことを学びました。貧困問題でも慈善で自己満足になっている事例が多く存在しており、慈善や心だけでは解決できない問題は世の中に多くあるなと。日々の人間関係でも同じようなことが起きているなと当時学びました。成長した点は、できないからしないのではなく、できるようにするために、恥をかいても実行してみることが大事だと学び、それが自分の中に落とし込まれたプログラムだったと感じます。

千葉：先入観を持たないことです。私達は物事を見るときや意見を言うときに、自分の生きてきたなかでの経験を活かそうとします。それは良い方向に進ませてくれることがほとんどですが、致命的になることもあります。日本は先進国だ、カンボジアは発展途上国だという先入観を持ち続けていると、いつの間にか立場が逆転するということもありうります。自分の目で見てカンボジアの現地の方々の優秀さを見てそのことを知りました。実際私は先入観を持っていたり、決めつけたりしていて生きていたと思いますが、大学に入ってからはそういうことはなくなりました。インターネットですぐに知れる情報があるこの時代だからこそ、何もかもを鵜呑みにするのではなく、懐疑心を持って自分の目で見て学ぶことが大事だと認識するようになりました。

4. 大学での学びや活動との関連性

淡島：カンボジアでのスタディツアーを通じて、貧困問題を解決する術を考えましたが結論、ビジネスを成立させることが全ステークホルダーにとって幸せであると言う結論に至りました。僕一人が、貧困問題を解決することは不可能ですが、ビジネスマンとして、スキルアップした未来、少しでもその時に持っているニーズに対して、提供できる人間になりたいと考えております。このことより、大学生活では、ビジネスマンとしての市場価値にフォーカスして活動を行いました。

千葉：現在は大学院で公認会計士という資格を取るために日々勉強しています。公認会計士とグローバル・スタディは一見関係ないように見えますが、関係はあると思います。グローバル・スタディでは異文化の理解以外に、発展途上国での環境問題などの学習もしました。そのような環境問題の原因は大企業の存在が背景にあることがほとんどです。H&Mのサプライヤーへの過度なコストダウンや大量の服が余ることでのゴミ問題、モンサントの遺伝子組換え農産物や農薬による土壌汚染や害虫問題など挙げたらキリがありません。発展途上国のパワーを上回るほどのパワーを持つ大企業が増えてきており、発展途上国を食い物にする例は少なくありません。ここで企業の社会的責任が問われています。企業が引き起こすこれらの問題は、環境会計という新しい会計技法で解決が図れる可能性があり、活発に研究がされています。私は現在この環境会計や企業の社会的責任を含めて勉強をしています。

5. 将来に向けて高校（大学も含む）での学習をどう活かすか

淡島：どの経験をどこで活かすかは正直タイミングなどもあるため、言及できませんが意思決定をする際に、条件分岐させた上で、最適解（最大幸福）を出すために活かしていけると思っています。

千葉：私は将来の仕事として公認会計士になることを目指しています。公認会計士と一口に言ってもその仕事の幅は非常に広く、資格ですからどんなことに活かすことも可能です。今は公認会計士になることは決めていますが、まだどんな公認会計士になるかは決まっていません。幸いなことに世界中に監査という業務があり企業も世界中にありますから、グローバルに活躍できる資格であることは確かです。先に挙げた環境会計を導入する企業への指導やCSR報告書という社会的責任をいかに果たしたかを示す文書の作成に対する指導ができれば、環境問題や企業が引き起こす様々な問題の解決に貢献できるのではないかと思います。

2015年度　卒業生（大学3年生）

・慶應義塾大学　総合政策学部　土屋　優介　・関西学院大学　経済学部　魚谷　航平
・関西学院大学経済学部　小出　将宏

1. グローバル・スタディを受講したきっかけ

土屋：グローバル・スダディを受講したきっかけは、3つあります。1つ目は、単に途上国の開発問題に関心があったことです。開発に関して、普段の高校の授業では学ぶことができないような内容を、この講座では学ぶことができると知って、受講を決めました。また、同じ興味や関心を持った仲間と知り合いたいという動機もありました。同じ学校の中にいても、クラスや学年が違う人とは、あまり知り合うことはありません。ただ、自分と同じ志を持った優れた先輩や後輩と知り合わないまま高校3年間を終えるのはもったいないと思い、グローバル・スタディを通じて縦のつながりを作ろうと考えたのです。3つ目に、私の在学当時、グローバル・スタディの活動の一環で、カンボジアに無料で行くことがでたことも大きな理由の一つです。自分の関心のある開発について、実際に支援が行われているフィールドで、金銭的なハードルを気にすることなく学ぶことができる機会があると知り、この講座の受講へと心が突き動かされました。

魚谷：友達に誘われたのがきっかけでした。その友達は結局受講しなかったのですが、それで自分まで受講を辞めたらなんでもその友達のまねっこみたいでダサいなと思ったので、一人で受講することにしました。母親に「やっとき」と言われたのもきっかけの一つです。もちろん内容にも興味はありました。

小出：「なにか新しいことを始めてみたいなー」ということを考えていたところに降りてきたからです。KGHでは良くも悪くも、変化が少ないことがあります。部活動一筋と聞くと、聞こえがいいことですが、それだけではKGでの学ぶ領域を狭めてしまうとも考えています。せっかく「Mastery for Service」を謳っている学校だからこそ、人のためとか何かの為に鍛錬を積むいい機会だと思い挑戦しました。その当時から世界市民という言葉も耳にしていたのもあるかもしれません。

2. 印象に残っている高等部時代の学内あるいは学外での活動

土屋：印象に残っている活動としては、部活動とAO入試の二つあります。部活動では、朝練と午後練を繰り返して、毎日合計30キロほど走ったことで、精神的にも肉体的にも強くなったと考えています。AO入試を受験するにあたっては、自分の関心を実際に行動に移すことや、学内の勉学を、手を抜かずに取り組むことが求められました。結果的に、自分の中で学業と部活動の2束のわらじが完全に上手くいったとは思っていませんが、最後まで逃げずにやり遂げられたのは自分にとって大きな財産だと思っています。

魚谷：カンボジアにスタディツアーに行ったことです。今は違うようですが、当時は全額支給だったので意気揚々と渡航したのを覚えています。初めての途上国で、路上の五体が不満足な物乞いや物を必死で売ってくる子供たちに新鮮な衝撃を受けました。中でも凄惨なポルポト政権時代を実際に経験した方とのお話はとても印象に残っています。

小出：「アジア学院訪問」と「パルモア学院入学」というのが印象的な経験です。GLPでは「アジア学院」に訪問するプログラムがありました。そこでは自分と同じ若者が自分たちの手で生活していることに驚きました。世界にはいろんな人がいて、日本の農業を学びたいと思い訪日している人ともお話ができました。普段生活から全く違う世界にいるということに、感動を覚えたのがその時だったと思います。そこでは有機農家の方ともお話をしました。内容はほとんど覚えていません。それでも、有機農業のすばらしさ、ボランティアの意義を、畑を耕しながらお聞きしたのは忘れません。それだけ、自分の世界が広がった経験はそれ以前にはなかったともいます。「パルモア学院」では英語を本格的に学びました。関学生は入学金無料という特例で入学させていただき、大変貴重な時間だったと思います。部活動としてサッカー部をこなすのみではなく、対外的に様々な挑戦をもっと行えたのではないかと今でも考えます。

3. 高等部での学び（GLPも含めて）を通して成長したこと

土屋：高等部での学びを通じて、学ぶための姿勢が培われたと感じています。高等部での授業は大学とは違い、自分の

苦手な科目や興味のない科目も少なからず受ける必要がありました。そのような授業に対して、匙を投げるのではなくて、根気強く取り組むことで、疑問を疑問のままにしない学びの姿勢を培うことができました。実際に、この姿勢を体得したおかげで、ある科目の苦手意識を払拭することができました。

魚谷：視野は広がったのかなと思います。日本のことや自分のことしか見えていない人が世の中にはたくさんいる中で、少しでも世界に目を向けたり、自分よりも弱い立場にいる人を思いやったりできるための地盤を自分の中に作ってくれました。そういう視野の広さや思考がグローバル人材には必要なのではないかと思います。

小出：学ぶことの大切さ、足を運ぶことの大切さを学びました。KGHには学ぶ機会もイベントに参加するなどの機会が山のように転がっていました。自分が挑戦したことに「英語ディベート」もあります。難しいそうでもやってみよう、とか挑戦しようとすることの大切さを学びました。GLPで世界を知ること、「何かを考える」それだけでも、高校生からしたら難しいことだと思います。考える、知ろうとする心構えができたのがとても意義あることだったと思います。

4. 大学での学びとの関連性

土屋：高校時代に、グローバル・スタディを通じて、自分の志や将来の展望について考えたことは、現在の大学での学びに繋がっていると考えます。高校時代は、開発途上国の問題、特に元子ども兵の社会復帰支援が自分にとって主な関心となっていました。私はこの問題を政策的インプリケーションで解決したいと考え、そして、そのような手段を実行するために何を学ぶ必要があるか考えた後、現在所属する計量経済学の研究会にたどり着きました。今でこそ、子ども兵問題以外の事柄に問題意識は移ってしまいましたが、計量経済学の研究会において、問題を発見し解決するプロセスを学ぶことで、将来社会に出たときに自分の武器になるスキルを身につけられていると実感しています。

魚谷：僕は今、大学で開発経済学を学んでいます。この開発経済学とは途上国がいかにして発展していくことができるのかということを経済学的に研究する学問です。カンボジアでの経験から、途上国の苦しんでいる人にどう手を差し伸べたらよいのかということが高等部卒業時からずっと頭の片隅にありました。その思いと、大学で学び始めた経済学を結び付けてくれたのが開発経済学です。開発経済学は単なる経済学とは異なり、人を助けることにかかわる学問なので、哲学的な見地も必要とするとても面白い学問です。GLPを受講していなければ今の道には進んでいなかっただろうなと思います。

小出：1、2年生の時は「NPO法人アイセック」に所属し、日本の企業と海外の学生を結ぶ活動を行っていました。自分の世界がさらに広がる経験になりました。そこではSDGsを解決など、社会課題に挑戦するプロジェクトを統括させてもらえるような経験もさせていただきました。3年生の夏には、セネガルでの漁村調査を行いました。セネガルという発展途上国の漁師の生活水準を向上させるために学術的にアプローチしてきました。非常にチャレンジングな経験でしたし、人生で一番「きつい」時期だったと思います。このような活動を行ってきたのはやはり、「Mastery for Service」の教えがあったからだと考えています。誰かの為に何かをする、人類の僕として世界を見るということはずっと言われてきたことです。それが大学生活の中で、いろんな世界を見て、体感して、行動に変えてきました。

5. 将来に向けて高等部（大学も含む）での学習をどう生かすか

土屋：グローバル・スタディを通じて自分の将来について熟考したプロセスは、「これから社会に出て何をするか」ということを考える際に非常に役立っています。自分が今まで何をしてきて、これから何をしたいのかということの考え方を知っていることで、自分自身を少しでも理解でき、将来の道筋が立てやすくなっています。また、大学では自分の問題意識を解決方法の発見まで繋げていくプロセスを学んでおり、これも将来正解のない問いに立ち向かっていく上で、有効なツールになり得ると考えています。他にも、より実用的な観点からだと、大学で学んでいるデータサイエンスや第三言語の習得は、自分の強みだと考えます。すでにエビデンスベーストな政策の立案が主流となりつつある現代社会において、統計的ツールや因果関係の測り方を知っていることは非常に重要であるし、英語だけでなく他の言語を操れることで、コミュニケーションを取れる人の幅は大きく広がったと考えます。

魚谷：高等部から今まで一貫して途上国にかかわることを学んできたので、社会に出てからも日本で終わらずに途上国を含めた世界とかかわりを持ち続けることができたらと思っています。現在はBOPビジネスに興味を持っています。BOPビジネスは、貧困層を対象に彼らの生活が改善されるような商品、サービスを提供することを目的としたビジネスで、利益を上げることを念頭に置いているところが単なる支援とは異なるところです。途上国の経済発展に伴い貧困層の市場は大きく拡大しており、これからが楽しみな業界であると考えています。

小出：特にありません。高校も大学も変わりません。しかし時代の流れが変わってきています。学校が変わらなくても自分が気付いて変わらなければいけない時代に突入しています。自分から主体的に行動を起こせるような、何かをつかみに行くような貪欲さが必要だと考えます。学習というのであれば、まずは足を動かし現地に行ってきてください。それが勉強面のモチベーションになるはずです。

2016年度　卒業生（大学2年生）

・慶應義塾大学　総合政策学部　半田　翔也　　・関西学院大学　国際学部　奥平　裕士

1. グローバル・スタディを受講したきっかけ

半田：私がグローバルリーダープログラム（以下GLP）を受講したきっかけは、中学生の頃より抱いていた、将来は恵まれない国の子供たちのためにできることをしたいという目標に、このGLPの受講を通じて近づくことができるのではないかと考えたからです。私は元々、中学部卒業まで海外に行ったこともなく、また特別行きたいと思うこともないような内向的な中学生でした。しかし、ある日の中学部の聖書の授業中に、ガーナのチョコレート農園での児童労働に関するビデオを見て、その思いは一変しました。自分と同じ、もしくは自分より幼い少年、少女が金銭的貧しさのために学校に行くこともできず、肉体労働に従事させられているという事実に言葉を失いました。そして、何気ない自分の日常がいかに恵まれているかということに気付かされ、世界の理不尽さを感じずにはいられませんでした。それ以来、発展途上国と先進国の間の社会格差に問題意識を持ち、国際協力に何らかの形で関わりたいと思うようになりました。この中学生の時に抱いた世界、社会に対する違和感は非常に衝撃的で、現在、大学での講義、研究を捉える一つの軸になっています。

奥平：入学後すぐにSGH（スーパーグローバルハイスクール）に高等部が指定されたと知り、それに付随してカンボジアへのフィールドワークへ参加できる機会があると知り応募したのが始まりです。

2. 印象に残っている高等部時代の学内あるいは学外での活動

半田：高等部時代はどんなことにも挑戦しようという思いのもと、学内、学外問わず多方面の活動に参加していました。その中でも特に印象的だったのは、学内のESS（English Speaking Society）での活動です。私は国際協力に関心を持ったことから、英語についても興味を持ち、高校1年時より、ESSという英語でのコミュニケーションを日常的に行う部活動に参加していました。元々英語が得意というわけではなかったのですが、顧問の先生方のご指導のもと、英語スピーチコンテストやディベートコンテストに出場していくうちに英語力が自然に身についていき、外国人の方と英語でコミュニケーションを図れるようになりました。継続的な努力で自分を変えることができたというのは大きな成功体験になりましたし、何より英語というツールを使うことで文化や考え方の異なる世界中の人々と交流できるようになったということを実感し、自分の世界を何倍にも広げることができました。

奥平：グローバル・スタディを通じて訪れた国や企業、学外からの講師や先生、また同世代の学生と出会えたのが最大の財産であり収穫です。私が高等部時代、学友会長（生徒会長）を務めていたこともあり、学外の生徒と話す機会が多くありました。高校三年生の時に静岡県で行われたIBM主催のヤング天城会議では、全国津々浦々から集まった高校生たちと二泊三日寝食を共にしました。その中で、勉学に対する姿勢や世界を俯瞰する優れた洞察力はもちろん、自分はどういう人間で何がアピールポイントなのかを明確に自己分析できている人がいて衝撃を受けました。

3. 高等部でSGH・GLPを通して学んだこと、成長したこと

半田：GLPは私に問題意識を育むという点で非常に貴重な機会を与えてくれました。高校1年時にGLPの一環としてカンボジア訪問の機会をいただいたことがその後社会に対する問題意識を持つ大きなきっかけになりました。私は中学生以来、途上国の社会格差について問題意識を持っていましたが、その格差というものを実際に目撃した

ことはなく、本やテレビを通しての情報でしか触れることができていませんでした。しかし、実際にカンボジアを訪れ、地雷源が残る現状や栄養不足で苦しむ子供達の実態を目の当たりにし、世界の不平等さを心から痛感させられました。生まれた国、時代が違うというだけで同じ人間の生活、人生にここまで差があっていいのかと強い衝撃を感じたことを今でも覚えています。そのカンボジアへの訪問後、私は社会、世界を動かす大きな力、社会システムについて大きな疑問を持つようになりました。南北問題に代表される先進国優位な国際システム、富裕層に有利な教育システムなど意識してみると、自分が暮らす世界は極めて恣意的なシステムで構成されているということを感じずにはいられませんでした。そして、その問題意識を元に、GLPでは難民問題をテーマにMeal for Refugeesという支援活動を企画し実行するという経験に恵まれました。社会は極めて不平等に設計されているという問題意識、そしてその問題意識を元に実際に自分でアクションを起こすという経験は卒業から２年経ち、大学に進学した今でも自分を支える軸となっています。

奥平：日本のみならず世界を民族や文化、宗教、歴史を起点とする指標から分析し、そこから国の発展段階を考察して発表するという力がグローバル・スタディで身についたと思います。自分にしかない問題意識を育み、それに対してどういったアプローチがあるかを考えることは大学での学びを先取りできたのと同義で非常に今も役立っています。

4. 大学での学びや活動との関連性

半田：私は総合政策学部という学際性を重視し、文理を問わない複数の学問を横断的に学べる学部に進学し、日々研鑽を重ねております。大学生活を振り返ってみると、1年次は高校時代の問題意識から国際的な平和維持を目的にする学生団体で団体活動に従事したり、社会システムを理解するために社会経済史を専攻するゼミに入って勉強を重ねておりました。2年に進級した現在は、より具体的に社会に対して変化を与えたいと考え、EBPMという科学的なデータを元に政策提言を行う領域を研究するゼミに入り、論文執筆活動に精を出しています。前学期は移民政策について科学的に検証し、その是非を研究するという論文を発表することもでき、高校時代に行った難民問題への活動を学問からアプローチすることができたのではないかと考えております。また、並行して経営戦略を考えるというゼミにも参加させていただいており、政策という公共的なアプローチだけでなく、民間から社会に変化を起こす手法はないかということにも関心を持って日々学んでおります。高校時代にGLPで培った社会システムへの疑問という問題意識が政策立案、経営戦略という文脈に姿を変え、大学でも勉学につながっています。

奥平：2018年度秋より5ヶ月間、マレーシアにあるUniversity Tunku Abdul Rahman（UTAR：ラーマン大学）へ国際社会貢献活動として参加しています。座学で得た知見やコンピュータに関連する基礎技能を実社会で実践し、多様なバックグラウンドを抱えた人と生きる素養が育めたと感じています。

5. 将来に向けて高校（大学も含む）での学習をどう生かすか

半田：将来私は官民の領域を問わず、自らが中心となって社会に対して変化を作り出せる人材を目指したいと考えています。抽象的な表現ですが、自ら生きるこの世界に対して自分なりの役割を見つけ、最大限の貢献ができるように自己研鑽を続けていくつもりです。その際に必要になってくるのは、何のために今自分は学んでいるのか働いているのかという根源的な疑問に対する自分なりの回答だと思います。私にとってはその回答がGLPで得た問題意識です。理不尽な社会システムを理解し、それを少しでも改善していく。そのためにカンボジアでの原体験を心に刻み、日々精進していきたいと考えております。

奥平：高校では多岐にわたるトピックスについてインプットを重ね、大学ではそれをアウトプットしていく過程にあります。マレーシアという多民族多宗教な国家へ派遣されることもあって、現在はそれらがマレーシア国内の外国人雇用や労働環境にどのような影響を与えているのか、また日系企業の進出時における課題や障壁について考えています。国連のILOが”Decent Work（働きがいのある人間らしい仕事）”を掲げている通り、私は平等でやりがいのある働き方を一人一人が実現した社会を作れるよう、経済経営にかかる領域についても学習を進めます。

2017年度　卒業生（大学1年生）

・関西学院大学　国際学部　廣野 裕香　　・関西学院大学　国際学部　三木 まりな
・関西学院大学　文学部　松永 晶太　　・関西学院大学　国際学部　牛場 裕介

1. グローバル・スタディを受講したきっかけ

松永：私がグローバル・スタディを受講した一番の理由は、高校で何か「他人とは違うこと」がしたかったことです。中学の時から陸上部に所属して、高等部でも陸上をしていましたが、部活だけをしていても高校生活を無駄にしてしまうと感じていました。そう思いながら高等部に入学すると、ちょうどGLPの募集がありました。その連絡だけを聞いても全く興味はありませんでしたが、友人が「説明会に行くからついてきて」と頼んできたので、行くことになりました。そこで初めて、GLPの活動内容の詳しい説明を聞きました。英語での授業があったり、フィールドワークがあったりと、少しずつ気になり始めました。英語が比較的得意だったのと、日本以外の国々の文化や途上国の現状などの国際的なことがらに興味があったので、GLPに参加することを決めました。

廣野：将来、世界で活躍できるような人になりたいという漠然とした目標や世界への興味はありましたが、それまで世界の現状や様々な問題について調べたり学んだりすることは少なく、ほとんど何も知らない状態でした。そこで、グローバル・スタディというプログラムがあることを知り、世界について知るチャンスだと思い、まず説明会や体験授業に参加しました。グローバル・スタディについて説明を受け、様々な講師の方から国際問題や他国の文化について学んだり、話を聞くだけではなく他国の方々と交流したり実践的な学びができるところに魅力を感じました。このようなプログラムに参加し、学ぶことは世界についての理解を深め、漠然としていた自分自身の将来の目標が明確になるのではないかと思い、受講することを決めました。

三木：中学三年生の時にニュージーランド研修旅行に行ったこと、そして中学生の頃から洋楽やK-popなど邦楽でないは音楽に関心を持っていたので、そのうちに日本だけでなく世界の情勢や流れについて興味を持ちました。グローバルという言葉は聞いたことはあるけれど実際どういうものなのか、中学生の頭ではまだ理解しきれておらず、GSの授業を受講すればそういった知識を身に着けることが出来るのではないかと考えました。また、今まで自分から立候補して参加するということもなかったので自分にとって初めての試みでした。高校に入って新しいことに挑戦してみたいと考えていたので、いまでもGSに参加したことは自分のした中でよいチャレンジだったと思います。

牛場：高等部に入学した当時、カンボジアの海外フィールドワークがあるというのを聞いて、受講しようと思いました。また、今海外では「なに」が起こり、それが「なぜ」起こっているのか、ということを学べたらと思ったこともきっかけの一つです。

2. 印象に残っている高等部時代の学外あるいは学内での活動

松永：一番印象に残っているのは、GLPで行ったカンボジアです。初めての途上国ということもあって、驚くことばかりでした。行く前までは、「貧しい、汚い」などの暗いイメージしかもっていませんでした。しかし現地に行ってみて、それがただの偏見で、日本よりいいところも山ほどあることを知りました。現地の村では、清潔な水がなかったり電気が通っていなかったりなど、物質的には恵まれていないことも多くありました。そんなことは行く前から知っていましたが、「恵まれてないなら幸せじゃないだろう」と勝手に決めつけていました。現実はそうではなく、村の子供たちは常に笑顔で楽しそうに過ごしていました。それに加えて、「もっと勉強したい」「〇〇になりたい」など、将来の希望にあふれていました。日本のことを考えてみれば、このように考える人は少ないと思います。基本的にはモノには困らない日本人とどちらが幸せなのか、改めて考えさせられました。

廣野：まず、印象に残っているのはEUIJ関西シンポジウムです。私はパネリストではなくフロアとして参加し、とても刺激を受けたことを覚えています。高校1年生の冬に参加した時のシンポジウムのテーマは「EUの難民政策の経験をふまえて日本の難民支援のあり方について考える」でした。パネリストの方々や討論に積極的に参加していたフロアの方々は、難民や日本の難民受け入れの現状について理解を深めているだけでなく、日本はどのような支援をすればよいかなど自分なりの考えを持っていました。また、難民支援の成功事例と比べて問題点を考えたり、そ

の考えはしっかりと分析されたものでした。このシンポジウムに参加した後、ただ教えてもらって学ぶだけではいけないと感じ、より深く知るために自分でその問題について調べてみたり、自分なりに問題の解決策を考えてみたりするようになりました。このように私のグローバル・スタディでの学びの姿勢が変わった活動だったのでEUIJ関西シンポジウムはとても印象に残っています。次に印象に残っているのは、グローバル・スタディでの3年間の学びを活かして文化祭でイベントを行ったことです。私たちはTABLE FOR TWOという食の不均衡の問題の解決に取り組んでいる団体に寄付をするために、飲み物の販売を行いました。自分たちで企画を考え、どのような企画ならTABLE FOR TWOの活動理念に沿うものになるか、どのような物なら来場者の方に買ってもらいやすく、国際問題について知ってもらうきっかけになるかなどグループで何度も話し合いを重ねました。結果、私たちが考えていた以上に物が売れ、寄付金が集まりましたが、国際問題について知ってもらうという目標はうまく達成できず、世界の問題解決のために行動を起こすということの難しさを感じたと共にこれからもそのような活動をしていきたいという思いが強くなった活動でした。

三木：印象に残っている活動は、カンボジア研修旅行とMeal For Refugeesです。まず、カンボジア旅行ですが、初めて訪れた日本以外のアジア圏の国でした。美しく壮大なアンコールワット遺跡と、その周辺で外資系の援助もあって発展している都会部分と、一歩外れると子供たちが教育さえ満足に受けられない農村部と、すべてがそこに存在していてとてもカオスだなという印象を受けました。カンボジアにいた子供たちもかなり印象的で、私たちが訪れた学校の子どもたちは日本よりも学ぶ環境が悪かったり、家庭環境によっては学校を続けられないけれど、どの子も目が輝いていて、その学校ではいじめがないということにも驚かされました。一方で遺跡の近くやクルーズがある川など観光客が集まる場所で見た物乞いの子供たちや、親に連れられて物乞いに参加させられている子どもたちの目は光が失われているように感じました。直接自分の目で教育が子供に何を与えるのかを見たような気がします。もうひとつのMeal For Refugeesですが、初めて大きなプロジェクトを自分が表立って行うこととなったのでとても印象に残っています。GS三年目に入り、今まで吸収してきた情報や知識をアウトプットするという目標をもとに、私の一つ上の先輩が始めたMeal For Refugeesを受け継いだわけですが、まず日本にいる難民の方たちについての知識、そこからどうやって高校生に興味を持ってもらうか、そのための作戦・戦略を考えることや、さまざまな協力してくださる方々とコンタクトを取ること、一緒にプロジェクトを動かしてくれている同級生をまとめること……。考えることがたくさんあってたぶん間違いもたくさんしたと思いますが、今後の人生でとても役立つ経験だったと今も心の底から思っています。

牛場：学内であれば、GLPでカンボジアに行ったこと、これは自分にとって大きな経験となりました。実際に現地の子供たちと触れ合ったり、遺跡修復現場をみたりすることによって、様々なことを考えることができました。また、３年次の学友会活動も自分にとって「主体性」を追い求めるいい機会となりました。学外の活動では、２年次の「西宮スポーケン姉妹都市交換プログラム」が大きな挑戦となりました。実際に、アメリカの生徒を家に招き入れ、６週間お世話をする。また、自分もアメリカに渡航し、現地の学校に通う。これらを通して語学力だけではなく、異文化観察力、コミュニケーション能力なども身についたと考えています。

3. 高等部でSGH、GLPを通して学んだこと、成長したこと

松永：一番自分の中で成長したなと思っていることは、コミュニケーション力です。GLPの活動の中では、班やグループ活動が多くありました。その中で自分の意見を伝えて、他人の意見を聞き、わからないことがあれば質問するというのを何回もおこないました。中学時代は、仲の良かったごく身近な友人たちとだけで楽しくやっていればよかったので、そのような不特定多数、しかも同じクラスにもなったことのない異性や出身国の違う人とコミュニケーションをとる機会などありませんでした。もちろん、そのため、班活動などでまったく発言をしませんでしたし、まじめに取り組まない時すらありました。しかし、GLPの活動では、そのような活動が非常に多かったため徐々に人前で話すことに抵抗がなくなり、ほとんど誰とでもコミュニケーションを取れるようになった気がしています。知識の面では、国際的な本当に様々なことがらについて、多くのことを知ることができたと思っています。例えば、それまで「難民」という単語くらいしか知りませんでしたが、何が原因で、どんな生活をしているのかなど、詳しいことまで知ることができたのも大きなことだったと思います。

廣野：国際問題や世界について、普段の生活では得られないような様々な知識を得ることができたように感じます。しかし、ただ知識を得るだけではなく、どのような解決策があるのか、どのようなことが自分にできるのかを考えられるようになったと思います。初めの頃は貧困問題や難民問題について学んでも自分の今いる環境は恵まれているので大切にしていきたい、恵まれた環境を活かしてもっと色々なことを学びたいというような感想ばかり持っていましたが、学びを重ねるにつれてその考えは変わっていきました。学んだことを活かして世界のためにできることは何か、国際問題は複雑で簡単に解決できるような問題ではないけれど自分なりに解決策を考えていくようになりました。また、日本のような先進国には関係がないと考えてしまいがちな飢餓や貧困などの問題にも実は先進国が関係しているなど、今まで思ってもみなかったような事を多く学びました。そして、日常生活で少しフェアトレード商品を意識してみたり、世界のニュースに関心を持つようになったり意識の変化もあったように思います。

三木：まず、基本のスキルとしてもかもしれませんが、英語の文献を読むことになれること、プレゼンテーションの仕方、ディスカッション・ディベートについてなど大学ひいては将来の仕事にもつかえるスキルを磨かせていただいたのではないかと思います。そして、授業に先生だけでなく様々な人が呼ばれたので、多角度的な視野や物事の切り込み方を学んだ気がします。もちろん、グローバリゼーションが進む世界についての基礎的な知識、特に私たちの三年間は移民・難民などの話題性のあることについて深く学べたのではないかと思います。カンボジア研修旅行から帰って学んだことは自分が恵まれた環境にいるということ、特にカンボジアには子供をだしに使って観光客からお金をもらう母親もいるのに、私の母は一度も投げ出さずに私を育ててきてくれたことにとても感謝を覚えました。今でもそれは覚えていますし、一生覚えることだと思います。私が成長したことは、教養が深まったこと、大学・社会で使えるスキルを身に着けたこと、そして一生の教訓を覚えたことだと思います。

牛場：特に、GLPという選抜形態のクラスに所属していたので、常に「リーダー」になるためにはということを念頭に置いて活動していました。プレゼンテーションが多くあったため、人前でわかりやすく話す能力がついたと思います。また、様々なゲストスピーカーのお話も自分の価値観や考え方を変えてくれるきっかけにもなりました。

4. 大学の学びや活動との関連性

松永：一年生のうちは、卒業のために必要な科目の履修が多く、心理学系の科目ばかりです。なので、授業の中ではGLPの活動に直接つながるような科目はほとんどないのが現状です。しかしながら、来年度以降に「国連・外交プログラム」という副専攻のプログラムに参加したいと考えています。このプログラムは、指定された国際関係ついての科目を履修し、国際ボランティアなどの海外経験を得るというプログラムです。まだ申し込みの段階で、20人という枠があるため、参加できるかどうかはわかりませんが、参加することができるのならば頑張りたいと思います。学業面以外で言えば、今学期は留学生の日本語パートナーをしています。週に一回程度、日本語が苦手な留学生と日本語の練習の手伝いをしています。その活動は、国際的な活動というよりは、日本語を改めて見つめなおす良い機会を与えてくれたなと思っています。このように、まだ少ないものの、少しずつGLPで学んだようなことを活かした活動や勉強をしていこうと思っています。

廣野：大学は国際学部に進学し、引き続き国際問題や他国の文化について学びを深めたり、これまではあまり深く学んでこなかったような他国の政治や経済、宗教について学んだりしています。1年間かけて自分の興味のあるテーマについて調べてレポートを書く授業では、テーマを貧困問題に設定し、レポートを書き進めています。高等部での学びがなければ貧困問題に関心を持つこともなかったし、高等部での学びがあるので1からではなく一歩進んだところから、より深い調べ学習ができているように感じます。また、他国の政治や経済、宗教について学ぼうと思ったのも高等部での活動がきっかけです。国際問題は様々な問題が関係していて、1つの原因を解決しても問題が解決できるわけではないことを知り、政治や経済、宗教はどの問題でも関わっているように感じたので、大学ではそれらを学ぶことを決めました。また、異なった文化を持つ人と交流したいという思いが高等部での学びを通してより強くなったので、そのような活動も少しずつしています。今は、主に日本に留学に来ている方々とさまざまなテーマについて話し合ったり、日本語や日本の文化について教えたりする活動をしていますが、これからは自分自身が海外に行って他国の文化に触れ、現地の方々と交流してみたいと考えています。

三木：今自分が国際学部に進学したことはひとえにGSを受けていたからです。GSの授業ではグローバルなことについて学ぶわけですが、更に国際的な分野のなかでも教育や女性に関する問題について興味を持つようになりました。先ほどから述べているようにカンボジアの経験から母に感謝するようになったわけですが、男女平等や、母のよう

に働く女性がどのようにすれば子育てと仕事を両立できるのか、諸外国はどのようにそれに対して対策を練っているのかなどに興味を持ち始め、今の学部に進学することを決めました。留学先でも少し内容は離れますがジェンダーの授業などを取る予定です。GSでの学びがあるからこそ今の国際学部の授業についていけているのかもしれないですし、特に私の学部の特色かもしれませんが、私の学部は他学部の先生方が集まってできている学部なので、たくさんの講師の方が来てくださるGSで受けていた授業の延長線上にあるといっても過言ではないと思います。

牛場：国際学部に所属しているので常に「英語」でどのようにコミュニケーションするかを考えさせられます。また、文化論の授業も履修しており、異文化について、例えば異文化相対主義などを学ぶことで「偏見」を無くし、様々な国に行ってそれを観察してみたいという気持ちを高めています。やはりこの文化論を履修するきっかけになったのは高校時代のグローバル・スタディでの学びが少なからず影響していると考えます。

5.将来に向けて高校（大学も含む）での学習をどう生かすか

松永：高校でのカンボジアでの経験やオーストラリアでの留学の経験を活かして、どんな分野かはわかりませんが、国際的な舞台で働きたいと考えています。途上国や世界のために、国際機関で働くのも良さそう、心理学の研究者になるのも良さそう…と結局自分は何が一番したいのかはまだ分かっていません。大学での生活はあと3年半くらいなので、その生活の中で何がしたいのかを決めていこうと思います。

廣野：将来、世界を少しでもよくするような、人の役に立てるような活動や仕事をしたいと考えています。これまで学んだ知識を活かすのはもちろんのこと、問題を解決しようと考える力、問題を捉える力を活かして目標が達成できるように活動していきたいと考えています。問題には原因が複数あることが多く、1つ1つ丁寧に調べ、何が必要とされているのか見極める必要があることを学んだので、何か解決しなければならない問題が起こった時はまずその問題の現状や原因を調べ、自分ができることではなく、その場に必要とされていることを的確に判断して、解決に向けて動いていきたいと思います。また、これからグローバル化が進み、日本国内でも異なる文化や習慣を持つ人との関わりが増えてくると思うので、高校や大学で学んだ他国の文化や習慣、異なる文化を持つ人たちと交流した経験を活かしていきたいと考えています。社会において問題や衝突が発生する原因の1つとして文化や習慣が異なることが挙げられていたこともあったので、問題が発生しないように何か活動していけたら良いなと考えています。

三木：専門的なことも今後研究していくと思いますが、出来るだけ幅広く知識を深めていきたいと思っています。私が思うに、仕事でつかえる大学で学んだ知識というのはとても限られていて、どちらかというと大学や高校で勉強したりプレゼンテーションをしたり研究するということが社会に出た時のための練習となっているのではないかと思っています。そういった面で、GSでも国際学部でも課題やプレゼンテーションたくさんの機会において鍛えられている実感があるのでこのまま努力を怠らず、更にスキルを磨いて、社会に出ても恥ずかしくないようにしたいとは考えています。もう一つは高校や大学での学びを通して、人生観を決めたいと思っています。人生観というのは、これから仕事をしたり将来いろいろなことをしていく中で、自分の軸となる考え方や目標ということです。今のところ、女性がより働き易い社会にしたいというのが私の軸となっている考えですが、今後もっと様々な授業を取ったり、留学やボランティアなどいろいろな経験を通して見定めていきたいと考えています。

牛場：将来、どのような仕事に就きたいのか、まだイメージがわかないのですが、常に「世界」と密に関われるようなことをしたいと考えています。そのためにも、積極的に学生のうちに海外に出て、ボランティア活動などを通して知識見聞を深め、また、独自のコミュニティを作ってそれを将来役に立たせようと考えています。

研究開発の評価

評価手法の開発とその結果

(1) GPS-Academic®による評価

①内容

関西学院高等部は「国際化重点大学との高大連携による実践的解決能力の育成」をテーマにSGHプロジェクトに取り組んできた。総合的人間力の高いグローバル人材を育成していくためには、真のコミュニケーション能力、批判的思考力、問題解決能力を育んでいくことが必要である。これらの能力は、日頃実施される定期考査や一般的な外部英語テスト等で測ることは難しく、また数値化しにくいものである。その中で、批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力の3つの思考力を測定するBenesseのGPS-Academic®は、まさに本校が生徒に伸ばしてほしい力を測るテストであり、実施するに至った。高等部では、2015年度に初めて、当時の高校2年生を対象にGPS-Academic®モニター調査受験をする機会を得て以来、選抜生徒対象のGLP(Global Leader Program)の生徒達に実施してきた。今年度の高校3年生(Global StudyⅢ)が初めて、3年間GPS-Academic®を継続して受験した学年であり、以下がその結果である。

Global Study Ⅰ(高1- 2016)

高１	思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
	評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
	人数	38			38			38		
		単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
	S	0	0%	0%	2	5%	5%	0	0%	0%
	A	14	37%	37%	26	68%	74%	11	29%	29%
	B	20	53%	89%	10	26%	100%	23	61%	89%
	C	4	11%	100%	0	0%	100%	4	11%	100%
	D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	38			38			38			38			38			38		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	7	18%	18%	0	0%	0%	5	13%	13%	0	0%	0%	3	8%	8%	0	0%	0%
A	15	39%	58%	0	0%	0%	21	55%	68%	10	26%	26%	8	21%	29%	3	8%	8%
B	11	29%	87%	16	42%	42%	10	26%	95%	23	61%	87%	25	66%	95%	22	58%	66%
C	5	13%	100%	21	55%	97%	2	5%	100%	5	13%	100%	2	5%	100%	9	24%	89%
D	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	4	11%	100%

自己評価

■思考力別

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
平均値									
人数	34			34			34		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	5	13%	15%	12	32%	35%	4	11%	12%
3以上4未満	21	55%	76%	17	45%	85%	19	50%	68%
2以上3未満	8	21%	100%	4	11%	97%	11	29%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
平均値															
人数	34			34			29			28			28		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	1	3%	3%	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	2	5%	6%	12	32%	38%	4	11%	14%	4	11%	14%	3	8%	11%
3以上4未満	24	63%	76%	14	37%	79%	18	47%	76%	18	47%	79%	19	50%	79%
2以上3未満	8	21%	100%	6	16%	97%	7	18%	100%	6	16%	100%	5	13%	96%
1以上2未満	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	1	3%	100%

高1

社会とのかかわり	全体	
人数	39	
	単純人数	単純人数%
お金・経済の動きを探る	2	5%
世界を舞台に活躍する	8	21%
福祉を通じて人を支援する	1	3%
人の成長を助ける	6	15%
デジタル技術を使って社会を支える	1	3%
法のもとに権利を守る	1	3%
メディアを通じて情報を伝える	2	5%
コミュニケーションする	7	18%
街づくり・空間づくりをする	3	8%
エンジニアとして新しい技術を生み出す	1	3%
感性を生かす	1	3%

Global StudyⅡ(高2 -2017)

高２

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
人数	39			39			39		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	0	0%	0%	1	3%	3%	2	5%	5%
A	10	26%	26%	18	47%	49%	20	53%	56%
B	29	76%	100%	19	50%	97%	17	45%	100%
C	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	39			39			39			39			39			39		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	3	8%	8%	0	0%	0%	4	11%	10%	0	0%	0%	3	8%	8%	0	0%	0%
A	8	21%	28%	2	5%	5%	15	39%	49%	5	13%	13%	11	29%	36%	17	45%	44%
B	23	61%	87%	23	61%	64%	16	42%	90%	26	68%	79%	21	55%	90%	18	47%	90%
C	5	13%	100%	14	37%	100%	4	11%	100%	8	21%	100%	4	11%	100%	4	11%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

自己評価

■思考力別

高2

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
平均値									
人数	39			39			39		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	8	21%	21%	12	32%	31%	4	11%	10%
3以上4未満	22	58%	77%	17	45%	74%	26	68%	77%
2以上3未満	8	21%	97%	8	21%	95%	9	24%	100%
1以上2未満	1	3%	100%	2	5%	100%	0	0%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
平均値															
人数	39			39			39			39			39		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	6	16%	15%	13	34%	33%	12	32%	31%	11	29%	28%	11	29%	28%
3以上4未満	23	61%	74%	16	42%	74%	19	50%	79%	15	39%	67%	18	47%	74%
2以上3未満	9	24%	97%	8	21%	95%	7	18%	97%	13	34%	100%	8	21%	95%
1以上2未満	1	3%	100%	2	5%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%	2	5%	100%

高２

社会とのかかわり	全体	
人数	39	
	単純人数	単純人数%
福祉を通じて人を支援する	1	3%
コミュニケーションする	6	15%
メディアを通じて情報を伝える	4	10%
世界を舞台に活躍する	8	21%
社会の秩序を保つ	1	3%
お金・経済の動きを探る	4	10%
街づくり・空間づくりをする	2	5%
人の成長を助ける	3	8%
感性を生かす	5	13%
動物・自然にかかわる	2	5%
エンジニアとして新しい技術を生み出す	1	3%
デジタル技術を使って社会を支える	1	3%
保健・医療の現場をサポートする	1	3%

Global StudyⅢ(高3 -2018)

■思考力　総合評価

高３

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
人数	38			38			38		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	1	3%	3%	0	0%	0%	1	3%	3%
A	20	53%	55%	17	45%	45%	28	74%	76%
B	17	45%	100%	20	53%	97%	9	24%	100%
C	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

■思考力　観点別評価

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	38			38			38			38			38			38		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	6	16%	16%	0	0%	0%	6	16%	16%	0	0%	0%	6	16%	16%	0	0%	0%
A	13	34%	50%	5	13%	13%	12	32%	47%	6	16%	16%	21	55%	71%	12	32%	32%
B	17	45%	95%	32	84%	97%	18	47%	95%	23	61%	76%	11	29%	100%	26	68%	100%
C	2	5%	100%	1	3%	100%	2	5%	100%	9	24%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

自己評価

■思考力別　点数

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
平均値									
人数	38			38			38		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	1	3%	3%	0	0%	0%
4以上5未満	11	29%	29%	19	50%	53%	10	26%	26%
3以上4未満	22	58%	87%	16	42%	95%	19	50%	76%
2以上3未満	5	13%	100%	2	5%	100%	9	24%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
平均値															
人数	38			38			38			38			38		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	3	8%	8%	1	3%	3%	2	5%	5%	0	0%	0%
4以上5未満	12	32%	32%	16	42%	50%	16	42%	45%	10	26%	32%	13	34%	34%
3以上4未満	20	53%	84%	18	47%	97%	16	42%	87%	21	55%	87%	18	47%	82%
2以上3未満	6	16%	100%	0	0%	97%	5	13%	100%	5	13%	100%	7	18%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

高３

社会とのかかわり	全体	
人数	38	
	単純人数	単純人数%
人の成長を助ける	7	18%
メディアを通じて情報を伝える	2	5%
コミュニケーションする	5	13%
世界を舞台に活躍する	9	24%
街づくり・空間づくりをする	2	5%
お金・経済の動きを探る	3	8%
動物・自然にかかわる	1	3%
社会の秩序を保つ	2	5%
法のもとに権利を守る	1	3%
感性を生かす	4	11%
人を治療する	1	3%
保健・医療の現場をサポートする	1	3%

【GSⅢ（高3）の3年間の分析】

「批判的思考力」については、自身の考えに対して批判的に捉えられるかが重要になっており、なぜ自分はそのような考えになるのか、なぜそう思うのかを自問自答する力である。総合評価で見た際、この批判的思考力について、3年間で総合評価は向上している結果となった。

評価項目の中で、「情報を抽出し吟味する」及び「論理的に組み立てて表現する」力の構成に分かれるが、どちらの項目についても上昇していることが分かる。ただ、項目のバランスを比較した場合に、論理的に組み立てる力の方が全体的に低い傾向にある。

情報収集、内容理解力は強い一方で、それを活用して論理的に説明する答案が少なかったようである。情報収集・理解・推察に加えて、そちらを上手く活用する力を育んでいくことが今後の指導の上の重要なポイントといえる。

次に「協働的思考力」については、選択問題の「他社との共通点・違いを理解する」については、会話文などの日常的な場面設定の為、正解を選びやすい傾向にある。一方で「社会に参画し人と関わりあう」については、社会題材で自分の考え、立場を持ちながら他社との違いを認識し記述する問題であり、自身の考え、他者視点など、一つの視点から問題の解決策を提案することができ、より幅広い事柄まで視野を広げている回答も一定数みられたようである。

さらに「創造的思考力」については、選択問題で問われる「情報を関連付け・類推する」力においては、問題を特定し比較検証する答案、他の事例に応用する回答が目立ったようである。また、より幅広い教養の活用、情報の成り立ちや背景を踏まえた解決策を選択する回答も一定数みられた。一方で、記述問題である「問題を見出し解決策を生み出す」については、問題点を把握し解決するための条件を記載する答案が多かった一方で、解決する為のすべての条件を記載した答案も一定数みられた。ただ3年間で、どちらの項目についても上昇した結果が得られたのは、3年間にわたるGGPやGLPの課外授業の中で、国内外フィールドワーク、各種国際交流プログラムへの参加、大学からお招きした先生方の講義を受けてきたことが影響していると考えられる。

2018年度 Global Study Ⅰ(高1)

■思考力　総合評価

高１

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
人数	33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数 %	累積人数%
S	1	3%	3%	0	0%	0%	1	3%	3%
A	17	52%	55%	10	30%	30%	16	48%	52%
B	14	42%	97%	22	67%	97%	15	45%	97%
C	1	3%	100%	1	3%	100%	1	3%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

■思考力　観点別評価

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	33			33			33			33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	5	15%	15%	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%	5	15%	15%	0	0%	0%
A	14	42%	58%	3	9%	9%	13	39%	39%	4	12%	12%	11	33%	48%	5	15%	15%
B	10	30%	88%	24	73%	82%	18	55%	94%	16	48%	61%	16	48%	97%	25	76%	91%
C	4	12%	100%	6	18%	100%	2	6%	100%	13	39%	100%	1	3%	100%	2	6%	97%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	1	3%	100%

自己評価

■思考力別

高１

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
人数	33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	8	24%	24%	10	30%	30%	5	15%	15%
3以上4未満	16	48%	73%	17	52%	82%	16	48%	64%
2以上3未満	9	27%	100%	6	18%	100%	11	33%	97%
1以上2未満	0	0%	100%	0	0%	100%	1	3%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
人数	33			33			32			32			32		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	1	3%	3%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	7	21%	21%	12	36%	36%	9	27%	31%	6	18%	19%	6	18%	19%
3以上4未満	19	58%	79%	15	45%	82%	16	48%	81%	16	48%	69%	18	55%	75%
2以上3未満	6	18%	97%	6	18%	100%	6	18%	100%	10	30%	100%	7	21%	97%
1以上2未満	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	1	3%	100%

高1

社会とのかかわり	全体	
人数	33	
	単純人数	単純人数%
人の成長を助ける	2	6%
メディアを通じて情報を伝える	1	3%
コミュニケーションする	5	15%
世界を舞台に活躍する	7	21%
街づくり・空間づくりをする	1	3%
お金・経済の動きを探る	2	6%
動物・自然にかかわる	0	0%
社会の秩序を保つ	0	0%
法のもとに権利を守る	1	3%
感性を生かす	2	6%
人を治療する	1	3%
保健・医療の現場をサポートする	0	0%
福祉を通じて人を支援する	8	24%
デジタル技術を使って社会を支える	1	3%
エンジニアとして新しい技術を生み出す	2	6%

【GSⅠ（高1） 分析】

入学して初めてGPS-Academic®を受験したGSⅠであるため、前年度との比較ができないが、GSⅡやGSⅢの生徒達が高1の際に受験した時の結果と比較すると、協働的思考力においてAゾーンが30%以下と低めであったが、批判的思考力、創造的思考力の分野においてはAゾーンが50%近くみられ高評価であった。全体的に見ても、全思考力の領域においてBゾーン以上であり、どの生徒達も平均的な思考力を備えているといえる。

自己評価の問題解決プロセス別の結果から、「情報の収集」と「整理・分析」で4以上は30%以上と高い割合がみられた。これはi-Padを全

生徒に導入した学年でもあり、多くの教科の授業でi-Padを用いて限られた時間内に情報収集を行い、意見をまとめて発表する作業を日常で行っていることが影響していると思われる。

GSのクラスは各学年、圧倒的に女子生徒の割合が高いものの、今年度のGSⅠの生徒達は少ない男子生徒達がうまく女子生徒と協働作業を行い、お互いにバランス良くリーダーシップを取り合っている。GSの課外授業への取り組みも非常に熱心であり、授業中も積極的に発言を行い、またグループワークの協調性も高い。今後、国内外の国際交流行事やフィールドワーク等に参加することにより、GSの授業で得た知識を現場での活動の中で生かしていくことが課題であると言える。

生徒達のアンケートにおいて、「世界を舞台に活躍する」ことを希望している割合が高く、GLPのプログラムが提供する国内外で体験できる国際交流プログラムを通して、世界の舞台を踏むための力を培っていってもらいたい。また「福祉を通して人をサポートする」ことを選んだ生徒達の割合も高い。カンボジア海外研修旅行に参加することにより、現地の貧困層の子供達に継続的な支援をするために、様々な活動を考え実際に行動に移したり、人のために役立てる人間になりたいという気持ちが生まれたという生徒達も多かった。

2018年度 Global StudyⅡ（高2）　2年間のGPS-Academic® 受験結果

Global StudyⅠ（高1 -2017）

高１

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
人数	33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
A	14	42%	42%	14	42%	42%	19	58%	58%
B	17	52%	94%	19	58%	100%	12	36%	94%
C	2	6%	100%	0	0%	100%	2	6%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	33			33			33			33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	3	9%	9%	0	0%	0%	4	12%	12%	0	0%	0%	2	6%	6%	0	0%	0%
A	11	33%	42%	3	9%	9%	12	36%	48%	2	6%	6%	7	21%	27%	14	42%	42%
B	15	45%	88%	19	58%	67%	17	52%	100%	22	67%	73%	21	64%	91%	11	33%	76%
C	3	9%	97%	11	33%	100%	0	0%	100%	9	27%	100%	3	9%	100%	8	24%	100%
D	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

自己評価

■思考力別

高１

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
人数	33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
4以上5未満	13	39%	39%	16	48%	48%	8	24%	24%
3以上4未満	16	48%	88%	16	48%	97%	16	48%	73%
2以上3未満	4	12%	100%	1	3%	100%	9	27%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
人数	33			33			33			33			33		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	0	0%	0%	1	3%	3%	1	3%	3%	2	6%	6%	1	3%	3%
4以上5未満	9	27%	27%	16	48%	52%	11	33%	36%	9	27%	33%	13	39%	42%
3以上4未満	19	58%	85%	15	45%	97%	17	52%	88%	13	39%	73%	15	45%	88%
2以上3未満	5	15%	100%	1	3%	100%	4	12%	100%	9	27%	100%	4	12%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

高1

社会とのかかわり	全体	
人数	33	
	単純人数	単純人数%
人の成長を助ける	5	15%
メディアを通じて情報を伝える	2	6%
コミュニケーションする	2	6%
世界を舞台に活躍する	9	27%
街づくり・空間づくりをする	1	3%
お金・経済の動きを探る	1	3%
動物・自然にかかわる	1	3%
社会の秩序を保つ	1	3%
法のもとに権利を守る	0	0%
感性を生かす	5	15%
人を治療する	1	3%
保健・医療の現場をサポートする	3	9%
福祉を通じて人を支援する	1	3%
デジタル技術を使って社会を支える	1	3%
エンジニアとして新しい技術を生み出す	0	0%

Global StudyⅡ(高2 -2018)

高２

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
評価項目	総合評価			総合評価			総合評価		
人数	34			34			34		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	0	0%	0%	0	0%	0%	0	0%	0%
A	14	41%	41%	11	32%	32%	16	47%	47%
B	19	56%	97%	23	68%	100%	18	53%	100%
C	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

■思考力　観点別評価

思考力	批判的思考力						協働的思考力						創造的思考力					
評価項目	情報を抽出し吟味する			論理的に組み立てて表現する			他者との共通点・違いを理解する			社会に参画し人と関わりあう			情報を関連づける・類推する			問題をみいだし解決策を生み出す		
人数	34			34			34			34			34			34		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
S	1	3%	3%	0	0%	0%	4	12%	12%	0	0%	0%	5	15%	15%	0	0%	0%
A	14	41%	44%	1	3%	3%	6	18%	29%	5	15%	15%	11	32%	47%	3	9%	9%
B	16	47%	91%	30	88%	91%	21	62%	91%	18	53%	68%	17	50%	97%	29	85%	94%
C	3	9%	100%	3	9%	100%	3	9%	100%	11	32%	100%	1	3%	100%	2	6%	100%
D	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

自己評価

■思考力別

高2

思考力	批判的思考力			協働的思考力			創造的思考力		
人数	34			34			34		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	1	3%	3%	2	6%	6%	0	0%	0%
4以上5未満	10	29%	32%	15	44%	50%	11	32%	32%
3以上4未満	17	50%	82%	13	38%	88%	17	50%	82%
2以上3未満	6	18%	100%	3	9%	97%	6	18%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%

■問題解決プロセス別

プロセス	課題の設定			情報の収集			整理・分析			まとめ・表現			振り返り・考えの更新		
人数	34			34			34			34			34		
	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%	単純人数	単純人数%	累積人数%
5	4	12%	12%	5	15%	15%	0	0%	0%	1	3%	3%	1	3%	3%
4以上5未満	5	15%	26%	15	44%	59%	11	32%	32%	11	32%	35%	12	35%	38%
3以上4未満	22	65%	91%	12	35%	94%	19	56%	88%	14	41%	76%	17	50%	88%
2以上3未満	3	9%	100%	1	3%	97%	4	12%	100%	8	24%	100%	4	12%	100%
1以上2未満	0	0%	100%	1	3%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%	0	0%	100%

高２

社会とのかかわり	全体	
人数	33	
	単純人数	単純人数%
人の成長を助ける	3	9%
メディアを通じて情報を伝える	2	6%
コミュニケーションする	4	12%
世界を舞台に活躍する	8	24%
街づくり・空間づくりをする	2	6%
お金・経済の動きを探る	2	6%
動物・自然にかかわる	2	6%
社会の秩序を保つ	0	0%
法のもとに権利を守る	0	0%
感性を生かす	5	15%
人を治療する	2	6%
保健・医療の現場をサポートする	1	3%
福祉を通じて人を支援する	1	3%
デジタル技術を使って社会を支える	0	0%
エンジニアとして新しい技術を生み出す	1	3%

【GSⅡ(高2) 分析】

GSⅡの学年は昨年度に引き続き、GSP-Academic®は２回目の受験となった。学年全体としての到達度をみると、昨年と同様に批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力の全てにおいて、最も人数の多い評価はBゾーンに集中していた。GSの授業を受け始めて2年目に入ったが、全体的に目立った伸びはみられず、逆に評価を下げている項目もある。GSⅡの「世界を学ぶ」という目標のもとで、大学教員による様々なテーマの専門的な授業を通して得た知識をもとに、学内から学外へ活動の現場に出ていく機会が確実に増えた。カンボジア海外フィールドワークやその後の合同研修会、模擬国連、One World Festival for Youthへの参加等、数多くの学外での活動に参加する機会に恵まれた。行動力など目に見える数値では測れない力が高まってきていると期待したい。

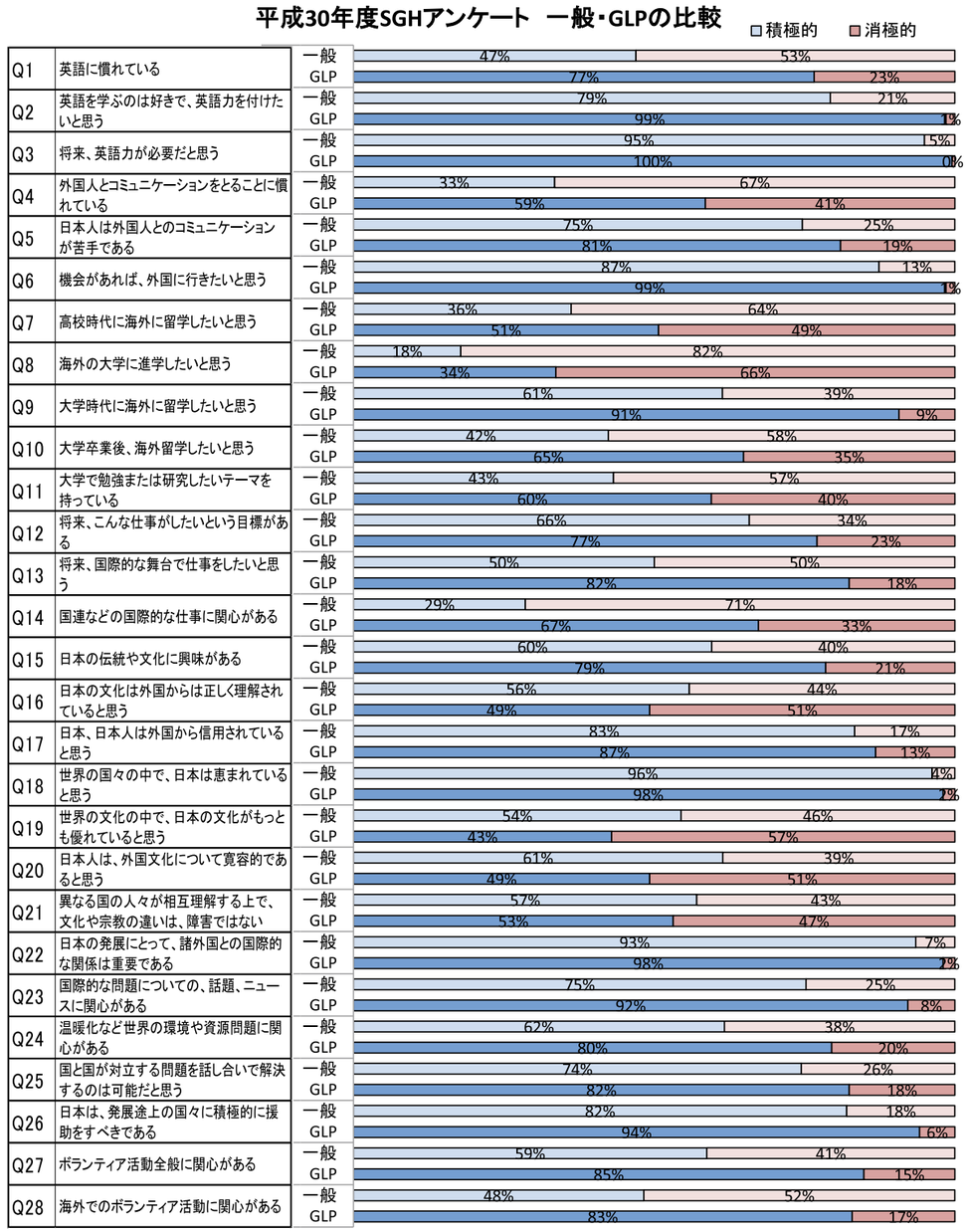
生徒の自己評価については、協働的思考力と創造的思考力において共にその割合は高まっており、生徒達が自信をつけてきているようである。GSの授業も2年目に入ったことより、協働作業に自然に取り組めるようになってきていることも影響していると思われる。問題解決プロセス別においても、GSの授業や活動において、様々な場面で情報検索をしてまとめて発表することが求められ、情報収集能力を高めている生徒達が増えてきているようである。

最後に、本校の人材育成目標である「総合的人間力」は、GPSにおける３つの思考力の測定で、生徒達に受験させることによりその力の伸びを調査・分析してきた。また「使命感」や「自国文化への理解」の分野については、試験で測れる範囲を超えており、これについてはこの５年間でSGHのプログラムで提供されてきた数々のセミナー、セッション・デイ、フォーラム、国内外へのフィールドワークへの参加させることでその力を育む機会が与えられてきた。SGH終了後に、これらのプログラムの多くに、生徒達は参加する機会を失うことになる。GPS-Academic®で測られる力を培う機会が減少する中で、次年度より学校としてどのようなかたちで、SGH終了後も生徒達に変わらない学習環境を提供していけるかを審議していく必要がある。

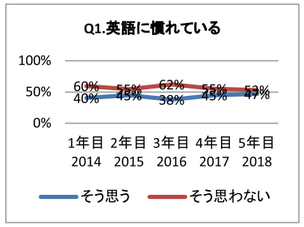
大学でも今後、学習成果の可視化が重要になってくるが、汎用的能力等を客観的に測定する評価テストとして、SGH終了後も継続して、選抜された生徒達のみならず、本校の全生徒に受験させることが望ましいと考える。それに伴い、時代の流れの中で、大学でそして社会において求められてくる「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」を育む授業を目指し、各教科の指導法も工夫していく必要がある。

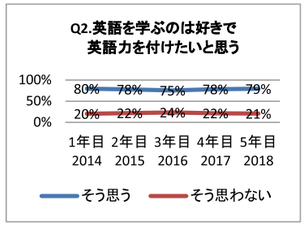
(2) 意識調査　SGHアンケート

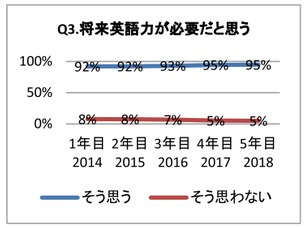
①全校生徒への意識調査については、平成30年5月と12月に全校生徒を対象に28問の設問をマークシート式で実施した。回答基準は、（1そう思う、2少しそう思う、3少しそう思わない、4そう思わない）の4段階とした。以下グラフでは、1そう思う、2少しそう思うを積極的回答、3、少しそう思わない、4そう思わないを消極的回答として、GLP選択者と一般生徒をそれぞれ集計した。

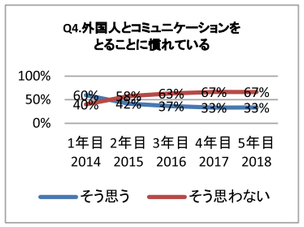


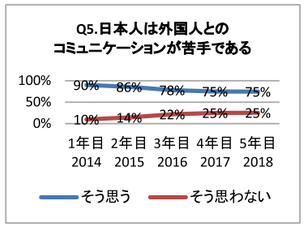
SGHアンケート　全校生徒　集計結果　5年間の推移

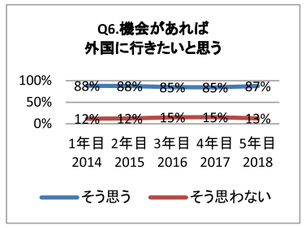


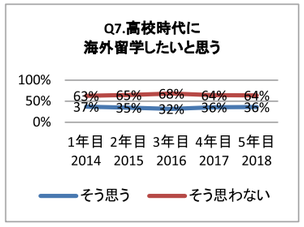


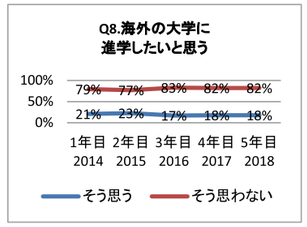


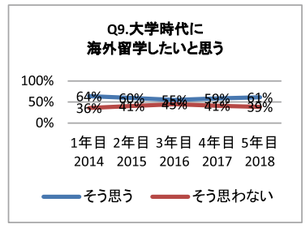


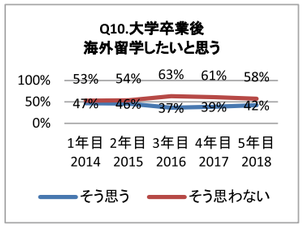


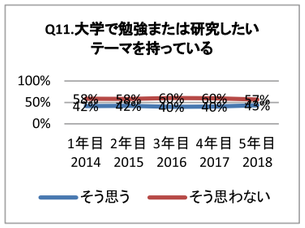


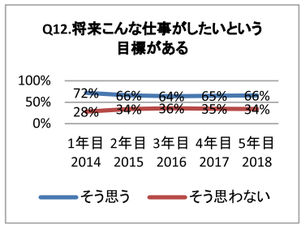


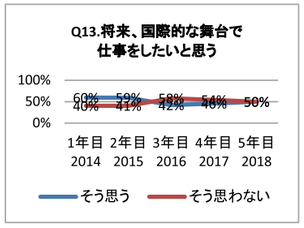


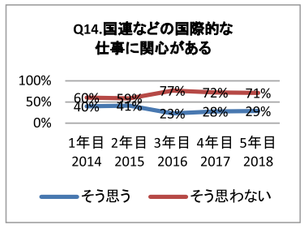


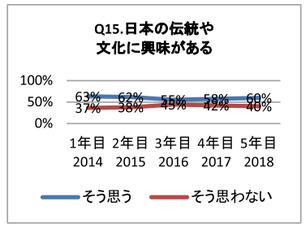


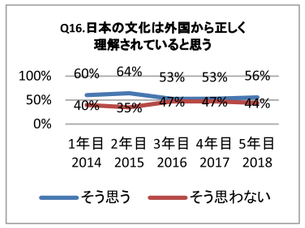


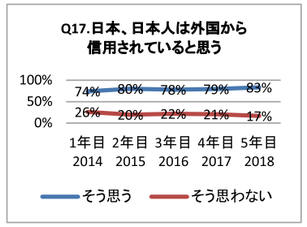


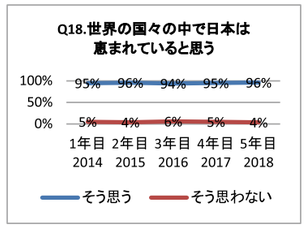


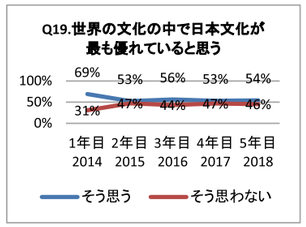


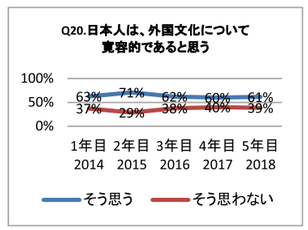


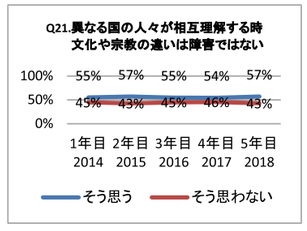


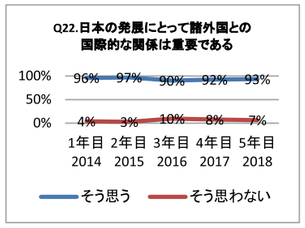


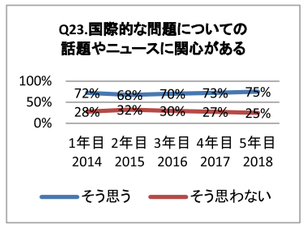


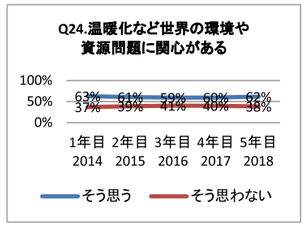


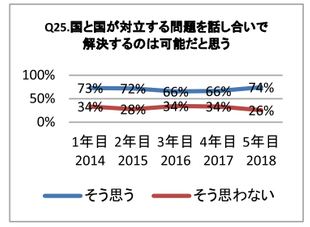


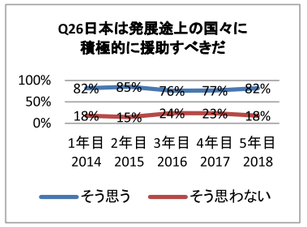


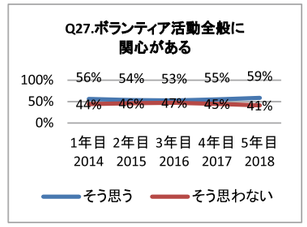


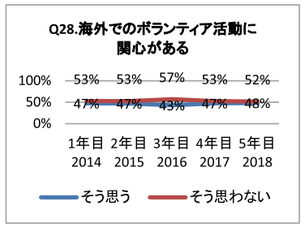












関西学院大学での留学・国際関係プログラムに参加した高等部出身者数の考察

＜関西学院大学での留学・国際関係プログラムの内訳＞
外国語研修・中期留学交換留学・ダブルディグリー留学・国際学生セミナー・フィールドワーク等
国際協力プログラム・学部・センター主催プログラム・その他

以上のプログラムに参加した関西学院大学生に占める高等部出身者の比率から考察をする。

全大学生（約6,000人）に占める高等部出身者は例年約5％である。また、2017年度までの大学生に占める高等部出身者は男子のみであるが、2018年度の大学1年生は共学化1期生である。

スーパーグローバル大学である関西学院大学は留学に力を入れていることもあり、留学に参加する全体の参加者はここ数年で大きく増加しており、2018年度は2,000人を超えるまでになった。ただ、2014年度から2018年度（1月末現在）の全体参加者に占める男子学生参加者の割合はおおよそ30％であるが、全学生数における男子学生数は50％以上であるので、女子学生のほうが圧倒的に参加者率は高い傾向には変わりはない。

そのような状況下にあってSGH指定を受けてから大学で留学する卒業生の参加者も着実に増えており、2018年度は卒業生が約50名程度増えたが、昨年度に比べ大学1年生での留学者数そのものの数が71名の増加であり、留学率は大きく伸びていると言える。高等部出身者の男子参加者数に占める割合は別表となっており、明らかに少ない男子学生の中にあって高等部出身者の大学での留学・国際関係プログラム参加者率は、全男子大学生に占める高等部生の割合からすれば依然高いと言える。

SGHに採択されたのが2014年（平成26年度）であるが、それ以前から高等部出身者の参加率は高いことがわかっていたが、さらにSGH事業を通して留学への関心が高まり、実際に参加している学生が増加傾向にあることがデータによっても裏付けられた。

＜2014年度から2018年度における留学・国際関係プログラムに参加した学生数＞

	全体参加者	女	男	高等部出身者	全体に占める男子学生の割合	全体に占める高等部生の割合	男子生徒に占める高等部生の割合
2014年度	950	656	294	31	30.9%	3.3%	10.5%
2015年度	1105	758	347	49	31.4%	4.4%	14.1%
2016年度	1477	965	512	92	34.7%	6.2%	18.0%
2017年度	1580	1098	482	59	30.5%	3.7%	12.2%
2018年度（1月末現在）	1580	1338	673	110	42.6%	5.4%	12.8%

＜資料＞

2018年度入学生 関西学院高等部教育課程表

文系コース

教科	科目	標準単位	履修単位数 1	2	3	計
国語	国語総合	4	4			4
	現代文B			2	2	4
	古典B			2	1	3
地理歴史	世界史A	2		2		2
	日本史A	2		2		2
	地理A	2			2	2
公民	現代社会	2	2			2
	政治経済	4			2	2
数学	数学Ⅰ	2～3	3			3
	数学Ⅱ			3		3
	数学A		2			2
	数学B				3	3
理科	物理基礎	2			2	2
	化学基礎	2	2			2
	生物基礎	2	2			2
	地学基礎	2		2		2
保健	体育	7～8	2	2	3	7
体育	保健	2	1	1		2
芸術	音楽Ⅰ	2	2			2
	美術Ⅰ	2		2		2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	2～3	2			2
	コミュニケーション英語Ⅱ			2	3	5
	プラクティカル・イングリッシュⅠ		2			2
	プラクティカル・イングリッシュⅡ			2		2
	英語表現Ⅰ		2			2
	英語表現Ⅱ			2	2	4
宗教	聖書	3	1	1	1	3
家庭	家庭基礎	2		2		2
情報	情報の科学	2	2			2
必修選択				2		2
選択授業（グローバルスタディを含む高大連携科目より8単位）					8	8
（履修希望者のみ）グローバル・スタディ			-1	-1		-2
総合的な学習の時間		3～6	1	1	1	3
ホームルーム		3	1	1	1	3
総履修単位数（総単位74単位以上）			31	31	31	93
総履修単位数（グローバル・スタディ履修者のみ）			32	32	31	95

理系コース

教科	科目	標準単位	履修単位数 1	2	3	計
国語	国語総合	4	4			4
	現代文B			2	2	4
地理歴史	世界史A	2		2		2
	地理A	2		2		2
公民	現代社会	2	2			2
数学	数学Ⅰ	2～3	3			3
	数学Ⅱ			3		3
	数学Ⅲ				4	4
	数学A		2			2
	数学B			2		2
理科	物理基礎	2		2		2
	化学基礎	2	2			2
	生物基礎	2	2			2
	地学基礎	2			2	2
	化学			4		4
保健	体育	7～8	2	2	3	7
体育	保健	2	1	1		2
芸術	音楽Ⅰ	2	2			2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	2～3	2			2
	コミュニケーション英語Ⅱ			2	3	5
	プラクティカル・イングリッシュⅠ		2			2
	プラクティカル・イングリッシュⅡ			2		2
	英語表現Ⅰ		2			2
	英語表現Ⅱ			2	2	4
宗教	聖書	3	1	1	1	3
家庭	家庭基礎	2		2		2
情報	情報の科学	2	2			2
必修選択	物理・生物				4	4
	日本史・美術				2	2
	応用数学・政治経済				2	2
選択授業（グローバルスタディを含む高大連携科目より4単位）						
（履修希望者のみ）グローバル・スタディ			4	4		
総合的な学習の時間		3～6	-1	-1		-2
ホームルーム		3	1	1	1	3
総履修単位数（総単位74単位以上）			1	1	1	3
総履修単位数（グローバル・スタディ履修者のみ）			31	31	31	93

＜資料＞　生徒成果物・活動の様子（フォトギャラリー）

GGPグローバルセミナー

認定NPO法人ジャパンハート最高顧問　吉岡秀人氏

3年生学年礼拝　五十嵐駿太氏

PHD協会よりサンダーモー氏の研修報告

特別活動

チャーチル杯争奪全日本高等学校英語弁論大会全国2位

PHD協会研修生とGLP生徒との特別授業の様子

成果発表会

フィールドワーク参加者によるパネルディスカッションの様子

GSⅢインドネシアとのSkypeセッションの様子

GSⅡ作成　成果発表会用リーフレット

GSⅠ作成　成果発表会用リーフレット

平成26年度指定スーパーグローバルハイスクール
研究報告書・第5年次　平成31年3月　関西学院高等部

発刊日：平成31年3月25日
発行所：関西学院高等部
〒662-8501　西宮市上ケ原一番町1-155
TEL.0798-51-0975（直通）　FAX.0798-51-0973
印刷所：タカラ写真製版株式会社